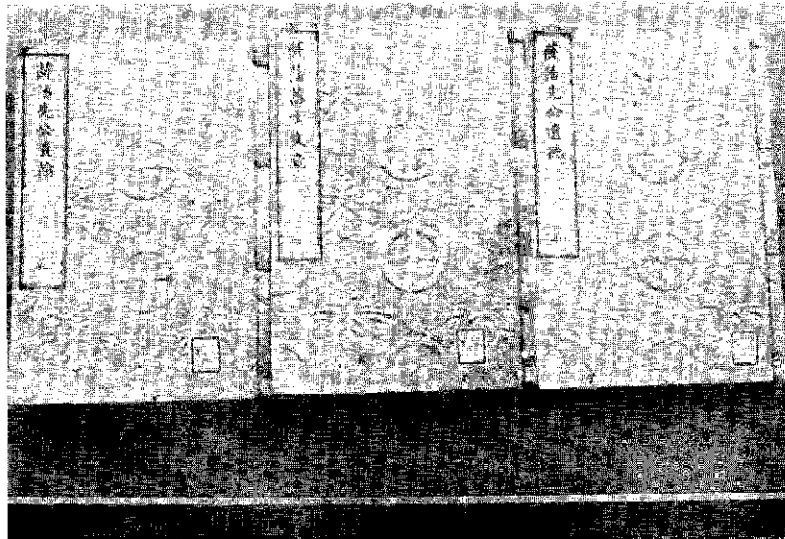
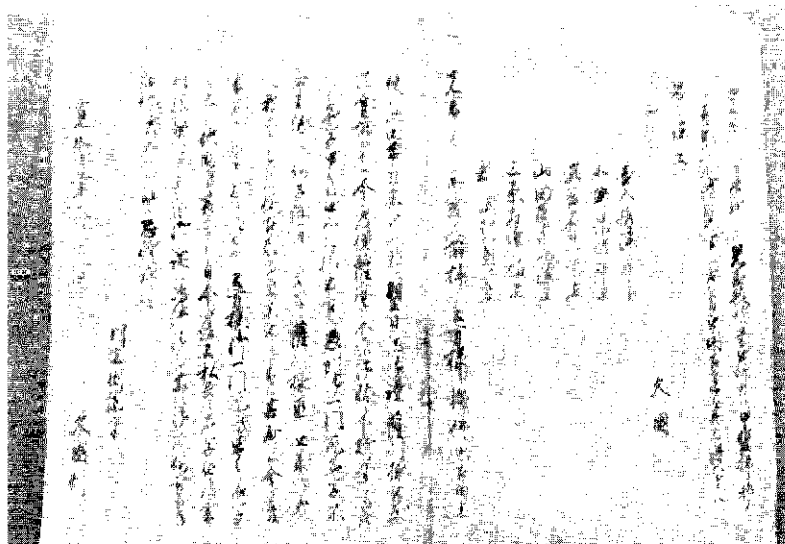


鹿児島県史料集(18)

薩藩舊士文章



玉里文庫本薩藩先公貴翰・舊士文章・先公遺徳



同薩藩舊士文章部分（3号）

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料第十八集として、ここに「薩藩舊土文章」を発行いたします。

本書は戦国末期から近世初頭にかけての薩摩藩の重職および平士の書簡など三百点ちかくを集録したものです。

史料刊行がこんなにちまでとどこおりなくつづけられていることは県史料刊行委員の方々の並々ならぬご努力の賜にほかならないのですが、今回は、鹿児島大学法文学部の五味克夫教授おなじく教育学部の桑波田興教授の両先生にお願いして、編集・校訂・校閲を進めていただきました。長い期間にわたる両先生のお骨折りに対し、心からの敬意と感謝を捧げたいと思います。

県史料の刊行は、県立図書館の事業の一つとして進められているものですが、これは資料の保存をかり研究者の利用に供しようとするものであります。

皆様のご研究に少しでもお役に立てば幸いに存じます。

昭和五十三年三月

鹿児島県立図書館長

小 迫 義 雄

解題

鹿兒島県史料集一の一つとして「薩藩先公貴翰」と「薩藩舊士文章」とを併せ刊行することとなった。(印刷その他の都合で分冊出版することになり、はじめに「舊士文章」を次に「先公貴翰」を刊行する。)共に中世末期から近世前期にかかる書簡を中心とした史料集である。題名の如く「先公貴翰」は主として薩藩歴代藩主の発出した掟・書状等で、「舊士文章」は主に藩老、藩主の発出した書状等である。

「薩藩先公貴翰」は鹿兒島大学図書館所蔵玉里文庫本によった。乾坤全二冊。同本は奥書(坤)に「原書以亡岩切清太実和本写之、明治二十年八月、筆者児主五兵衛、同二十一年三月二日組合、同人、五代徳夫」とあり、島津久光の玉里島津家において岩切本を書写校正したものであることがわかる。

ところがこれとは別に鹿兒島大学図書館所蔵岩元文庫本の中に、映入りの四冊本があり、乾坤それぞれ二冊に仕立てられているが、はじめは乾坤それぞれ一冊の全二冊本であり、その各々の一枚目の右隅下に小型朱印が押捺されており、岩切の名がよみとれることからこれが玉里本の原本又は副本ではないかと推測し、内容の逐一について大略対照したところほぼ間違いないと思われるに至った。詳細については省略するが、本文中「実和考」として実和の考証をのせた箇所があり、玉里本にはそのところで「岩切清太也」と朱書を加えていることなども一つの証拠となろう。但しこの事実に気づいたのは既に玉里本による書写完了後のことであり、また玉里本が岩切本を忠実に書写、校訂を加えていることが確認されたため、あらためて岩切本による原稿作成対校等の作業は行

なわなかった。

このようなことから本史料の作成にはいよいよ岩切実和が関係している可能性が濃厚と思われてきたが、その内容についてみて後述の如く実和が幕末期川内隈之城の押役であった身分柄にふさわしく、在地の御仮屋文書をはじめとする地方史料をかなり丹念にみているようにうかがえる。先公の中、忠良、貴久、義久、義弘、歳久、久保、家久、光久代についてはほぼ代表的な公私の書簡が収録されているが、綱久、綱貴代以降においては「薩藩旧記雑録」等にも収録されていない地方行政関係文書が収録されており本史料の一特色となっている。これも編著書の立場を反映しているものと考えられる。もともと本史料作成の場合、一々良質の原文書によったと思われるものは少なく、多くは不備な転写本によったかと思われ、また読解力の問題、時間的制約等から少なからず誤脱簡処のみうけられることも事実である。今回の刊行に当っては気付いたかぎり、また一部良質の刊本、写本によって補正しうるものについては適宜書きあらためたが、底本の体裁を著しく損ずるおそれもあるので一々厳密な校訂補入は施していない。

また他に異本の一つとして鹿兒島県立図書館所蔵の「公翰録」がある。

「公翰録」は全三冊の小形本で巻末に「本書川村俊秀氏ヨリ借用致、明治二十六年写終、共二参巻也、」と記されている。内容は先公貴翰とほとんど同じで異なる所は慶長五、六年の関が原戦以後の戦後処理に関する類の往復書簡四十余点を脱していることと、先公貴翰にみられる若干の編年の乱れを修正して十数点の文書の順

番をいれかえていること位である。前者は徳川家々臣の発出した書状が多いからむしろ異質のものとして排除したものかもしれない。

「公翰録」の名は「先公貴翰」の公と翰の字をとって名付けたかと思われるが、内容については或は「公翰録」のそれがはじめのもので、これに若干増補を行ったのが「先公貴翰」の内容であるのかもしれない。なお検討を要するところである。

「薩藩舊士文章」は鹿児島大学図書館所蔵玉里文庫本によった。全一冊。同本は奥書に「原書以亡岩切清太実和本写之、明治二十一年三月十七日筆者竹内勘助、児玉五兵衛、同年八月十日紀合済、平岡之隆、五代徳夫」とあり、明治二十一年島津久光の玉里島津家において岩切本を書写校正したものであることがわかる。

収載文章（書簡）の中、とくに目立つものは藩家老等近世初期島津家々政を担当した重職の発出したものである。今収録点数の多い順にあげれば、伊勢貞昌の三一点を第一に、川上久国の一八点、新納忠元、山田有栄、島津久元の各一一点、島津久通の一〇点等があり、以下喜入忠政、島津久慶、北郷久加、鎌田政近、三原重庸、比志島国貞、伊集院忠棟等のものが各五、六点である。

薩藩舊士文章の名の付された所以であろう。しかし他に豊臣秀吉一九点徳川家康一〇点をはじめ、近衛信尹、本多忠純等薩藩士以外の名士文章も含んでいる。また重職以外の平士の書簡も一、二点ずつと個々の数こそ少ないが、全体では百数十点と半数近くをしめる。この時代における行政、民政上の特に興味深い事件に関連のある書簡等を採録したのであろう。先公貴翰と違って配列は編年順ではなく、大体発出者別、事項別となっているが、必ず

しも厳密なものではない。編者による年紀、人名比定も間々行なわれているが、これまた正確なものとはいえない。

たとえば九二号の文書は九三号の文書が吉田兼里の島津家々老宛の書状であるところから同姓宛の文書ということで併記されたのであろう。九二号文書の内容は諏訪神主宇宿氏の要望により神道秘法社法等につき教示を認めることを通知したもので九二号文書と何の関係もないむしろ九三、九四、九五号文書の方が宇宿氏諏方社別当寺安養院の關係文書として関連性がある。九一号文書の内容は文永の役のと計画された高麗出軍の催促状ともいふべきもので久時は薩摩国守護島津久経であらう。この文書は薩藩旧記雜録前編五所収の雜抄採録分でそれによれば月日は後三月五日、宛名は吉富次郎である。吉富氏は薩摩郡一分郡司で薩摩国御家人である。恐らくこの文書を誤写し吉田と読んで併録したのであろう。年号の読み方にも自信がなく「本ノママ、弘治歟」とし、戦国期以降の書状を内容とする本史料集に採録してしまったのは編者の学識にいささか疑問を抱かせる材料を与えたことになり、他の引用文書にも十分な史料批判を必要とする警報を出さざるをえない結果となった。

鹿児島県立図書館所蔵「異本薩藩舊士文章」は書写の際順序を紊したこと等の他、内容に異なるところはない。ただ虫損箇所が玉里本に比して増しており、字句にも若干の異同がある。玉里本以後の書写か、或は玉里本の原本である岩切本の別本からの書写か明らかでない。「薩藩先公貴翰」と違って岩切本の所在を確認しない現在、これ以上の考察は困難である。しかし本史料も前史料と同じくその原本所蔵者である岩切実和その人と密接な關係のあ

ることが認められ、二四五号、二四九号の文書の如く水引泰平寺において己未（安政六年）正月廿四、三日に実見との記載や、二七六号文書の如く記録所々在の注記を加えていること等から隈之城押、岩切実和編著の推測はほとんど間違いないまい。

以上の推測をさらに裏付けるものとして「薩藩先公遺徳」上、中、下全三冊の存在がある。同書は同じく玉里文庫本、その下巻奥書には「原書以亡岩切清太本写之、明治二十一年一月十七日、筆者折田信夫、同兄玉五兵衛、糺合平岡之隆、同五代徳夫」とあり、同書が玉里文庫中、前出史料と共にいわば三部作といった体の史料であることを思わせる。そしてこの「薩藩先公遺徳」については次の序文があり、また同書の内容からみても岩切実和の著述であることは疑いのない事実である。

夫某実和嘉永五壬子の年四月初の五日隈之城抑職の命を蒙り、爰に在勤する事凡十年、徒然の慰に諸々の書籍を閲ふ、或時孟子滕文公の篇を讀に、飽食暖衣逸居して無教則禽獸に近しとあり、されハ某も日々何の勤勞もなく既に六十になん／＼たる光陰を空しく送り徒食せしハ彼無教と等しく其責重し、故に思へらく、いにしへ知足軒友山ハ^{大道寺}内蔵之介 享保十二丁末の年八十九歳にして落穂集を編集し、或ハ府下の志士伊集院兼喜ハ^{弥八郎入道}道林 明和八辛卯の年八十歳にして薩陽落穂集を編集し、清水盛香ハ^{源兵衛}盛香 明和七庚寅春六十五歳にして盛香集を編集し、嗣子盛容に附興す、高雲堂周山翁ハ^{俗名末川伊}文政九丙戌八十八歳にして仁君遺名誌を著述す、如斯老の至るにさへ勤勞し其成功を残されしかハ今専杜子の輩士道を研窮する一助の書籍となりぬ、然るに某も彼四士の志に倣ひ先公の御賢徳、且ハ旧士の嘉言善行を諸々の旧記より拾ひ集めし

に、何れも数ヶ条に及び尤感慨に不堪ハなし、依て愛孫清一郎実次に親しく語り聞かせばやと思へと今年纔に三歳なれハ心に任せず、責て某が素志を序文に書記し置、夫薩州の爲士者は幼年より只管先公の御賢徳を仰き、旧士の実行を慕ひ、盛長するに従ひ、広く聖賢の書を讀、且ハ武術を修練し、克く身を修め、父母に事へて孝を尽し、君に事へて忠を尽さハ吾家おのづから安寧ならん、此巻を名付て薩藩先公遺徳といふ、長く子孫に残さハ某か徒食安居の罪も免かれんか、今年五十九歳にしてかく隈之城旅館におひて書記する事然り、

萬延元年庚申十二月下旬

岩切氏実和 謹誌

岩切実和についてはその履歴等、なお明らかにしないが、幕末の一時期隈之城の押役として同地に赴任していたことは「川内の棟札（川内市史料集2）」隈之城都八幡社安政二年の棟札に、「地頭伊勢雅榮」の次に「押岩切清太」とあることから明らかで、篤学の士で史書の編さんにこころざしていたことを知り得る。

さらに玉里文庫中には他に三本岩切実和関係の史料のあることに気付く。一は「御治世年表」であり、奥書に明治二十年岩切本より写すとある。二は「名士法号鑑」であり、奥書に明治二十二年岩切本を以て写すとある。三は「平佐城責記」で奥に「此書付ハ隈之城押役岩切清太殿より借入、嘉永六丑年八月九日写之取者也」と書き加えがある。また他に岩切実和編集の明らかなものとして薩藩叢書収録（薩藩旧伝集四）の「伊集院俊矩言行録」の元本がある。言行録の書出しに曰く「此書は岩切実和被集所也、実和伊集院俊矩を被信仰事誠切なり、而して俊矩の終身始終の善言行を

諸書の内より正く無誤ことを挙取り又は古老の物語の実はたかはざる事をのみ取り集て、獨觀集と名付被書置しを、予も亦岩切氏と同じく俊矩を信じ仰くこと厚きによつて、借用致し写置之畢、実和の序文雖有之写置くに暇あらず候、又他より借用可写置也、于時文政六年己未八月十日政福謹書」とある。以て岩切実和の見識を偲ぶよすがとならう。ここに本史料集を刊行するに際して、収蔵史料の太要とその作成に深く関係したと思われる人物の片鱗を紹介して解題とする。

(五味克夫)

例言

一、本史料集には鹿児島県立図書館所蔵、「薩藩先公貴翰」、「薩藩舊士文章」を載録した。

印刷等の都合で本史料集は二部にわけ順序をかえ、第一部として「薩藩舊士文章」を第二部として「薩藩先公貴翰」を刊行する。

二、原稿作成に際しては底本として県立図書館所蔵本の原本である鹿児島大学図書館主里文庫本を用いた。

三、原稿作成の際、鹿児島県立図書館所蔵「公翰録」、「異本薩藩旧士文章」を参照した。また一部については島津家本「薩藩旧記雑録」(前後編・追録)等と対校し、明らかな誤脱は補正を加えた。

四、印刷の都合上、漢字については当用漢字に改めたものが少なくない。又変体假名もすべて通用体の平仮名に改めた。花押も省略せざるをえなかった。

五、誤読、欠脱等については右傍に括弧を以て私見を記し、不明箇所、難読箇所は□を以てあらわし、或は右傍に(々々カ)マ)の如く記載した。

六、朱字は括弧「」で示した。

七、底本によればおおむね各文書のはじめに「一」何々と「一」を記入しているが、本史料集では便宜上、それぞれの文書の頭に算用数字の一連番号を付した。

八、本史料集の作成に当り鹿児島大学図書館より閲覧調査の便宜を与えられた。記して謝意を表する。

九、本史料集の原稿作成、校訂は主として「薩藩先公貴翰」については鹿児島大学教育学部桑波田興が、「薩藩舊士文章」につい

ては同じく法文学部五味克夫が担当した。編集は両人が共同して当たったが読点その他細部についての統一はしなかった。解題は合議の上、五味が一括執筆した。

薩藩舊士文章

1 今度陣中之大將役兩人江被仰付候、其上談合衆六人被召加候間、何事茂此方江不及被得御意可申調候由、以兒玉筑後守被仰出候、甲斐掃部介、有馬左近將監江中含候間、可被聞召達候、恐々謹言、
正月九日
久国

豊後守殿

下野守殿

人々御中

2 急度申入候、仍今度陣中之大將役豊後守殿、下野守殿江被仰付候、各談合衆ニ被相加候間、諸事此方江不及被得御意、可被御病中之儀ニ付遠方江被申越候、而者延引可罷成候由、兒玉筑後守被仰出候、甲斐掃部介、有馬左近將監江中含候間、被聞召達候、其心得

尤ニ候、恐々謹言、

正月九日

久国

喜人撰津守殿

北郷佐渡守殿

渋谷石見守殿

山田民部少輔殿

三原左衛門佐殿

新納加賀守殿

以上

3 先書ニ如申南蛮人搦捕、公方様御機嫌ニ思召由、上使以池田帶刀殿被仰出候、翌日為其御禮、薩州様被成御登城候処、今度從薩摩參候御状ニ下野守と御座候而名字無之候、無心元様ニ出合候、惣別御一門衆名字不被書儀為何子細にて候哉と薩州様御直ニ被成御尋候、我等申上候ハ從古來名字不被為書候、其通ニ而今ニ茂書不被申由中上候得者、公方様御一門衆茂皆々名字被遊候、他国茂其分ニ候、自今以後公私共ニ皆々名字被為書候様堅可申下由御詫候、島津御名乗候御衆何方江茂被仰渡度尤存候、恐惶謹言、

川上因幡守

寛永十九年八月十八日

久国判

頼娃左馬頭

久政判

島津図書頭

久通判

山田民部少輔様

島津下野守様

家人々御中

4 中納言様始而御上洛之時分、其方親父臨や被成御宿候処、夫婦別而馳走被申候付、雖為少分臨や江米廿石、其方江七石宛先年より被遣候、今度其方江者八石加増、自当年向後拾五石之為御扶持候、仍為後口状如件、

伊勢兵部少輔

貞昌判

下野守

久元判

平野休右衛門殿

5 大隅国之内国府之城追手裏ニ建門、城内ニ候番屋少々番之者計差置山下ニ構屋敷、薩摩守有之候様ニ被仕度之由被差上繪図候、右之趣達上聞候之處、可被申付候旨被仰出候、被得其意候、
可聴

恐々謹言、

寛永十三年三月十四日

堀田加賀守

正成判

阿部豊後守

忠秋判

酒井讃岐守

忠勝判

土井大炊頭

利勝

薩摩

家人々御中
中納言殿

人々御中

6 大隅国之内国府之城追手裏口ニ門をたて城内ニ番屋を作り番之者計少々差置、山下ニ屋敷を構薩摩守有之様仕度之由中上候処、右之通可申付旨御奉書之趣長奉存候、

島津下野守

伊勢兵部少輔

(寛永十二年)

7 以上

追而令啓候、如仰薩州様国分江被成御住宅度由酒井讃岐守殿被成御披露候処、御免許候由御奉行衆御連名之御奉書出中、誠目出度奉存候、黃門様被成御下国候ハ、追付此段可被仰出由候間、御承可被成候、委細者野州老可被仰候間不能詳候、恐惶謹言、

六月十五日

川上左近將監

久国判

伊勢兵部少輔

貞昌判

彈正大弼様

山民部少輔様

鎌出雲守様

三左衛門様

8 御判
龍伯公御判也

御判
惟新公御判也

天爵起請文之事

一 老々条被仰聞候愚意申上候儀向後永々無別心奉勵御奉公、不限彼儀洩中間敷事、

一 世上いか成計策有といへとも其案ニ不入御奉公可申上事、

一 他国之物沙汰承次才可致言上候、我々進退之儀於被聞召付者可被仰聞候段奉仰候事、

右条々於偽申上者

神之名

天正拾七年五月廿四日 本田因幡守正親判

八木越後守嘉等判

比志島紀伊守国貞判

鎌田出雲守政近判

伊地知勘解由左衛門重元判

図書頭忠長判

宗員判

阿多掃部助忠長判

左馬助増宗判

平出左近將監藏宗判

伊地知伯耆入道増也判

平田豊前守宗位判

新納武藏守入道拙斎判

村田雅樂助経宣判

出代刑部大輔清辰判

吉田蔵人久延判

山田越前入道利安判

稻留新助長辰判

伊勢雅樂入道任世判

平田美濃守入道舜盧判

川上源五郎久辰判

起請文前書之事

一 国分御上様江我々親子進退之儀ニ付御内談申上儀無御座候、勿論從国分被仰儀無之候事、

一 菊袈裟事、国分御上様御養子ニ罷成由風聞仕候儀努々不存寄儀候之条、国分又何方江茂不致内談候、於自今以後此等之企申間鋪候之事、

一 何篇奥州様御為ニ可惡儀を存企間鋪候、自然世上於取沙汰^茂承付儀候者早々可申上候事、

右之旨若於偽申中者神文

慶長十七年壬子六月十六日

又四郎

忠仍判

きくけさ

血

比志島紀伊守殿

起請文前書事

一 今度龍伯様又四郎殿を少將殿ニ被思召替、從京都御朱印を御申下之由乍承付不致言上、構疑心申候由被聞召通之通被仰知驚存候、就夫拙者事者毛頭不承付之由重畳申上候処、無異儀被聞召分、此上者無御別儀謂共条々被仰聞、誠ニ安堵仕候、於自今以後如何様

之讒人有之候而如右雖申妨、不殘疑心互ニ御熟談之上を以御家御長久之調儀可仕外不可存疎略候、若此旨於偽申上者

11 起請文前書之事

一今度之謂事、拙者毛頭不存寄通申上候儀無殘所被聞食分安堵仕候事、

一自今以後如何様之讒人有之候而雖中妨無腹藏申上候ニ付、無御疑心御熟談之上を以当家長久之調儀所仰候事、

一從京都御暖之儀被仰下候間、当家之御為と存御暖可然之由申候ニ

曾而構私曲非中儀候事、

右之旨於違背者

御神文如常

慶長七八月十日

惟新

進上

龍伯尊老様

12 忠恒公御誓詞

一龍伯公武庫様御事、聊分を不奉得可抽忠孝を尤不新雖順儀候、平世之存置哉我等就進退御兩殿様より假無理非道之雖蒙御暖候、不違孝儀、為拙者毛頭不成鉾楯之志を、心底當時無心許時節候間、弥此憤甚重候、如何様之忠節之仁たりと茂於逆儀諫言而不可致同心候事、

御家相統之儀御兩殿様御分別を以被仰付候、寔ニ一世ならぬ面目此等之御高恩以何事可奉報候哉、内々對御家惡逆之仁在之而御兩殿様別而御心遣之段連々深々と被仰聞候、片時茂無忘却候条如何

様以時節令誅罰、御家安泰之可勵忠貞候、然者彼輩被入魂之衆向後糺輕重可処嚴科事、

一惣御家中定御兩殿被召仕人数、又我等可召仕衆当分者可相分候、因茲人々心持可入事、拙者事者いづれを不分諸侍同前ニ可相守候、勿論奉公之淺深ニより其賞罰可有之事、

右条々各以同以士卒皆令帰服御家繁榮之調儀可為本望候、於此旨偽者、

以上

「此ヨリ下ニ付ク、蓋書翰ノ上書ナラン」

新納武藏守忠元

星野九郎殿

御返報

13 如仰連々雖可申承候、立柄就不自由無音罷過候、誠ニ所存之外候処、

預御懇問本望此時候、仍肥州表之儀無殘所屬御所勘候、千勝万勢候、就此等之儀太刀一腰并百疋被懸御意候、御丁寧之至吉悅至極候、殊ニ筑後表之儀御談合最中候之処、豊州敗北之由候、尤目出候、弥諸口御静謐不可有程候、雖無申迄候、倍以御賢慮貞心之御覺悟專一候、委細猶御使者申治之条不能詳候、恐々謹言、

九月廿六日

忠元判

星野九郎殿

御返報

14 此御当家流日取雖為秘傳、惟新様以御意令和伝畢、不可他見者也、

元和式年五月二日

岩切三河守善信判

右是枝長兵衛殿所ニあり、本書ニ宛なし、

15 以上

此度之就御配當ニ、貴所先祖從以來之御佗申可被成候得共、此節御配當ニハいつれの御佗等^{其脱カ}御法度之由被仰出候間、不罷成候、さてハ追而時分を以被成申候得、其刻ハ涯分取次可申候、隨而先年水保江肥後勢參候砌、貴所事於黒渡船等御馳走ニ而長島之往通事關ニ無之様ニ御才覚、于今無忘却候、ケ様之儀も後日者可致披露候、恐々謹言、

本田六右衛門尉

慶長十

三月五日

大井右京亮殿

人々御中

16 猶々貴所別而粉骨之由御名譽候、以上、

一書令啓候、然者今度弓削藏人内之者京之町江引籠居候付、自町中搦取候事、因難成、其旨各江相理候処、不移時押入、被手籠、即付繩被引出候つる由、頃承付候、尤男役とハ中なから夜中せはき所ニ而奇特ニあやまちも無之、冥加成仕合無比類候、

^(家久)黄門様御上洛候時分、具ニ可達上聞候、猶委曲喜人休右衛門尉殿、相良玄蕃九殿可有演説候、恐々謹言、

十二月十日

伊勢兵部少輔

貞昌判

中村主水佑殿

御宿所

17 尚々御自分馬之外駄賃馬之事馳走ニ而少も遅くなき様御いそぎ之事ニ而ちそふ可被申候、以上、

^(家久)島津陸奥守殿御妹子江戸江御引越候付、駄賃馬貳三百疋入候間、

宿々ニ而馬なき所候得者路次遅々候とて、自分之小荷駄五十五疋女房衆ヲ乗セ何とも入次才調出し、路次遅々なき様ニ馳走可被申候、右之^{本ノママ}分然本田佐渡守殿より中来候間、則申越候者也、

板伊賀印

京都より江戸迄

宿々年寄中

18 御使札并為御音信、鉄炮廿萬送給悦着之至候、將又庄内之儀、龍伯、惟新江申候之間、何様ニ茂被異見尤候、猶山口勘兵衛尉口上

中含候間、不能具、恐々謹言、

十一月廿七日

家康御判

(薩摩少將殿)

19 戌之刻時分也、

猶々從此方同心可申者無之候、誰そ御出ニ而も候ハ、御供可申候、

如仰昨日者於殿中懸御目候、御前ニ而候之故、然々不得御意候、然者明日惟新様ニ御酒進上申之覚悟ニ候、御取成奉頼候、隨而者今日御茶可被下之由候、忝存候、斯以參可得御意候、恐々謹言、^{本ノママ}

五月十三日

^(山田)有栄判

道南様

御報

山民少

20 急度申入候、仍今度軍衆都合式万程之御賦ニ而候処、皆々心次才

ニ大勢召列之由軍衆水主台三万程可有之由賦方大形考ニ而被中
候、米之伴^{本ノママ}五千石御座候、人数一月之兵糧充候、其内早廿日分相
渡候、きれ可申候間、人数被召残候歟、肥前、肥後杯江御借用歟、
急候衆可有御沙汰由物奉行被中候、承候而就其日向庄内肝付表根
占杯之衆者可召留、余り大勢被召列候衆を残し置御談合尤候、恐
々謹言、

正月十八日

川上
久国

豊後守様

喜入摂津守様

北郷佐渡守様

淡谷石見守様

山田民部少輔様

新納加賀守様

参人々御中

21

覚

楯之板三千枚
^{イ 貳三千枚トアリ}

長四尺四五寸は、二尺四五寸厚サ貳寸之内外何ほとに候、

正月十四日

右者松平伊豆守殿より御書出候長崎ニ而御用之楯之板此寸尺ニ而
候、数成次才可被召調候、急用之候間不削共不苦之由候、其心得
尤候、

正月十八日

出水囃衆中

川上左近將監^{父國}

22

覚

一下納屋より年中商賈方ニ付役儀被定置候間少茂無未進其年々ニ浦
奉行可致合点事、

一魚塩の賣買納屋主執被仰付候間、所中并田舎方々荷売之者茂納屋
衆江遂案内売買可致事、

一魚塩の船之儀自他之諸浦ニよらず可漕来時者勿論納屋衆江可買取、
たとひ脇より買者有共、納屋主取不存候ハ、可爲曲事之事、

右如相定候堅可被仰付者也、

元和元年九月十八日

伊兵部少輔

町勝兵衛尉

比紀伊守

山田民部少輔殿

23

追而令申候、大山三次殿不慮之儀出来候而御成敗を被仰出候、然

者大井七郎^{イ 七左衛門}右衛門殿拙者兩人江被仰付、戊正月四日ニ伏見より大坂

ニ罷下り、明五日三次殿江腹切セ中候、年之初之御奉公ニ大事之
儀を被仰付、心遣ニ存候処、無異儀三次殿腹被申外聞能御使申済

令満足候、左候而今月七日伏見江参り、同九日殿様御供仕、又大

坂江罷下り候、此等之趣爲御意得申事候、謹言、

右馬藤七兵衛也

藤七兵より

純房判

正月十二日

千さへもんとのへ

最初ニハ関國之時分故、我等ニ茂能存候、内々申上候茂上を前と爲
 申者昔ハ日州伊東の普代勇士ニ而候処、御当家属御旗下、貴久公
 三ヶ国御掌之比より御家ニつかへ、其子伊賀、後ハ正徹と申候、此
 子余多ニ而候、父子度々の軍忠勝不可計、別而正徹嫡子肥後の国
 花山の城、義久公被攻落之時爲被預之由候処、一郷起、揆却而及
 比類城、終ニ致戦死候、其弟民部歳久ニ被讓之処、数度之働終ニ
 太閤公御下向之時不下宮之域料より歳久切腹被仰付候刻、名譽之戰
 死仕候、右之惣領之一男刑部左衛門者義弘公江つかへ、石田逆乱
 之時濃州関ヶ原ニ而今弁慶と名乗、義弘をのけ候而終ニ惟新公慕
 御跡、名譽之切腹前代未聞之仕合、於御家中無隱候、此納右衛門
 事、其二男御舍弟殿江從中納言殿被相付候、其一筋をも愚痴ニ存入
 候哉らん、何より御諫之様成事を申上、無御同心由申候而短慮ニ加
 治木ヲ罷出之由候志者不忍候得共、兵庫殿之背御意ニおひてハ先
 一往可被召修候哉など御口能候間、貴寺江被入候、如此御心付候
 間、後年ニハ本復可仕候、我等へも存候、如存我等ニも此六年以
 来國政不存候得共、被仰聞儀茂なく候処、如何様ニ成立候哉、是
 非と可被成御成敗由以而使被仰入候、北郷佐渡守取次之由候、此
 両三日以前粗承、川因江茂山民へもケ様ニ可成立事ニ申含候ニ其
 上ニ而兼々被成御家深々持明様之御寺をも不憚被押懸、貴僧江ハ
 其身切腹可仕与申出、如此など表裏之御口上無是非仕合か、を不
 得申候、我等老人而已ならず奪喰死去候得共、曹洞一つは貴様御
 老人を奉尊候処、曹洞之佛法滅之時至と申事ニ候、水暗山之御
 出離より無余儀存候、門外御在所理法茂濟候、扱我等恐可申請候
 間、是非〳〵我等領分ニ一節被寄寺駕候得、古来のなしみ俗出候
 よらす古郷難忘候、本文ヲ御習候ハかまんしやうしきとこそ可存

候、此旨偏ニ可被成御同心旨爲可申上、懇波成合城之介いつくま
 ても参候得と申付候、恐謹謹言、

七月朔日

鳴津彈正久慶判

守隆大和尚様

拜上

右ニ付猶々書

いつくも同断ニ候、かねて御されことにも被仰候つる、先々我か
 たへ御任候へ、不以合申事ながら如此候、此上ともいつくもくれ
 候はんと存参らせ候、此者かたより申越候へ、道ひろくとやらん
 仕者爰と存候、これハ〳〵しやうしきたるへきと存候、將又不人事
 なから申候、納右衛門臨終ハ昔物語ニも不承由申候ハねつかしむ
 ねす切と腹をせし事已上十方ニ而も不死候つると申候、むねをき
 さきふくを取出し見せたるなど聞へ候、比、刃ハ少略候と存候、
 手つからむねをはり候、乍去諫而死スルハ同理不中、只幸と不幸
 とマテ浮世ハ道ものと弥存候、不眠不欲かよく候、門外一旦御出
 候茂同前とま、是非〳〵ニ後生之儀ニ付一言頼申所間、私及領分
 御越奉待候し、大膳も夜前しのひ候而氏瀬まで遣候得共、はや御
 立之由にて候、残多候由申候、老母ハ老人のやらん〳〵各申候、
 我等茂御向へ申候つれとも不成候つる、天然自然之御不縁ニ而乍
 其上私かたへ御越直ニ可忝候、振禿筆候、以上、

御茶入之御礼爲彼是種子嶋江御座候御藏入、不殘御給候、忝之由
 候而西村越前方江進上被成候趣具ニ致披露候、一段御機嫌能候間、
 可易御心、於様子者越前方江可被申達候間不能詳候、恐々謹言、

伊勢兵部少輔

九月廿七日

貞昌判

下野守

久元判

種子嶋左近太夫殿

御報

已上

八月二日之御状令披見候、然者御茶之御禮彼是ニ種子嶋御藏人四千石余御拝領候、爲御禮西村越前方江被爲差下候、念比ニ上聞仕一段御機嫌之儀共ニ御座候、殊更至拙者銀子壹枚預過分至極ニ候、猶越前方可被申達候、恐々謹言、

九月廿七日

下野守

久元判

種子嶋左近太夫殿

参人々御中

27

長助七良

祐記判

郷源左衛門

兼昌判

長六郎次郎

常通判

安大炊助

兼利判

洪舎人助

言

玄明判

28

文祿二年癸巳三月十四日肥前国於名護屋ニ作之、爲形見如此候、裏ニ末の露本の零や世の中のおくれ先立ためし成らん
右之通何方ニか稟書被致候由、

国分方舟加子置日之事、

本ノママ

一舟つきとまりのつゞ浦々にて舟よりおり不用前物すましき事、

一水主なた木取ニ付隙を尽すましき事、

一類舟のとまりにゆきをくれましき事、

右之旨氣任いたすにおいてハなにとやうニモ兩人之相談を以あ

件カ

つかわれへき證據如仰、

慶長十一年午二月十一日 山田越前入

理安

伊集院下野入

抱節

田中大膳進殿

本ノママ

安樂大炊助殿

参

29 薩摩船四枚帆

船頭 助四良

加子五人てるまかくせい卅六人

合四拾式人令帰朝候間無異儀可有御通候、

慶長貳年十一月晦日 嶋津又八郎判

船頭御奉行中

参

右御本書辻氏ニアリ

30 上方御弓箭以来、内府様江被仰隔付而

惟新様御一人之御氣遣最中候、就夫縦世上之人逆心雖有之、惟新

様迄不奉見捨、抛身命無二之御奉公可仕之事、

御為可能成儀承付候ハ、善惡共不寄實否可申上候事、付、御隱密之儀被仰聞候共、曾以口外仕聞敷事、

右條々於五違犯者、

松本党右衛門

慶長七年七月十五日

武秀

和田右京亮

秋寛

市来清右衛門

由付

鎌田與兵衛尉

政是

白坂宮内入道

為安

伊勢平左衛門殿

31 去ル廿四日之芳札具ニ令拜見候、仍那答院儀被仰出候処、不移時刻

切腹被仰付、死證被差上候、無二之御覚悟無比類候、殊更右之家

老衆多被仰付候事前代未聞御働共候、偏ニ御手柄共候、則幽斎使

ニ細事「三字虫」京都江差上申候、定而可爲御褒美「三字虫」幽斎

迄申「三字虫」不能細筆候、恐々謹言、

(文祿元年)

八月朔日

嶋津兵庫人道殿

右和田乗助殿家ニアリ

(前田) 利家判

32 昨日者態々爰許江御越候、誠ニ御心実之儀忝存候、さりながら御急

之故然々不申承候事今ニ口惜候、其地何たる新儀共候するや、左

様成時者ちと御注進頼入候、将又こ、元ハさむく候て迷惑候、今分ニ而ハかつゑしに可申候、何れ共以御面上可申入候、恐惶謹言、

慶長四

「八月十八日」

児玉四郎兵衛尉

實相判

新納四郎右衛門

忠陸判

吉田大藏允

清家判

平田三五郎

宗次判

わたせより

吉大藏

安樂大炊助殿

前原平兵衛殿

参入々御中「此等ノ名書詳ナラス」

ひら三五 児玉四郎兵衛

新納四郎右衛門

33 御用之儀ニ付爲御使者伊勢兵部少輔殿御越被成候、御口上之通可奉

得其意候、仍未御子様無御座候付而御養子之事被仰下候、先年御

下向之時分茂被仰聞候間、今以無忘却候、重而兵部少輔殿ニ被仰

下候趣弥其旨奉得候、大御所様十月時分者御下向被成候条、將軍様御一所奉得上意様子、山口殿迄啓上可仕候段伊勢兵部少輔殿并山口殿より御使者ニ中含候、御下向之時分迄ハ兵部少輔殿逗留如何ニ奉存候間、先御歸宅可然之由申談候、爰許之様体委曲兵部少輔殿可爲言上候間、不能一二候、恐惶謹言、

本多佐渡守

八月八日

正信判

羽柴陸奥守殿

（追而申入候、此書狀共御見分被成何もへ可被遣候、以上）
急度申入候、仍大坂之儀御無事ニ相済候間何方迄御出船候共早々御歸国可有候旨御意ニ御座候間、其御心得候而、御国元江御下可被成候、恐惶謹言、

本田上野介

（慶長十九年）
十二月廿一日

正純判

山口駿河守

直友判

（家久）
鳴津陸奥守殿

35 鳴津袈裟菊殿爲御替、北郷讃岐守殿御越候間其趣披露候処、遠路御造作御苦勞之由被思召、御前之御仕合殘所無御座候事、則袈裟菊殿御暇被遣、唯今歸路被成候、爰許之様体委曲宿老中可被申上候、將又貴公御事なつかしき由將軍様節々被仰遣、兼又此地御屋敷御普請以下如何ニ茂丈夫ニ被仰付候儀御造作共御苦勞共之由御提被成、彼是以御懇成御事、書中難中尽候、何そ面詳ニ積御事可奉得貴意候条不能一二候、恐惶謹言、

十二月廿六日

羽柴陸奥守殿

貴報

本田佐渡守

36 就関東立之儀從其許之出馬之事、梅北宮内左衛門殿江御乗可被成之由飯野より御意ニ而候、此等之趣梅宮江御熟談可然候、爰許より茂彼方江中理り候、又四郎様之御打立之日限今月廿七日ニ相定候、御油斷有ましく候、爲御存知候、恐々謹言、

正月十七日

平佐將

歳宗判

町羽介

久倍判

川上大炊介殿

町田右衛門佐殿

御宿所

乍重言其許より之乘馬之儀梅北宮内左衛門殿御乗可被成之由飯野より御意ニ而候、爲御存知候、片時茂御油斷有ましく候、

37 庄内之儀北郷依爲御旧地、幸侃被改無道、始都之城諸所拜領之、然者上様以御出馬各粉骨之地候志和地、山田、野々美谷雖被殘置候、数代御忠節之儀別而今度之御弓前頼母鋪被思召付、右三ヶ所御拝領候、次郎殿若年ニ候間、能々守立被抽忠貞、掌家弥御家被成連続御奉公可爲肝要候条、爲忠賞高三百斛宛被宛行畢、目錄別ニ有之、全可有領地之狀如件、

慶長五年十一月廿日

鎌田出雲守
政近

平山太郎左衛門

増宗

北郷源左衛門殿

土持撰津守殿

小杉丹後守殿

北郷喜左衛門殿

先日両度愚宿江御兄舞辱候、然其不懸御日、所存之外候、然者先年
関ヶ原御合戦之刻御親父別而被成粉骨候、書付進覽可申由大方存
候通以別紙申入候、恐惶謹言、

十一月十日

(山田)
昌巖

木脇刑部左衛門様

参人々御中

追加

一筆令啓達候、仍前木脇刑部左衛門殿関ヶ原一戦之刻為被成粉骨通
御尋ニ而候、愚拙事從富隈大垣江参候、富隈人数者嶋津中書殿御
備ニ可相付旨一戦之期被仰付候、中書老御備ニ罷在候、先手相掛
候とて中書老御掛被成候、我等茂其通御座候、聽而敵味方入乱候、
中書老早為被成御退と手前被官申候付、惟新様御傍江参候、刑部
左衛門殿長刀ヲ被為持今辨慶と名乗敵ヲ被為打、別而働為被成由
福山衆中黒木太郎次郎手前同心之人ニ而候、今ハ右近兵衛と申候、
爰許江罷居申候、委承申候、惟新様被成御除候、其御跡より御座
候、我等存儀ニ而候、其刻ハ御跡江可居体ニ無之時分ニ而候、乍
然敵したかひ候はて無為候、為存旨如此御座候、恐々謹言、

卯十一月十日 寛文三年

山田昌巖

木脇刑部左衛門殿

一義久・義珍御赦免之儀忝存付而不残心底人質進上并兵庫頭居城日
向之内ニ而候迎御理不申、明可申之由被及聞召候、左様ニ候得者兵
庫頭可有之所不相定可迷惑候間、右之飯野城付真崎郡又一郎ニ可
取之候事、

一大隅之儀物主可被仰付ニ雖相定候、右兩人初伊集院無親疎体被見
及候間、兵庫頭ニ大隅之儀可被遣と思召候事、

一此上者兵庫頭質物別ニ老人可出之由、又一郎儀者御側ニ被召仕、自
分之為部屋柄真崎郡被下候、其上御扶持方高上方ニ而可被仰付候、
左候得者兵庫頭覚悟相違候共、又一郎儀者不便ニ被思召候条人質
ニ成間舖候事、

(忠棟)

一大隅之内伊集院右衛門太夫居城ニ付一郡之儀者最前より右衛門太
夫ニ被仰付候条可得其意候事、

(羽柴秀長)

一嶋津中務太輔儀人質ヲ出、居城ヲ明、中納言ニ相付、上方江罷上
似合之扶持を受可有奉公之由神妙被思召候間、日向之内佐土原城
并城付之知行以下上候迎可被召上儀ニあらず候間、是又中務太輔
江可被返下候事、

一嶋津右馬頭儀者義久次才ニ致覚悟人質ヲ召列御本陣江相越候間、
向後迄ハ彼城相立、本知無相違様ニ兵庫頭可中付候事、

一北郷儀人質ヲ出候ハ、大隅之本知無相違様ニ可中付事、
一日向之内ニ北郷当知行千町計有之由候、是ハ国切之事ニ候間、人
質之外ニ子を老人又一郎同前ニ相詰させ奉公於有之者、右之千町
其身ニ可被下事、

一兩条ニ壹々条於相背者、彼北郷可被成御成敗候間、得其意彼城可取卷人数之事、

一中納言、毛利右馬頭、備前少將、大友左兵衛督、小早川左衛門佐吉川治部少輔、宮部中務卿法印、蜂須賀阿波守、長曾我部宮内少輔、尾藤左衛門尉、黒田勘解由、嶋津修理大夫、同兵庫頭兩國之人数を召具取卷討果可申候、左様ニ候ハ、其跡職ニ大隅之内之儀者兵庫頭可被仰付候事、

一右北郷於相背御下知ハ其表在陣之衆江悉不殘兵糧可被下候間、可得其意候、尚安國寺、石田治部少輔可申候也、

(天正十五年)
五月廿六日

(豊臣秀吉)
御朱印

嶋津兵庫頭殿

41 御料紙披見申候、仍源次郎暖之儀表裡之由尤言候、委細之段從兵庫頭殿可被仰候間令省略候、恐々、

九月晦日

家康

龍伯

42 虎之儀被仰遣候処ニ耳ニ肉骨腸色々取揃念入到来、別而悦ニ候、此上不入候間狩以下一切無用候、猶石田治部少輔可申候也、

卯月廿八日

羽柴薩摩待從殿

43 八月十六日注進狀御被見候、赤国之内南原城大明仁權籠付而去十三日取卷、同十五日夜令落城、其方手前首數四百貳拾壹討捕、耳、鼻到来、粉骨之至ニ候、最前番船切取度々手柄無比類候、弥働之

儀各申談肝要ニ候、尚増田右衛門佐可申也、

御朱印

44 七月十六日之注進狀今月九日到来披見候、今度番船唐嶋有之候而釜山浦江切々取出、日本通路相支候処ニ去十五日夜相働、番船百六拾余艘伐取、唐人數千人伐捨、其外江海江追入、津々浦拾五六艘其々悉焼捨之由手柄之段無比類候、以来迄番船之根切候事御感不斜候、仍帰国之刻可加褒美候、猶増田右衛門佐、石田治部少輔可申也、

八月九日

御朱印

45 此度於石口貴所御息御辛身不及申候、然者御息をハ急々帰申候、為其替貴所早々御立肝要候、其故ハ伊肥州被手負候而罷歸候、願娃殿茂吉田美州被手負候而同前ニ歸候へく候、穗北之事不審御察前候、不移時御立專一候、御油断不可有事候、恐々謹言、

天正四年七月九日

覺兼判

忠棟判

「上書力」

上井伊勢守

伊集院右衛門太夫

宮原筑前守

御宿所

46 其後者不申通無御心元存候、仍去晦日石城被召取、千喜萬悦大慶此事候、豊後より格護城事候得者、是を為手始、自爰ケ様之儀出来案中候、兼又七月於石口貴所御息御働無比類事候、其節如此之通早速可申入之処、不得好便罷過候、何様可達上聞事其隱有間鋪候、

將又當時平泉之見舞共被成候哉、外聞實儀不可過之候、必以而萬端可申承候事候、恐々、

天正四年十月三日

忠棟判

「上書カ」伊集院右衛門太夫

忠棟

宮原筑前守殿

御宿所

47 急度被仰遣候、又太郎渡海之刻より兵庫頭一手も不罷成、於高麗茂

有所茂無之由申越候、沙汰之限曲事候、併可被遂御糺明候間、又太

郎母同女房其外留守居其妻子召連、先名護屋江可罷越候、若令遲

参者可為曲事、猶休夢、淺野彈正可申候也、

極月晦日

大閣判

薩州和泉

留守居中

48 態令申相守時分柄自然下々ばけんニ罷渡族可有之候之間堅可被停

止候、若背御法度罷越候儀重而聞付候ハ、其身之事ハ不及申、一

類悉可被加御成敗候、其上御手前可為御越度候、恐々謹言、

慶長四年

四月朔日

山入レ

五月十一日

對馬侍從

利長判

久留米侍從

輝元判

薩摩侍從

景勝判

羽柴薩摩宰相殿

羽柴薩摩少將殿

右宰相殿宛書之御書家康公御誓詞并右五大老武通之外不見及、同年五月十一日之書付ニハ又右書入之通有之候、為見合書載置候事、

49

拙者事去年已来ニ若腦ニ勞候之故御暇被下歸仕候、然処奥入之御催候付、三拾石老宛可為軍役之由被仰聞旨地行相應之儀疎略有間舖候、此旨を以御取合奉頼候、恐惶謹言、

本ノママ

佐多太郎次郎

二月六日

久賢判

圖書頭殿

参人々御中

50

尚々案内者として加藤式部右衛門殿雇候而ハ如何候はんや、但大彦入江万談合肝要候、

「マエメ」

態令啓候、馬越之前目を御加増拝領仕候、明後日廿六日ひのへ申の日吉日ニ而候、巳午日へし此時よく候、さてハ大田雲雪頼存候、
申候、日記付ニハ窪兵太可被申付候、案内を大嶋殿江番衆老人被遣可被申入專ニ被罷帰巨細可承候、万吉謹言、

拙斎

十二月廿四日

為舟判

丸田久右衛門殿

参

51 尚々餘之慮外候ま、我等より申候得共不相届候ま、直書を遣し官米之儀其方ハ有ましく候、爰方為来年当候間申候処、しらん

かを候、くせ事無申事候、

爰許不如意之由度々申越候、先日宮路早右衛門方掃宅ニ堅申候、不相届候哉、兵糧雜事等之儀何篇無道候事、寛外千万爰許何も候ハ
ん閑候在所ニ而なく候、乍存油断之儀悉多く出候野心ニハ有まし
く候歟、不知承度候、

霜月廿六日

拙斎為舟判

「上書」

拙斎

丸田久右衛門殿

態以飛脚申越候、仍此度肥州於合志伊集院下野守と大津源左衛門
戰大勢寄來候敵を追拂、其上大津六右衛門討取被成候付、下野守
危命被助候、則達上聞御褒美別紙ニ御給被成候、仍如件、

八月廿三日

新納武藏守在判

圖書頭 在判

伊集院新助殿

31

謹而致言上候、

一加肥後殿之儀あなたこなた余細々御尋入申ましき事かと存候間、
ちと御遠慮御尤ニ奉存候、いな事ニ而殊之外此儀可被成御氣遣候
様ニ又申なす事茂可有御座事、

一自然腹を被切候共定御檢者を被申請可相濟候間、二頭茂三かしら
も御馬衆之罷越ニ而可有之候間、中く世のさわき杯ニ成申間鋪
事、

一若左様之衆被召出候とて御屋敷として一人も罷出候而も可為笑止
候間、よくく左様之御下知内々被仰付尤ニ奉存候、御あたりな

本ノママ不の字落ルカ

き俄ニ御人数杯ふと參候ハ、何としたる儀ニ候哉とさきの衆可被

相尋候、其時之御答何かしと有御座間敷候、其上後々迄茂物沙汰
罷成御家被成候而よの衆ニハニ而御座候間、いかにも候
ハ、尤余儀無御座、左様ニ而無之候ハ、必々御人数被出候儀御無用
ニ奉存候、

一先日雅樂頭殿并伊掃部殿江為御内意被進候御狀之御返書ニ茂曾而
御人数杯無之、少茂御分別ニ不參候趣之御書中ニ候、然時者彼是
以其御賢慮肝要ニ奉存候、

今度於御城承候茂肥後守如此成儀を仕候間可被仰付との御承
御聞候得者御人数やうにとの被仰出ハ無之候、其故ニ雅
樂頭殿掃部殿御返書ニ茂一向其儀ニハ無御問合於御城被仰談との
儀迄ニ御座候、中く御家杯より御人数可被出儀思召より茂有之
間鋪候、此旨可然之様可有御被露候、
(寛永九年)
五月廿七日

伊勢兵部少輔

貞昌判

御近習中

「猶々書」

肥後御成敗ニ付とりかまハ大勢ニ而候故上様之御人数ニ
てか、んハあくみ申なと、中事ニ而候ハ、被成御懸ニハ御人
数を被相加候様成も可有之候、誠ニ老人被腹切候様之儀ニ御
あたりも無御座候而かるくしき御様子共ハ後々迄茂御あさけり
たるべく候

右之書狀児玉筑後守利昌之家ニ相伝り居候、如何様其時代之御
近習ナランカ本書ニ從フ、

一筆令啓候、然者本脇三右衛門方之儀可被聞召於肥州花之山致戰死候、御年来之筋目、其上所々弓箭度々御用為被立人々跡ニ而候処

ニ当三右衛門事可被及飢饉体ニ而候、此中在江戸主從三人之御賦迄ニ而被罷居候、先年惟新様御存生之時分被添御詞候而鹿兒島江被仰渡可被御手付由候付、知行五拾石被仰付候つれ共、今少被相加候様ニと惟新様被仰渡候而先行落着候儀相待候様にと御意候、内々惟新様被成御煩付、御遠行候而より已来刑部左衛門成相果候而左様成御忙をも不申達由候、最前鹿兒島より被仰渡候五拾石可被遣候由於爰許相定候、一向宗之上り知行杯之内被為ニ成様なる所ヲ被仰付尤ニ候、為其如斯候、恐惶謹言、

五月九日

伊勢兵部少輔

川上近將監

下野守

彈正大弼様

三原左衛門様

鎌田出雲守様

山田民部少輔様

人々御中

55 尚々依樂見續之儀此比やうく出舟之由聞得候、飯米可為拂底候、先々御物備被下候而見續待付候様ニ御取成偏ニ奉頼候、いまた鹿兒島^{本ノママ}のさまニ右船之事候之間、定六月末方にて可致上着候歟、其分別所仰候、兼又今權國中^{本ノママ}之仕合不及是非、依子細走上候処ニ、武庫様以御分別於中途討果候、御満足之由白龍伯様ハ御丁寧被仰下、外聞實忝候、此等之次才御前様江御仕合可然折節御披露頼存

候、次ニ存松老^{江茂}申入度儀候、依樂召置被懸御目自然者又御酒御振廻可為被懸候^{本ノママ}而御心得所希候、

就好便令啓達候、卯月廿二日細嶋着岸仕候而入来院^{江者}今月二日漸罷着候、御堅約之日州より濱之市迄夫丸五人相列候^而越着仕候、悉皆貴老迄ニ而遂下向候、過分之至難申尽候、帖佐江参上中上下無何事候、御在所江急申候之間使計りを進覽候、御息御兄弟さかしく候、可御心安候、愚老進退之儀兎角不中上、如入米罷通大方見廻申候、一切無心付候条能々見合候而濱之市^江以祇候御忙可申上分別候、追而吉左右申上候、恐惶謹言、

文祿五 五月六日

同武藏入道為舟判

新旅庵老

参人々御中

56

猶々箴城之儀被聞召付庄内^(まで脱力)被仰遣御加勢之企無比類御心さし申而^成く難尽候、京勢糧つまりニ成長陣成ましく雖見及候、上意難背故、一和可被成候、誠ニ口惜次才候、

如承候至大口、関白殿御馬被出候、先勢者曾木天堂尾ニ今日廿四日着陣候、洪水故ニ候歟、川を未渡候、然処京衆石田治部少輔殿忠棟以同道無事之懸引、菱刈本城より承候分申会尺、防戦一遍ニ相定候之処、自太守様新納右衛門佐殿、從武庫様者伊東右衛門佐殿を以御異見及度々、仰之趣者関白殿江可罷出之由御向殿様共々御差出之上者、弓箭者不可然之由被思召候、其故ハ御料人様又一郎様為質人指出中候、慮外之扱共仕候而者即可為御敵被思召候すると被仰出候条不及力、出頭相定候、下城之分ケ申達候、萬吉恐惶謹言、

(天正十五年)

五月廿四日

新納武藏守

忠元判

瀧聞越後守殿

土持大膳亮殿

二階堂阿波殿

57 一かたひらニツ事、此内一ツハよく候するを追而申入候、此外ニ茂

何そ有合候ハ、御見次可有候、

一ぬのこニツ事、此内一ツハうらおもてつむきたるは、ニツ共にな

かく仕立ニ而

一まハし手ぬくい事

一去年拙者知行納方目錄事

本ノママ
一てるまの事

四月六日

隆重判

大河平源太左衛門

宿本ニ而

蒲生

宿元ニ而

(米)

「かうらいより」

58

御親父郷右衛門殿御事、関ヶ原ニ而御打死之儀私憾ニ見届候、義弘
主者丸御備ニ而三丁計御退去被遊候付、御跡より柳右衛門も可奉
追付存、急キ申候処、郷右衛門殿馬上ニ而手綱を扣御座候ニ付、某
申候ハ郷右衛門殿士之面白事者今日ニ而候と申候得者兎角の返事
茂不被成、我等ニ向ひにつと笑ひ則馬ヲ駈出し向之関東勢の中ニ
被乗入候処鎗数本を以三三度突上中候、并伊兵部殿備ニ而者無御

座候哉、某茂急キ申候故、遠く成夫より見分不申候、御戦死無異儀
見届候、為御知如此御座候、以上、

四月十九日

貴嶋柳右衛門判

小野郷右衛門殿

59

先年加藤主計頭隣国ヲ催、水俣迄打入出水江取懸申候時分、惟新様
為御意、本田六右衛門殿を以被仰付候ハ、水俣之城江忍入、土ヲ
取候而可参之由承候之間、取罷帰差上申候、其後為御意被仰聞セ
候、主計頭引陣申候ハ此節知行百石可被下之御約束候、然処ニ本
田六右衛門尉殿御仕合悪く候而左様之首尾無之候、知行可被下と
證跡野村美濃守ニ而候、于今失念被申間敷存候、土取申候案内者
村田六左衛門尉、久米六左衛門尉ニ而候、無余儀辛身為申由申上
候得者則彼兩人江ハ六左衛門尉殿より御褒美被成候、拙者事者知
行百石御約束之御意候、而其節者兎角之儀無御座候、先年之有筋御
佗申上候、可然候様奉頼候、

寛永十三年 十一月十一日

細谷田九左衛門尉

新納加賀守殿

60

伊集院九郎忠春参于義久公高麗陣、敵艦遮海路不通一船時、忠春抛
身命、通敵船之中、候公之陣、故感其忠節賜感贖、且拜領新恩地
十斛、国貞・抱節之證判如之、
今度此表兵船浮山之通用難成故、其手之船一艘茂無渡海候処、
各被抛身命被遂参陣候儀甚深く被思召御感候、依其忠節知行拾
石可被宛行旨被仰出候、依状如斯、

慶長二年二月廿九日

比志島紀伊守国貞判

伊集院下野入道抱節判

伊集院九郎殿 忠春

右同案高城左京亮殿、弟子丸弥八殿、本田刑部少輔殿宛銘々有
り、

61

寛

一 相模守江先年寺領可仕由山田民部少輔殿を以被仰付候間、川越三
右衛門殿ニ而福昌寺ヲ被頼存候処、其後長谷場兵右衛門殿御使ニ
而被仰聞候ハ先々御指置なされ候間、寺領者入間鋪由被承候、又
其後ニ而候哉、家久様より御神名を為被遊入御書被下候而忝と被
申候事、

一 未ノ年十月廿五日之夜相摸居屋敷ニ西保億右衛門先立候而踏入、

二重之垣ヲ破、憚ヲ申請候、其時分相摸ヲしつめ可申企かと存候

処ニ何某殿を其夜は同心申候由億右衛門此方江注進申候、其後億
右衛門事何之料ニ而候哉、可被相果候事、

一 倅者其後安田孫右衛門、小濱寛六、濱崎源六左衛門□□本次郎右

衛門此四人者遠島寺領ニ而被相果候、其外坂元權兵衛殿、吉田半
兵衛殿、中間助四郎、山とめ彦七此四人者去々年被召通候、主人

ヲ乍召置如此御公儀より御覽之事迷惑ニ連々相摸被申置候事、

一 相摸毒飼以前より誰々茂無御見廻処ニ曆々兩人居所江不斷居被成之

様見廻候、是ヲ不審ニ被申候、右兩人之外女性者不被存候得者こ
そ無心元藥ヲ吞被申則被相果候事、

一 毒害ニ相被申候後、我身前より喜入休右衛門ヲ頼申御公儀江申上候、

相摸不思議成仕合、世上珍敷存候間、御糺明被遊相手茂知レ候ハ

、可承由申上候得共、其沙汰無御座、殘多中候事、

右条々相摸連々被申候ヲ親子之間ニ而候得者、乍若輩大和守承
り連々無念存、今度氣違ニ罷成他出候哉と存候、能様ニ可被仰
上事奉頼候、

一 先年銀子百貫目相摸前より御用相立候付、年内為御返辨御知行被下
候、是ハ最前貴老様御取成ニ而候、為首尾鹿兒島御家老衆江被仰
置相調候処ニ今度被召上候、迷惑ニ存候、龍伯様より被下成候知
行不殘御いもと様江進上申、女養子と申定候得共、小高ニ而諸事
不調候条、御知行杯被下候ハ、相添、諸事相続候様ニと相摸兼々
被申置候間、為其菊千代丸ヲ可被召立由御妹殿御内談申様ニ被仰
上、無相違様ニ頼上候事、

辰九月廿二日 新城 太守義久公御姫嶋津守右衛門
彰久之室相模信之之母堂也

寛永十七年庚辰

伊兵部少輔殿

おはより

右垣見寿沢家ニアリ

好便候条令申候、仍世上之事六ヶ敷罷成さハかしく体ニ候様子者、
内府様御内衆伏見之御城櫓籠候を諸軍勢取巻夜白被責候、未落去
候、惟新様奉始御供衆無寸隙被成辛勞候、我等事此内大坂江被召置
候得共、人数一分伏見被召寄、当時城きし被仰付相調候城より之鉄
炮あたり手負有之候得共、我等事当日迄無為候、可易心候、ケ様
之時節此地江我等式有合候事さりとてハ幸之儀ニハ随分無油斷御
奉公可仕覚悟ニ候、其許之儀何篇無油斷分別頼入申候、千代丸兄弟

手習其外人成候様異見頼入申候、恐惶謹言、

七月廿三日

有馬藤七兵衛純房判

宿許

参

63

其後者不申通候、然者今度泗川御城江唐人式拾万程ニ而相懸仕寄セ
本口江拾丈計詰石火矢杯被構候処、御城より切出なされ左候得者汐
入口横入如くニ御切出被成候間、追崩追くつし及四萬被打取候、
誠ニ前代未聞三國之御覺ヲ爲被成由諸陣よりも御悦ニ而去ル十一日
志摩守殿・摂津守殿・梁川殿御着ニ而候、追打被成候死骸共御見
廻以之外御褒美ニ而候、夫より唐人方より以書状無事之儀中来候、依
夫かけ引最中ニ候、然者今日廿八日賈人可出由相定、都之様ニ罷
越候、可相閉候哉、于今不知候、自然無事之儀調候ハ、年之明ニ
茂婦朝可申候、其例可中承候、恐惶謹言、

高麗泗川より

慶長二年戊戌十月十八日

長崎六郎左衛門

大隅濱之市ニ而

名乗

安樂大炊介殿

尚々晋州川ヲ限りニ被打せ候、横一里豎四里八月つきニ被成切伏
候、誠ニ何ニ茂たとへかたく候、諸人茂日本ニ而豊後衆崩れたか
く島原ニ而是様成事ニ似たる事もなき由物沙汰ニ候、忝人ニ而三
拾人又式拾人又忝人式人不切人者無之候、扱又人々小者迄も白か
ねの百目式百目又十匁式拾匁ツ、不取者茂なく候、乍去我々者忝
分茂取不申候、夫々ハ百匁式百目取爲申由と所より承申候得共隠し
申候間、さすかに押取ハ不被仕人足にとりふへん之躰ニ候、各

懸御日度候事御推もし可被成候、此分寺主馬・宮式部・勝新・山
市兵・新傳右・松田監何れ茂江御心得可有之候、扱辻助兵思之外
死去候付ケ様成事ニ付而も迷惑御察可有候、
右書状岡分士安樂助右衛門所持之由

64

一書申入候、此間者自幼少至今口ニ迄自本兄弟之契り不淺候事、七
世迄之御縁歟と存候、仍頼存中候、次兵衛尉夫婦成果御心ヲ被添
可被下候、其外兄弟本外記介事萬々頼存候、足式候得共毛氈一枚
茸袴一ツ爲形見進上申候、何そと存候得共、表寸志候、李介様御
二人其外御家内中江御心得奉頼候、如御存寛永拾年二月五日ニ黄
門様江御供之御約束申上候而今度其首尾仕候、跡ニ而うはさ草の
かけニ而跡々仕廻等茂奉頼候、後世ハ七世ひとつはちすと待可中
候、内儀江よく御心得可被成候、

辞世

一方に思ひ定る心こそ地獄もしらす極楽もなしニ而候間、御氣遣
有間鋪候、恐惶謹言、

忠記様内

愛甲次右衛門

三月三日

廉宗判

本田新右様

参
主下

尚々宝寿院様江拙者存候通可被仰上候、此中之御意七世迄茂難忘
奉存候、御指出し刻者拙者のうはさ草の陰ニ而誠ニ執心深き申事
おかしく候、細々申上度候得共同前之儀候間不能細筆候、以上、
右愛甲氏書状也、宝寿院ハ家久公御子萬千代丸忠紀様之事也、

外記介者姉之子也、李介ハ本田新右衛門兄也、次兵衛ハ次右衛門親也、

黄門様御供申候、而人界を打破黄泉之首途を仕候、必後世ハ一ツ蓮ニ何事茂昔之次兵衛か夫婦成果奉頼候、古歌に終に行道とハ兼て聞しかと昨日今日とハ思ハさりけり

和田平右様

愛甲次右衛門

自幼少至今日迄得御意候事七生迄の御縁歟と存候、黄門君之御供申候、而切腹申候、思召被出候ハ、跡ニ而噂草のかけニ而入相の鐘もかきりの有と聞ハ猶世にとこそハ思ハさりけり、形見

虚白丁無居士

愛甲次右衛門

生年二拾八

久保平内左衛門様

今度惟新様御供申上候付子共之儀向後被添御心候而可被下事弥奉頼候、幾度茂如申候薩州様忝被成御意可被召留之旨重々雖被仰聞候、拙者事幼少之時親ニ離レ孤と罷成候を惟新様御側江被召置御かけ迄ヲ以人立申候、此御高恩^〇迄ニ而候、可奉報様無之候、兼而後生御供可仕候由申上候処可被召列之旨被仰出、別而忝儀迄ニ此中御座候つる儀弥不浅御約束之筋違申事不罷成候、薩州様不奉任御意候事迷惑此儀迄ニ候得共無是非次才ニ候、少茂背御意不申

候条被聞召置御出合候時分^〇様ニ被仰達候而可給候、然者連々如申候子孫之儀、伊勢大隅守殿・比志嶋河内守殿奉頼候由申置候間、別而貴老被成御熟談、何とこそ人立申似合ニ御奉公をも申上、若々御弓箭など^〇時者各被召列矢之一ツを撫申躰ニ候ハ、某之本望此上有間數候、旁爲御納得候、恐惶謹言、

元和五年八月十六日

木脇刑部左衛門

川口大膳亮殿

參人々御中

尚々中人候、先日御きる物御拝領勿論ながら案中ニ候、我々迄茂目出度奉事候其許我等宿無人ニ候間より^〇御見舞頼入候、先日者此堺目江被成御辛芳候、就夫御仕合物よく御座候而御満足不及申候、懸御目候而御慶可申入候、次ハ十六日志和地口ニ而無比類鎗共御座候而敵茂餘多被打捕候、細々申度候得共急使ニ候間、先々大方ニ候、貴老御事茂近日中ニ被成御參陣候覽、待人候、將又次之折節三郎右様ニ御取合所希候包々我々者敵人なとも与所之様ニ承候而氣遣茂なく罷居候、恐惶謹言、

脇田若之^〇

正月十八日

字普

安樂大炊助殿

參人々御中

覚

我等數年持申候印判ヲ去年卯月十四日此方於御内失ひ申候事、一右之印判失ひ候儀心遣存候故、愚之一通去正月十三日野村大学助

殿・仁禮主計殿を以御老中江披露申上置候事、

一其後右印判町田出羽守殿江被召置候由承及候間、税所但馬守殿・

河内織部祐殿^{本ノマ、}出羽守殿江申入候得者去二月五日印判被差返候

事并從彼御方御添状御座候間、書寫進上申候事、

一右印判返給申候付拙者書物三月朔日此方御老中江差上候處未其地

江御申無之由被仰候間此度懇一人差上候、右之旨申上候、從御老

中御添状同前方上置候書物此使^{本ノマ、}被成御持^セ候、被爲御覽達御披

露頼入候事、

一彼印判之儀平人^ニ候ハ、申上度由愚存海山御座候、先例も多く

御座あるへく候、雖然当上様無餘儀御兄弟之御事^ニ候得者如何様

ニ共不申上得、咲止之至候、又不申上候得者我等身躰暗不申候、

其元者各可然様御取合候^而何共拙者儀此中かすまり候所ヲ御糺明

被遊被下候様各万事^ノ奉頼候、誠ニ不存寄事迄ヲ書物^ニ有之由

承及候、愚老年と中、頃者草卧申候間、此方御沙汰延引候得者及

迷惑候、拙者^茂御年来之一筋^ニ而先祖以来如形御奉公爲仕筋日と

申御兄弟様之御名ヲ立可申儀無念之至候、只脇より御催促之方有

御座と聞得候間申上事^ニ候、御老中江以状如申入候、今度承候得

者東郷重位^探其外無筋事^ニ候、似寄たる事を申候ひてケ様之作

り事^ニあひ候共印形出候上者計策と指知候處、誠ニ無筋事迄を書

申候由此趣万篇^ニ催促之方^江及御糺明候様返々^茂奉頼候、以上、

午七月五日

喜入摂津守判

平田狩野介殿

新納右衛門佐殿

参

70

^{本ノマ、}猶以威致院江御伝言之通巨細被任候哉、是又忝存計^ニ候、又瀬

戸口安房守殿江御次之時者御息様御手はいか^{本ノマ、}候へたる由御心

得奉頼候、

御書畏入候、仍理安老^江一ケ條ニ申被成候之禮忝存候、未不定候、

去十六日者^ハち江罷出候之處、額娃左馬殿・敷仲兵殿・比宮内少

殿など大將として追こみ候^而敵五人被成打取候、其上御座候高城

口よりも罷出候處を追々みたれ一重取^ニ而敵三人うてち^{本ノマ、}鎗御座

候、黒田加兵殿・新納勘解出殿・蘭牟田弥吉殿右衆鎗被成候、又

陣替今日^ニ候、爲御存知候、恐惶謹言、

正ノ十八日 宇多七左衛門

玄判

前原隄岐守

貞能判

安樂大炊助殿

参御報

71

猶々申入候、敵三万人之首揃申候、其外切捨ハ数しれす候付者

治介殿も敵七人打取候間、即四郎兵衛殿、上様江言上被成候、

一段之御意^ニ候、爲心得申入候、又候此由源五殿へも心得可

有之候、又伊新小内記殿・町田仲左殿・岩下藤七殿・家村李殿

・石川新右衛門殿其外若衆中江御心得頼入候、

態令啓上候、仍て打立申時分、御念比之段申無計候、随^而ハ此度

紅南人八十万騎程かけ候所ニ御上様御打勝被成、三国之竟不過之

候歟と御意^ニ候、然處^ニ武庫様敵五人御打被成候、又若殿様

四人御打被成候、御馬^茂敵に驅入かんなん之様^ニ参候、拙子事も

御両殿御供申候間、一段御意忝候、爲御存知之如此候、恐惶謹言、

十月六日

竹内宮内左

池田六左衛門

實吉判

參人々御中

さて、今日者御暇乞申候事二世の御縁歟と存候、然処爲御形見御持扇并むすこ江匂袋被下候事、富士ほと忝存候、今世の様ニ有もの候ハ、来世ニ而者無別儀可奉存候、何事も夢ニ而不及是非候、恐々謹言、

仲秋廿三日

久治

浅からん契りならずや君にしも後の世かけて仕へぬる身ハ澄のほる月の跡をし慕ひ行心も雨の空とこそみれ

伊勢大隅守様

參人々御中

猶々俸事御取立奉頼候、是ハリん年之事と存候、不及是非候、

以上、

元和五年己未八月廿三日鹿兒嶋於大乘院川原松齡公ニ竹翁

元林居士新納式部久治年三十三殉死、

新納式部大輔

久治

一書令啓達候、仍印判入組事ニ付以忝人申上候、定而御使衆兩人可爲御披露候、然者以後印判色々作書物有之由承驚入申候、就夫申上候、

一右謀書之内東郷重位先年相摸守殿謀反之時人数ニ而候得共兵法之蔭ニ而遁れ候と出羽守殿拙者爲中由其時之謀反衆ニ而重位者無之候、荒木五郎兵衛か神文之前ニ相模守殿内大久坊と申山伏主從拾余人ニ而大坂江被籠候と有之候由候、其外之人之儀惣而中分無之事因州能御存候事、努々無筋事ニ候、然時者弥不案成人之作書頭候と存候、

一先年濱之市与鹿兒嶋と関ケ原御弓箭之脇六ヶ敷候時、家久様御手ニ無御隔心衆者紹益老前之鎌田雲州老・比志嶋紀州老取分鎌田雲州此儀御功者故色々申調被成候、御使衆者伊勢兵部殿・相良日向守殿ニ而候つる、一所衆ニ者總州、其時者又古殿と拙者江伊勢兵部殿を以万々被仰聞候つる、若き衆ニ者仁禮藏人殿被存候、濱之市衆ニ者伊集院抱節老・喜入紹嘉老・佐多越後守殿・伊集院半右衛門殿・河野雪・相良勘解由殿ニて候、

東郷重位兄弟事もわかし御座候、休半ハ不存候、重位者丸ク候ハてハ御父子之御間御隔心ニ成候而者可惡と達而爲申由ニ候、其故抱州江茂逢候而其分得と爲申由ニ而候、抱州も左様ニ被申由承申候と物語候つる、慥ニ承候、右之外江も三方ニ忠節之衆多く有之候ひつらん、先爲承及分大形如斯候、皆々ケ様細成事ニ而候、

加治木惟新様御方ニも新納越後守濱之市より色々忠節被申候儀共各可被聞召及候、鹿兒嶋江者鎌田前之左京・伊半右衛門殿夜御内通爲被申上事無中紛候、我等承伝置候、重位惡党之由うつ、なき事ニ而候間、弥謀書なからも不存人之文跡ニ而候事、

一於向田彈正太弼殿煩故逗留之時、我等見舞候而佐土原之儀御使と申候由是又才一うつ、なき事ニ候、向田江者終ニ拙者見舞不申候、其子細者其比拙者娘を遠嶋被仰付候時分ニ而何事も遠慮之跡ニ而

候つる、是才一、殊之外成相違ニ而候、其謀書見申候ハ、万可申事可多候得共、先大形之様子如斯候、此由新納右衛門佐殿、町田勘解由殿能々被仰談御出合事頼存候、是非共、此相違之條々以御取合御披露偏ニ、奉頼候、恐々謹言、

午七月五日

喜入撰津守

凶書頭様

忠續

穎娃左馬頭様

川上因幡守様

参人々御中

本ノマ、

如斯江戸江中上候案中ニ而候、彈正太弼殿有御覽度由ニ候間進覽候、

喜入久右衛門殿

喜入撰津守

74 今度幸侃御成敗之御無御屈故候哉、石治少様御腹立故候歟、依其子細長谷寺江御勘座之由其間得候、各驚入候、乍去幸侃罪科之事者連々治少様御存之儀ニ候間、定而急度被聞召分物能可罷成候、其御古左右早々可奉待此等之旨有御披露事所仰候、安事恐惶謹言、

新納武藏守

(慶長四年)
閏三月朔日

拙齋判

鎌田出雲守

政近判

比志嶋紀伊守

国貞判

山川越前守

理安判

平田太郎左衛門

増宗判

種子嶋左近將監

久時判

新納休閑齋

旅庵判

伊集院下野守

抱節判

町田出羽入道

存松判

樺山權左衛門

久高判

柱太郎兵衛

忠昉判

伊勢兵部少輔殿

右幸侃御成敗之御御国許被差立候衆より披露状、但伏見江爲差上由、

75 其後者御左右不相聞如何無心許存候、我々事も未山勘兵衛殿江しかと勘忍申候、夜白助之丞殿御登を待兼申迄候、定而其許之御返事より物よく罷成候ハ、それかしつれも急度可罷下候、爰許川上四郎兵衛様、助七様、久右衛門様何れも其後御人数爰許江御勘忍被成候、我等事者山勘兵衛殿御宿へ旅庵様御座候付、いかにせまき所に旅庵様と参合候而罷居候、誠ニはたかにはきなされ候て此寒

二何共寒く候而迷惑仕候、ケ様成儀者今も昔も有御座ましと存候、兼又こはやさまへ申候、東郷源六殿無何事候、爰許江勸忍ニ而候、可御心安候、いづれも我々御親類中へ果被成候人無之候、また辺牟木彦兵衛殿も無何事候、御心遣候ましと候、恐々かし、

十一月廿四日

名乗判

(本出)
少吉

勝次郎殿

一書令啓候、嶋津兵庫殿内白坂納右衛門、加治木立遊興国寺江罷居候、薩州様御上洛前ニ我等何とそ異見申召置候様ニと国分丹後守を以被仰聞候間、新納刑部太輔と致談合、平田豊前守・児玉四郎兵衛・皿良善助を以色々申渡候得共、曾而承引被不申候、親類木脇喜兵衛入道なども召寄手を尽シ被申候得共、縦重罪被仰付候共、加治木江者参儀不罷成由被申切候、此由入御耳ニ候処、今一往可申渡旨被仰出候、從兵庫頭殿御船元江便被成進上被仰上候得者、因幡守へ爲被仰置由鎌田源左衛門を以爲被仰出由候、就夫又々前々三使異見申候得共無承引爲御意申渡候上ニケ様被申切候時者、最早手茂尽申候、此由御次之刻御披露可被成事頼存候、恐惶謹言、

九月九日

川上因幡守

久国判

新納右衛門佐殿

北郷佐渡守殿

人々御中

其方御番之儀者帖佐衆請取候而可被成相定候、貴所之事人衆召列候而如此方之可有御越候、明日必帖佐衆可被参候間、替合候而御帰

候へく候、恐々謹言、

五月十八日

圖書頭判

佐多久作殿

二宮掃部助殿

篠原右京亮殿

右兩人ニ一ケ条可被仰付候、以上、

正月廿六日

凶書頭

忠判

有馬丹波守殿

参

一其後者不申通候、然者便宜候之間用書状候、一京都以之外雜説ニ而候間咲止各度被思召候、仍伏見之御城七月十八日之夜より内府様之衆城之麓長束殿屋形・徳善院之屋形ニ火をかけ申候而散々式候つる、其より近所ニ諸方之軍勢仕寄を被成候而鉄炮石火矢をきひしく打せられ候、中々筆ニ茂難及候、御推量之前候事、

一先月晦日之夜松之丸より心合之者共候哉、此方人数筑前中納言手之衆引入申候而輒其曉被乗取候事、同日石田殿城よりも心合申候者候つるか人衆少々引入申候と聞得候、翌日朔日巳之刻石田殿屋形ニ責入候ま、本丸も申刻落去ニ而候事、

一伏見之御城之主執鳥井彦右衛門・内藤弥三右衛門・松平主殿此三人ニ而候、但其死證者鳥井殿・内藤殿頭ハ見得申候事、

一諸勢皆々瀬田之橋ニ在番ニ而候か佐和山之如く被指通候、其後尾(遺)

州之垂井と申所ニ陣取被成候、然処敵猛勢相応之由申来候之ま、大柿と申城ニ御籠ニて候と聞得申候、通路あしく候故、一人茂山ぐ、り茂自大柿さわ山へ者不参候、漸 惟新様之御状さへも五六日已前ニ石田殿山く、りニこそ御伝到被成候、是ニ而可有御分別候事、

一伊勢之津之城も一兩日以前ニこそ漸々落去ニて候、今程近所者無何事候、然者後日之儀者いか、たるへく候哉、大坂城之内之用心種々むつかしく候、河舟之改様堀川より外へ女衆老人も不出候之事難成候様子ニて候、可被成御推量候、恐惶謹言、

(慶長五年)
菊月朔日

長井拾郎左衛門

利貢判

伊地知勝左衛門尉殿

参人々御中

尚々大坂之内ニ諸大名之屋形ニ色々門番を外よりきひしくいたし人々出入も不洩様申かけ候之事中へ言語道断不及是非候、さて屋形ニ者御移被成候へ共、尔々人はあまたも無御供候、た、今何と申候事共出来候しといふ共一儀之談合も無之候、又御国之船と候て少々罷居候得共、一艘もつないかり帆道具杯もなく候、其上か子もなく候、さてへ不図爲何出合共ニ而御下向と候共、河舟に御めし候するかと申候、与所の入船者加子舟道具すこしも不足之事ハなく候、咲止の由諸人申計近比若輩にて利口の申事ニは候得共御家之御一大事の究と我々かけへ申候、ことに御側ニも女しゆにをとなしき人も無御座と見得申候、ましておくに御奉公にて御上洛之衆日向守などの御登りにて候ま、大方心安思召候、大坂ハ今夜も明日も不知申候、世上の事か九州のかたぎにちかひ申候と見得申候、先年梅北か逆心の時御氣つかひニて候つ、夫より

も百そうばいの御氣つかひを各申事ニて候、よくへ午不及御国之神慮を専ニ御折候ハてハとくれへ申事ニ候、人間の分別た、力ニても難成候、中へ百紙に書申候而果申ましく候間、先々如此候、細き灯のかけニて書申候ま、よめ申ましく候、御推量候而御覽し可有候、又さかいめの糸づはかのらふしのもちて参られ候よし、

80

尚々普請ニ何某働候役ものふさた申候由心得可承候、上手ハ無答たるへく候、

御普請辛勞令察候、人衆廿人可相加之段申付候、閑如何候覧、承度候、参候分以日記可承候、各々辛勞仕由申度候、恐々謹言、

八月晦日

拙斎判

丸田仲右衛門殿へ

81 一八月吉日

をほへ

丸田久右衛門尉 天正五年よりかんせん申候、

以上 乗祐判 年十六よりてき、り候てきの

82 当寺爲勅願之淨場宜奉行 皇家再興之由天氣所候也、仍執達如件、

天文十五年三月八日

權書判

福昌寺住持和尚

83 去年在国之間種々御懇情芳意不知所謝候、誠経身難忘題目候、仍当

寺 勅願所之事令爲沙汰召下綸旨候、尤御眉目不可過之哉、以後
便又御出世之事可令申沙汰候事候、先閣筆候也、恐々頓首、

二月廿九日

資將

福昌寺

禪室

於当寺可被行名字之由經叡慮候処、不可有相違被仰出候間、載小席
候、可爲来際候、規範候也、恐々謹言、

朱 大文十年十一月十七日 朱 甘露寺黃門侍節元長

十一月十七日

書判

福昌寺

方丈

85

寛永二十年九月二十七日 後光明院御即位之時數根筑前久頼爲
使節到于京師勉事

一書令申候、然者貴所御名字數根ニ而者成合申間數候間、今度之
御使者可被成首尾中者嶋津与可被爲名乘由御意候条、其分申入候、
猶期後音候、恐惶謹言、

朱書

寛永廿年癸未

山田民部少

十月五日

有柴判

穎娃左馬頭

久政判

北郷佐渡守

久加判

川上因幡守

86

敷根筑前守

人々御中

久国判

近日深江之儀如今相支候ハ、畢竟安德ハ籠城迄候、御行明之心
龍造寺田尻表を開此口江致加勢候者笑止候、

肝備江御傳言髓相届候、然者昨日十五日到深江地下中一勢被差出
候、於左ニ者定嶋原衆安德表江可被差寄之間撰衆ハ致支度相待候
処、如案數勢差寄候を愚儀馬ニ而難懸入候、同心之人数尤弱□敵
證跡鎗衆を調猛勢相懸候を致合懸候間、奇數ニ追崩候、然其右ニ
如申候味方無人数ニ而候之間、四打目答候を□致遠慮追詰候、
さて諸所之出人□軍ニて候、先川上左京亮殿無比類被成粉捕候、
肝備も幸勞候、其外粉骨之人数餘多御座候得ハ未相記候次才也、
可申達候、宗徒之敵四人討捕候、いづれも嵯峨衆ニて候、其外手
負不知數候、随而我等倅者致太刀初候、切疵突疵七八ヶ所請申候、
爲御存知候、愚身体申候事ハ無首尾も候する上諸家自然風聞候者
必定と可被思食候、恐々謹言、

五月十六日

久信判

伊集院肥前守

平田美濃守殿

參人々御中

久信

87

猶々諸所地頭何茂答候間拙子年来別ニ御功者被差登之条事肝要
候、此等之御内儀御納得所希候、

去十五日ニ敵差出候を当城衆皆々罷出嶋原垂之口ニ追詰各被成御

幸芳候、鹿兒嶋此旨可有御沙汰候、次者此表深江敵差籠候之条毎夜之道待少茂無緩候、少々手負之衆薄可罷成候、此刻以多勢一途之無御分別延々數候ハ、以已後可事六ヶ數候之歟、此堺御才覚候間早速御校量可目出度□恐惶謹言、

五月十六日

忠智判

平田美濃守殿

川上參河守

忠智

天福皆来 地徳圓滿

心たにまことの道にかなひなはいのらすとても神や聞らん
日をさため年やこへくるけふの雨

慶長十二

正月一日

伊集院下野入道

吉書始

抱節判

年徳神殿

89

以上

於関ヶ原被成御立願候、爲首尾米卅石只今御拝進候、被得其意於御神前可有御祈念候恐惶謹言、

八月十日

伊勢平左衛門

執印吉左衛門尉殿

貞成判

御宿所

庄内暖之刻伊源次郎・寺志摩守殿江進覽之證文也、然者爲後證於伏見志摩守殿 惟新此封内在判

90

遙々不中通候、隨而其許親悴共罷居候間可然様御異見奉頼候、將又先三瀬之口小左衛門殿歸朝之刻中村金右衛門殿討死候之由申越候得共、此廿六日三泗川ニ被參候、此由飯野江茂千寿院江被仰候而可給候、未た不參候人衆池田源六殿、宇多弥三右衛門殿、白坂孫八殿、伊藤清左衛門殿、蒲生衆ニ者山口拾介殿此人衆ハ不定ニ而候、御存之爲ニ候事、恐惶謹言、

四月廿八日そせんより

隆(花押)

黒枕次左衛門殿

大河平源太

參人々御中

91

抱節唯今此方ニ被来候而今度之焼物出来中候由承及候条、是非共御肩衝一拝領中度候、若不被下候者私之所持を取可申通渡ニ被申候、大略也を一只今被下候而可目出候、此由可被中入候、恐惶謹言、

七月十八日

伊勢平左衛門

慶育老

貞成判

92

爲高麗征伐被遣武士候、同可罷渡之由被仰候也、恐々謹言、
本ノマ、改治カ(後三)

建治二年二月五日

久時在判

吉田次郎殿

〔頭注〕(米)北条時宗建治中此申渡アリ恐クハ是カ

雖末中通候、一書令啓上候、然者御家諏方之神主宇宿若狹守神道執心ニ付去年より当地ニ罷在候刻比志嶋監物殿より御狀到来故神道秘法数ヶ条其外社法共中聞候、尚期後音之節候、恐々謹言、

三月十一日

吉田刑部少輔

兼里

鳴津岡書頭殿

川上因幡守殿

北郷佐渡守殿

人々御中

94 金銀幣毫本

当座主安養院神主 宇宿若狹守

但箱入

安養院格護

奉寄進諏方上下大明神金銀幣白一本祈禱当病平愈之者也、

寛永十四年丁丑三月吉 中納言家久

95 一銀白幣一本

銘云

奉寄進岡諏方大明神御宝前

于時寛文四年甲辰五月吉日

鳴津又五郎藤原朝臣久胤敬白

96

覚

安養院私領田之浦山前に御茶立ニ付被召上候得共于今御茶屋無之

ニ付安養院江此節被給候間、右山可被引渡候、以上

西九月朔日

山奉行所印

黒葛原周右衛門印

奈良原清左衛門印

田之浦

山見廻衆中

97

一書令申候、去年蒲生新助鯖洲江田地仕明爲可申普請仕候得共、然々不相調、此佩捨置可申儀残多存、愚老溝普請金候つれ共、大双之事ニ而不及手、是非難成之处、各被爲聞召知皆々御合力を以存

〔原本作替〕

之外普請早々相調外聞能忝候、銘々御札申度候得共、人数ニ而不罷成候、寄々御心付頼入候、恐々謹言、

〔山巴〕

二月廿七日

昌巖在判

武宮佐藤兵衛殿

御宿所

〔晏斎〕

98

覚留写

〔照〕

上之山御城取御普請御座候刻、新少院衆中可被召置候而衆中被召移候人数者久木田權右衛門・平山永銀・大迫權右衛門・漆田泰坊

漆田仲右衛門・益満外記・高橋神左衛門合七人爲被召移由、我等

親神左衛門咄申候、右之衆被召居候儀者、近キ比迄ニ而御座候故、

我等も覚申候、被召移候首尾者、我幼少之儀候間、存不申候、右

之旨親共申候儀ハ別儀無御座候、此首尾御用之由被仰候間如斯候、

以上、

酉四月廿二日

高崎神左衛門

漆田典藏殿

99

其後者不申通候、御無音之至候、先以新春之御慶多幸之至ニ候、猶更不可有尽期候、此等之御祝言爲可申上使者致進上候、然者旧冬御普請相済

薩州様、虎寿様何茂可被成御移と日出度奉存候候、

黄門様来四月者可爲御帰国由候、御父子様共ニ御暇出候得かしと

富岡江追入候由、以之外負軍ニ而笑止候、是ニ付致推量候ニ一円無功ニ候、若キ衆不図駈出手合ニ被追立、崩立候而より惣崩ニ成候らんと存候、古風之衆下知をも被仕候ハ、先物見を遣、敵の働様をも被為見候而何卒行可有之所ニ若キ衆当世物之輕キ事を本ニ而已被致、弓箭方之儀をも其意ニ当られ、如斯外聞を被失と存候、一揆共ハ皆百姓之由、天下之沙汰ニ而候処、歴々之衆彼等ニ被追崩刺數輩被追討候儀無念之次才ニ候、兎角古風之衆無之家者無心許候、当家中杯も貴老如御存知之本々弓箭に馴候衆殘少成行、若キ者共迄ニ而當世之風計を見習候間、身にしめたる弓箭などニ者中々役ニ立間敷候、食物なども料理がましき物をたべ付、不斷踏波をはき、犬山などにも身をからさず、公家の成果の体ニ身を持成候間、昔武者之様成儀者成間敷候、是而巳氣遣に存候、我等共生立時分ハ狩犬山杯を不致、緩々と生立候、若キ者ハ後指をさす様ニ候つるま、ニ其風ニならひかん中之心懸食物なども如何ニも薦相成をたべつけ候ま、冬之寒ニ冷飯をたべ候而も不苦候つるを今之人達ハ少しひへたる物をくはれ候ハ、虫発可申候、乍去天下太平之御時代ニ而候間、左様之儀者入間鋪候条目出度候、將又天草之一揆共を肥後・薩摩之衆ニ而退治可致之由被仰出候、肥後之衆今月三日三角之瀬戸ニ爲被押寄由、一昨日此方御年寄衆江注進御座候、然時者翌日ニ者天草江被押結候半と存候、薩摩衆兼而獅子嶋長嶋江差寄御下知を相待候様にと爲被申付由相聞得候ま、定而御下知さへ候ハ、即天草江可相渡候、乍去肥後江相聞得候三日茂遅く薩摩江者可相聞候間、肥後衆よりハ跡ニ可成と申事候、内藏之介殿御事も去月の初時分、人数被召列、真幸表御通候つる由其聞得候、定而肥後衆之様子御聞合候而佐敷、水俣之間御入候

半と推量申候 最初天草之儀皆々御討取候歟、又者賢き所 イニ被討果
杯に楯籠候を被取卷候歟、何れも急度其左右可有之候を相待申候、有馬表 イ道 肥前筑後之衆上使御同心を以一揆共居候所江爲被押寄由候間、是茂急度様子可相聞得候、玆數儀出来候而肥後・筑後・薩摩杯之衆近年思ひ掛も無之儀に被逢候得者、天草へ行候得共、具足を肩にかけ候而之働逆も成ましくと存候、乍我見限置候、先年高麗江、惟新公被渡候時分、拙齋船元迄送候而之歌ニ (昔)
あちきなや唐土までも後れしと思ひし事も夢也けり
と申待りたる由、貴老御事も今度はさこそ御心ニは候半と想像申事候、然共去年久々ニ而懸候目ニ殊之外御顔色若ク御達者に相見得候間、具足御着候而も御働可爲御自由と存候、我等者十ほと年劣リニ候得共、中々成間敷と存置候、如右申扱々有馬之儀ニ付先日之御状ニ深江安德之儀細々被仰越候、新納刑部太輔、養田平馬戦死之儀共御書面ニ向候得者、其時分之様被存候而催涙候、其時分ハ弓箭之道をのミ心懸人之心茂情深く今日ハ人の上、明日ハ我身之上と人々思ひ入候つる由、古キ衆物語共承置候、右兩人打死之日今月廿三日歟と覚候、刑部太輔磯涯ニ而若キ衆寄合盃をめぐらし遊山の当座
海青し底や夏山夕す、み
と刑部太輔発句を口すさみ候、此脇を深見宗方
浦のみるめも風かほころ
と被読候而百韻獨吟候、右之発句を案し盃を取はやし候時者、何の思ひも有ましきに不図かけ出戦死候、其戦場之様を承及候ニ川上左京など致合戦引退候所ニ行かりての事と聞得候、敵と取合あひしろひ候而退候ハ、殿になり無難通れ候半すれ共武士の矢た

旦夕奉待候、可有御推量候、猶永春中嘉事可申加候、恐惶謹言、

正月七日

彈正大弼

久慶

一從長崎半天連相立候付欄可相改之旨被仰下候、当国者手札を取往

還可仕様ニ申付候間、諸所之人數男女共ニ当歳子より百歳迄不殘

木札を作、鹿兒嶋江所之衆老人庄屋相添持参候而焼印判を押自由

可相達候、判錢者出ましく候、札不取者ハ十一月朔日より從鹿兒嶋

檢者を廻見合ニ可被擲取候間堅可被申付候、

一旅人行脚帳老冊但札出ましく候、

此条題目之改候之間、堅所江留置可有披露候、

一地下人衆中在郷当年子より百歳迄札可差上候、

一地下人之外人之披官浮世人帳一札但札可差上候、

一居附之旅人但書物之上を以札可差上候、

一居付之乞食帳一札但札可差上候、

一せいらい村可爲別帳候、其内ニ旅人居候ハ、旅人帳一札可差上候、

右無油断早々此方江可有首尾候、恐々謹言、

十月十七日

鎌田出雲守

三原左衛門佐

山田民部少輔印

川上左近將監

彈正大弼 印

中郷高江水引高城

暖衆中

寛永十二亥年初而札改有、同十六年卯年迄三濟、

101

一筆致啓達候、然者各如御存御当国江初而下向候先祖伊地知彈正
忠季隨法名都仁、觀応二年九月八日於筑前国金隈戰死、廟所加世
田唐仁原ニ有之、于今唐仁塚と号し候、且又同所ニ爲菩提建立候
西照寺ニ光輝都仁庵主之位牌安置候、唯今ハ都仁塚に有之候石塔
西照寺内ニ引直候得共、如元右之石塔都仁塚ニ相直度と申事候、
其上西照寺茂無縁ニ而住持之折飯さへ難続候得共佛鎧等茂おろそ
かに可有之と被存候、今体ニ候ハ、可爲退転様子ニ御座候、惣領
勘助殿茂当分被爲成小身ニ候間、被爲取立候儀難成候、依之御当
地名字計勸銀を以石塔をも相直少し高ニても可致寄附と致相談候、
尤名字中不殘取持不申候而不叶儀候、先祖之孝養且ハ子孫之眉目
人数ニ御加被成候ハ、可然候、恐惶謹言、

十二月十六日

伊地知勝八郎

重英判

伊地知李右衛門

重倫判

伊地知越右衛門

重時判

横川

伊地知與右衛門様

栗野

伊地知善兵衛様

馬越

伊地知万兵衛様

大口

伊地知長八郎様

参人々御中

尚々其元同氏之衆別ニも可有御座候得共不存候間、各前より被仰合人数書立可被遣候、尤奉加帳相調事候得者、假名実名相記申事候条、委細書附可被遣候、勸銀之員数者面々志次才可然と申合候間、被聞召合可然候、此等之趣被御覽届所次御廻し可然候、

請取

銀子式刃

伊地知長八殿

右者伊地知元祖寺修甫ニ付名字中より勸ニ而建立仕候付、為奉加寄進被成候、慥ニ受取申候、我等より可致首尾候、以上、

寅九月七日

伊地知左衛門印

新納七左衛門殿

一筆申入候、然者御系図今月始ニ太田備中守殿江可差上と存候処、若君様御誕生ニ付而御取籠之由候間、延引申去廿一日備中守殿江持参申候、御系図を被成御受取、右書物者御家之重寶ニ而候之条書写候而可差上之由被仰候付而則写申、明朝持参可申由被仰候間、能勢喜庵備中守殿御存之人ニ而候、致同心伺公申候処、道春之親子被召寄御系図其外古御書物被成御見、忠久様以来之儀少茂不審懸不申、御文書之内北條家之判なと皆々被見知已ニ時政判御座候、書物ハ廣元手跡ニて候由被仰候、頼朝之御子 忠久、大友時直之外ニ茂御座候、是恐御台所他家を御名乗之故、世間不知之由御物

語ニ而候、静ニ御尋申候而書付相下可申候、諸大名之系図近家ニ而候哉、当分巻校紙ニ而相濟候、然者御当代之儀を細々被書入候、此方之御系図ニ茂近代之儀を書入可申由候而条書被為出候、多分爰許之衆茂為存儀多候得共、其内不知事共御座候故道春之條書ニ理□仕差上申候、急度被成御記可被差上候、兎角道春江御尋申爰許ニ而書せ申候ハてハ又なをり可申候、道春も大隅守様已采被下御目于今少も無他事存候間、如何様ニも可有助言由被仰候、筆者平田六郎右衛門江少書せ候而見申候、一段能候之間書せ可申歟と右衛門佐殿江談合申候、御系図此中出候諸大名之系図ニ相替、御代茂永ク別而細ニ御座候間備中守殿被仰候、何卒被成御急條書之段可被仰上事奉待候、先々御系図之一筋ニ御不審共無之候間目出度存候、御系図御調之儀圖書殿、川上上野介殿御当之儀ニ而候間、可申入候得共御談合可入儀多々御座候故、如此御座候、恐惶謹言、尚々諸大名之系図茂三部一上り申候、加賀肥前守殿なと系図未出候由道春物語ニ而候、又黃門様御昇進口宣之写此許尋申候得共未見出申候、自其許御写早々可被召上候、以上、

寛永十八年辛巳

川上因幡守

八月廿七日

久国

彈正大弼様

下野守様

頼娃左馬頭様

鎌田治部少輔様

山田民部少輔様

入々御中

一御家之御宿坊往古者廻向院ニ而御座候付、龍伯様御石塔院中江御

建立有之候処、蓮金院之儀 右大將頼朝公御草創之寺院ニ而御座候故、慶長十三年 義弘公、忠恒公御相談被遊蓮金院之寺地并守積三十五石守家共代銀四十貫目余ニ御買取、結構修覆被仰付、頼朝公之御子孫故御宿坊蓮金院江御改替有之候儀、蓮金院一卷之文書之内ニ相見得候、

一御宿坊蓮金院江改替被成候得共、御領国中より高野山江致參詣候者共旧好を相慕、如已前廻向院を為宿坊相着候、退轉無之候故、豊臣秀頼公大阪籠城被成候節、廻向院時之住持大阪之城江御味方申楯籠之處、寛永十六年迄茂御領国中者廻向院を宿坊ニ仕候儀御禁止被成候、其趣蓮金院江書付を以被仰越候、当家之宿坊從往古雖為廻向院、先年大阪江依致籠城、島津家之宿坊蓮金院ニ相定候、從当家内登山之者他寺江於令參詣者貴寺より堅固ニ可有沙汰候、若違背之輩者至当国可有其届候、為後證仍状如件、
寛永十六年十月廿三日

鎌田治部少輔

政統判

三原左衛門佐

重庸判

山田民部少輔

有榮判

川上因幡守

久国判

嶋津図書

久通判

嶋津彈正

久宗判

蓮金院

高野山廻向院古来より雖為宿坊、先年大阪陣之刻院上致籠城候之間、其以後相離宿坊候而蓮金院分国中之宿坊を相定候通其時分之家老衆よりも被申渡由候条、弥以登山之衆蓮金院江相着、廻向院出入之儀堅令停止候、勿論蓮坊其外別坊江茂相着候之儀可為停止候之間、右之旨囑ニ諸村中江堅可被申渡候、若囑々ニ而他坊江着候由從蓮金院於申来者致其沙汰、曲事之段可被申付候、恐惶謹言、
月日なし

三原左衛門

鎌田治部少輔

山田民部少輔

図書頭

彈正大弼

諸外城

地頭

暖衆中

態令啓候、仍而大和守殿五月十七日之ハツ時分侍老人しやうり取老人被召列、三条之御宿被成御出、無御帰宅候由同廿三日之四ツ時役人伊地知大藏助木の下御藏本江被參候而被申候、則李右衛門三条之御宿江參様子承方々相尋申候得共、三日迄者御行衛不相知、笑止ニ奉存候、夫ニ付御内證申上候、爰許之子細別紙ニ而申入候、尚有馬左近允口上を以可申上候間不詳候、恐惶謹言、
寛永十七年五月廿六日 伊地知李右衛門

重政判

相良権兵衛尉

頼員判

野村大学助殿

仁禮主計助殿

頼娃左馬頭殿

新納右衛門佐殿

尚々大和守殿御道具等御持せ御出立別紙進上申候、自分唯今ニても御帰宅候ハ、追々可申上候、以上、

其以來以書狀茂不申通無音非本意候、仍大和守殿不慮之御分別ニ而高野江被為入笑止千万可申様無之候、上様御心中之程奉察候、御子様達茂思召佩ニ御座候、大事之御身上をむさと被召成何としたる魔之所為ニ候や、御身之儀者御無了簡候、たし御子孫達御子様之御為不可然候、乍去縦大和守殿御跡者絶候共無余儀御事ニ候間、御子様達之儀者いか様ニ茂御談合可有之候次才ニ様子可申上候、将又今度又御進上之御返書候間、即御使相渡候、大和守殿被成被置候御神文ニ茂何ニ而茂子細無之候、弥御分別之浅き儀ニ而今度如斯御成行候、誰茂おとし申候哉と皆々被申事ニ候、去とてハ、御無分別不及是非候、尚期後音候、恐惶謹言、

七月廿四日

伊勢兵部少輔

貞昌判

市來備後様

御酒所

右正文市來早左衛門家ニ有、

我等疋氣度々御尋被下辱候、ふせり居申候故不能対顔心外候、漸得快氣候間、何様罷出候時分御禮可申伸候、仍而昨日於下之御屋敷御成敗者御座候つる処、殿様者不被成御覽由承及候、貴殿御供候哉、承度候、誠奇特千万成御事催感涙候、御若く御座候時分者左様之事を專ニ被成、御自身御ためし被成儀世之常ニ而候、尤科人御成敗之儀者如何様ニても不苦儀ニ候得共、惣別国之御主たる人者御身持被成御重儀肝要奉存候、其人を御殺候事御覽し悪き杯と思召候御心持者仁道ニ而御座候、仁道ならてハ御国ハ長久せさると申ならハし候、孟子云、齊之宣王孟子問曰、王堂上ニ坐シ給フ牽牛堂下ヲ過クル者アリ、王見之曰、何方ニ行、対曰、將以霧鐘、王曰、舍之、吾不忍其殼觶若無罪而就死地、対曰、然則廢霧鐘興、曰、何可廢也、以羊易之、不識有諸、曰有之、曰是心王タルニ足レリ、百姓皆王ヲ以愛リトスレトモ臣固リ王之不忍コトヲ知リト云、右ニ如書付候、齊之国之王牛唯今殺サレンコトヲかなしミ易羊よと為被仰を下々之者共か牛之大ヒナルヲ愛シテチイサキ羊ニ易よと為被仰など、いひふらすを孟子之被聞テ王必定牛ヲ羊ニ易よと為被仰歟と被問タレハ其儀也と被答、孟子是を褒テ仁之道也、此心を被謹タラハ国家ひとしく太平可成といはれたる心に此度殿様之成敗人ヲ御覽不被成して同意ニ御座候、惣別殿様者御替り被成御座候得共、人ヲ御赦し候事を可被成御好候、是ハ仁之心ニ而候、人之上之崩果候事は輕からぬ儀ニて候を誰も心安心なされ候儀今之世之流行事ニ而候、其故ニ其家絶果眼前ニ候、殿様今之御心持弥相易り不申候ハ、御家御長久ニ而御身之御冥加強く可有御座候、天道之矢ハ少茂はつれぬと見得候、右ニ書付候孟子之儀事くとき申事ニて候得共、唐ニ者鐘を新ニ鑄立候而者必

牛を殺て其血をぬり候由齊之宣王之御覽候所を牛を引て通候間、
いつくに行そと被問たれば鐘に血ぬらんと答へたと也、そこで王
之羊に易よと被仰候、是を一向物を知らぬ百姓共ハ羊はちいさき
者なれば牛をおしまれたる様ニ申なしたると也、王之心ニ者唯今
此牛が被殺ニ行、扱も哀れ成哉と被思てこらへられぬ程に見ぬ羊
に易よと為被仰を以下の者共ハ心浅くして悪しき様にいひふらし
たるを、孟子の聞付て宣王ニ被問たれハ一定牛を羊に易よと為被
仰と被答候、宣王は無何心今見し牛の死なん事を悲まれたる迄ニ
而有つるを孟子之是仁之道也と為被褒と也、今度殿様迄之成敗人を
不被成御覽も定而被殺を哀れに思召御覽し兼たる歟と奉察候、貴
殿杯不斷、御傍江御座候而御咄有之儀候間、ケ様之儀共御聞置候
而自然之時者物語ニ茂被申上候ハ、弥御心得も可參候哉、昔之事
者手ぬるき儀にて役には立ぬ様に若き衆は被存候得共賢人之聖人
之爲被言置議を今之世にあて、見候得者少茂不違候、聖人賢人ハ
天之使と申候、けにも左様ニ可有之候、めてたきのあまり如斯ニ
候、恐惶謹言、

十月五日

伊兵部

本半兵様

貞昌

昨日者御茶被成御進上、殊ニ隱岐守殿、志摩守殿御出之處、首尾克
御機嫌宜珍々重々御満足、於拙者迄目出度存候、従是早々祝詞可
申入候処、今日者結句被成御出、過分至極候、將又昨朝者初霜ニ
黃門様御詠歌御座候間奉和尊詠候、爲御慰書付進覽之候、
ふりはへて積れる今朝の白雪ハた、有明の月を残れる

萬木生花不耐看化工教雪学春戀

豐年瑞色盈天下 賞酒家々無所殘
殘の字を奉和如斯候、尚期拝願候、恐惶謹言、

十一月廿七日

伊勢兵部少輔

敷三十様

人々御中

貞昌

今度肥前有馬表江切支宗相発之由候付、先日者細々御書中御対顔
之様再誦三誦卷舒難止候、然処又肥後之天草江も彼宗旨之者共令
蜂起之由候而爰許當時者夫而已之沙汰ニ候、有馬之儀相聞候得者、
松倉長門守殿早々被致歸城、一揆之者共退治被申候様ニと被仰出、
急ニ打立、先月廿四日在所江被着候由追々相聞得申候、殊之外一
揆之者共誘候間、中々長州一事ニ而者罷成間敷由御沙汰候、其故
ニ候哉、唯今迄者何程ニ爲被申付との儀無之候、天草之儀去月十
四日ニ寺沢居城唐津之人數天草之内富岡之城主ニ宅藤兵衛も同心
を以一揆共之相企候所江被相懸候而被打負、從唐津之物頭六人之
内四人相果、三宅藤兵衛戰死候、其様子肥後表より早此方江者疾
注進被申上候、大隅守所より前方天草江一揆共之働様見せニ輕キ衆
五六人被遣候処ニ十四日合戰場ニ行逢候而其日之様子委見候而參
候、其者之申様ヲ此方江注進被申上、是者正説ニ而候間、今更不
入儀ながら申事候、防戦之様子ハ様々一揆共之方ニ相聞得致放火
候付、本戸と申所より唐津勢三千程ニ而被出合候処ニ、一揆之衆
茂大勢ニ而掛合候而唐津衆敗軍ニ而歴々被相果候而本戸之廣サ五
六町程之沙入之渡御座候、前方本戸之渡口迄唐津衆押寄被罷居、
十四日ニ渡を相越被押合候折節、本戸之渡潮引取候而陸渡与成候
故、一揆共弥勝ニのり、本戸之渡を追越、本戸悉焼拂、三宅居城

け心のまゝに戦死無比類候、左様之氣遣も無之月日を送り候、歌に

誰か爲の名なれば身よりおしむらん、はかなき物ハ武士の道とやらん承及候、右の兩人此歌によく当り候、不入長文ニ而候得共、餘り〳〵古風の世をも申渡候而如斯候、恐惶不宣、

又申候、馬のくつ入者如何御覽候哉、肥後表江五日路〳〵路之間も馬にくつはかせすにすまし候つる、御存之前ニ候、よいならはせに候、けに〳〵此由内蔵之介殿父子江御物語候而可給候、

十二月十五日

伊勢兵部少輔

相清兵様

貞昌

御筆人々御中

川 先日者加治木迄茂御送祝着申候、御地 殿様一両口茂可為御返

留存申候、兼而御沙汰候つる留守之事共委可申上置と存候つる、翌日ふと御立故あはたしく候、何事も残多事而已可有推量候、

乍去大形令演説候旨何茂被念入相調候様ニ入魂頼入候、扱々我等

十二歳ニ而候つる哉、水保御陣取立そめしより肥後、豊後之御陣立夫より上洛關東小田原之御陣迄行めぐり、日本平等ニ相治り候

而より又高麗御征伐之時も人数ニ渡楫候、殊ニ高麗者異國之故ニ候や、人々氣つまり聊氣の苦しきなといひ、床ニ伏す歟とすれば

草露の風に散ることく昨日見し人今日ハなくなり誠に如夢如幻、泡影如露亦如電と觀し、今日の日も命の内に暮にけりとのみ存候

つれ共、奇特無恙帰朝し、それより亦上洛、あつまの興迄も年ごとに行返り、東西漂泊二十余年の辛苦ニて候つれ共、今度之御

出陣御供は一世之大事、夜ヲあねす思ひ煩ひ候、主君之御供いた

す哉、武士之戰場儀、本意之事ニ候得共、御供之方々皆々若キ衆

ニて候、薩摩者武篇之營天下ニ普く候得共、御弓箭之氣かひし時、事ニ馴れ覺の有し人々残り少く成果、たま〳〵残り有人々も麒麟

も老ぬれば驚馬に劣れるかたくひニ而中々供奉之思ひ掛もなく候得者合戦之駆引無功之人達無心許氣遣之才一也、亦日本之集りニ

而候得者色々様々之出合当末之分別共ニ而御家之大事を可有御談合も為抑立功者無之、誠ニ御事之欠候ま、ニ我等如き之若輩被

任時之職何之分別思慮もなく、後代之嘲ニ成候半事氣遣之才ニ也、亦弥九郎ヲ始鎌又七郎殿、弥八殿など其外人之子共達之若キ武者

珍敷事ニあひ、矢竹の心ニ任せ、あふなき事共可有之と思めぐらしかなたこなたと心を遣候ハ、時ニ当り手前の後れ候半事氣遣

候才ニ也、ケ様ニ尽心候処、我等留守ニ召置候者其男女によらず、ゆる〳〵と可罷居事不可然由能々申聞度候、我等宿者麓之事候間、

馬場をあるき候人音ニなりともちと心を延候半、城は猶こそ淋敷仕合候半、され共如右氣を詰候而さへ月日をおくり候と思ひやり、

淋しきをも思ひなされ日出度下向を被相待候へと申度候、扱々人の親の子を思ひ候事不珍候得者今度宗可一首をつらね若稚事を

嘆見て御側之衆迄進獻候を被成上覽、哀れ成事共と被仰出、詩歌御吟味なさる、折節御前に有合東郷越前守つかふまつるへき山被

仰付候間、感慨ニ餘り我等度一詩和韻候書付候而宗可江遺度候得共取紛候而此書面ニ而被相送可給候、

思ひ子を旅にやりての跡に身ハいかにしてかハすまん古さと

宗可

忽聴歌篇涙数行 別悲強尚莫傷腸

功成多遂赴歸日 着錦共待到故郷

右之和韻誠ニ不对成儀恥入候得共、宗可之歌身ニしミ入、不願嘲弄、且亦我人ヲ祝候而如斯候、宗可一覽之以後不可有他見候、恐々謹言、

十二月十四日

伊勢兵部少輔

貞昌

げに／＼失念候東郷越前殿歌に

たのミよる宿ゆたかなるみとり子の旅ハ旅にもあらしとをしれ

密乗坊

參

12

幸使候間令啓候、扱茂／＼久敷物遠罷成候、適便宜之時者公儀事ニ書状共色々六ヶ敷した、め候とて中々為存寄方江、我染筆候事も難成、毎夜無音心外ニ候、貴老いか程しハたらけニ御入候哉、我等つふりの雪一丈程積り候、昨日之兵部ニ而無之、むかしこひしやう／＼今度入見參大口杯ニ而わか／＼しき共候つる事せめて語候而慰度候、人の上も我身の上も世の中の脆さ不足論候、天子の御上ニ而も当年之中ニ太子御ふたりニ御別候、誠ニ盛衰満耳遮眼候、乍去我等ハ五百年は先きて見せ可申候、恐々謹言、

七月廿七日

伊勢兵部

本書ニ宛書ナシ

判

尚々竹與殿長く在旅無恙御供ニ而歸国日出度候由一段あへり候、弥たしなみ候得かし世間之藝共新九郎長右衛門などのけてハひやうしの聞たる迄ニ候、一味樋口などの藝ふり夢にも不聞候、手前ハしよしニ而物知たてニ而候、むかしに替り大事の事を如何しくおしへ候、世の中に頭立たる人無之故かと存候、貴老の笛ニ而一番打度候、人々打候を見てはよひのまきれに打度候、

おかしく候、内儀も可相心得候、已上、又申候、此頭巾時分柄之物候間進候、

右書状貞昌誰某ニ被遺候哉、宛書本書不見得、追而可糺、

13

一書申候、然者本脇ニ右衛門殿今度為御使爰許江被參候、彼身上之儀承候得者親父之刑部左衛門殿、惟新様御供被□候付、知行被召上、于今無足之体ニ而候、堪忍難成可被及銀死様子ニ候由承候、誠ニ御法度とハ乍申無餘儀御奉公為被申儀候、其上彼祖父刑部左衛門殿ハ肥州於花之山被遂戰死候跡之儀候間、可被相絶事笑止候条、先一節谷山江呼越候而明地抔相渡、兎ニ角ニ堪忍被続候様にと存候間、左様御心得候而尤ニ候、内々黃門様彼身上之儀ニ付忝為被仰出様ニ風聞候、以時分申上知行ヲ被給候様ニ可仕候条、其間谷山へ被居候様ニ可被成御入魂候、恐惶謹言、

卯月廿二日

伊勢兵部少輔

新納仲左衛門様

貞昌判

比志嶋掃部様

市來備前様

御宿所

14

貴殿御歸国之時分知行可有御給之由從

薩州様被仰出候、被成打立刻書状可被相付候処、貴殿よりも兎角不被仰、何角候而無其儀候、彈正太弼殿、下野守殿江以書状申入候間、此方ニ而御承之様子從御方被仰入尤ニ候、為其一書如斯候、恐々謹言、

六月廿日

伊勢兵部少輔

大嶋久左衛門殿

貞昌

一向宗之事麻植善左衛門殿、中村甚左衛門殿鹿兒嶋老中衆談合を以諸侍者禁制以下之者皆同彼宗門ニ可罷成由廻文被成候、其砌拙者申候者、武庫様御身辺之事者高麗ニ得御意、一向宗ニ可罷成由利口ニ申談候得共、龍伯様御許被成候処、不入儀立申候而者後日如何候可有哉と肱枕被申、鹿兒嶋之御下知之候、然間侍も少々ハ彼宗旨ニ爲罷成由申候、扱々御神慮迄ヲ御守、御兩殿御帰朝をも奉待候処ニ不成正儀事口惜候、於御分別者彼宗ニ爲罷成侍共五人茂十人も成敗申度候、御留主之事候条、上意難量候、是非共向後之見こりの条頭をはね辻ニ立度候、御納得候ハ、御墨付可被下候、

文禄二

自栗野平

八月廿二日

休閑斎

在朝鮮午

旅庵

山崎休兵衛殿

川上四郎兵衛殿

急度令啓候、

御国御軍役之儀ニ付最前吉利下總守、新納右衛門佐を以具ニ被仰遣候、其後談合之様子如何相調候哉、可被聞召由候而三原左衛門佐被差遣候、其ニ付先日以早打其許之様子大形被仰越候、其後談合相究定様子可被仰上と存事ニ候、

一武員兵員調之儀、時分柄世上之取沙汰如何ニ可有之候間、先談合ヲ被究置、以時分次才可被仰調之由被仰越候間、得其意候由御報

申候つる、乍去ケ様ニ御内談候とて諸人緩々と何之用意も無之談合候つる計ニ而候ハ、不図行当られへく間、いつと申候而茂世上之取沙汰ハちと可有之候、左様ニ候とて被打置候ハ、時ニ至而之、御用ニ立間敷候間、武具兵具無之衆ハ用意尤候、就中具足馬之鞍道具之事者俄ニ不成儀候間、別而可被精入候、就其御内談ニ而候、自其許面々ニ被調候事ハ結局響も事々數可有之候条、其許ニ而具足鞍可被調衆之書立を被成被差上候ハ、大阪之御藏奉行江談合候而方々之具足屋江十領、二十領宛茂詔候ハ、はかゆき可申候、又面々ニ詔候よりハ響も有之間敷候間、其書立早々御上せ候而兩人之衆江御談合可有候、從此方も兩人江其段可申候、

一具足鞍取調之衆応知行高下可有之候、或者千石或五百石三百石或者式百石扨之知行之高御沙汰候而夫々ニ具足鞍之直付させられ、右兩人江可被仰渡候、式百石取衆はいかにも下直成具足可爲間、左様之儀も能々其許ニ而被相定尤ニ候、惣別同前ニ候而者分限ニより代物調間敷候、其上具足馬之道具以下茂分限ニ都鄙有之事候条、尤左様御分別肝要候、世上静謐之儀とハ乍申、今度肥後扨之儀も不叶事ニ不図出来候間、明日ニケ様之儀出来候事も不知候処、道具用意候而世上之取沙汰如何候半など、て用捨而已ニ而時ニ至り御軍役不相調可被失御外聞候間、日夜其心懸不可有御油断候、一御国之惣高六拾万五千石ニ而候、其高帳此方御城江惣諸大名之高帳同前ニ御座候事候条、何時御軍役被仰出候共、六拾万五千石ニ可被相應候、然時者乘馬も千式百騎ニ而候得共、左様ニ者逆茂調間敷との御事ニ而先五百騎之用意可有之由被仰出候、責而夫程ニ者内々御用意候ハ而不叶候条、無申迄候得共、構而々々御油断不可有候、爰許茂実正ならぬ儀を色々取沙汰候間如何様之儀ヲ

被仰出候半も不知候、

一 中国四国九州衆者夏御暇ニ而被成帰国候、当暮ニ社爲越年可有御

参儀候処、七月中相立候而可被参之由近日皆々江被仰遣候、如何

様之御用候哉と中事ニ候、勿論爲存人無之、ケ様之儀も心持之爲

ニ而候条申事候、むさと御沙汰者御無用候、

一 爲差当儀ニ計リ上下共ニ御取付候而御借銀返弁之儀者当時沙汰も

無之体ニ候、此儀者寤寐可有御忘儀ニ而無之候、琉球表之御才一

覚共如何相調候哉、後便ニ委く可被仰越候、右之趣爲可中入、慇

与飛脚申付候、猶期後音候、恐惶謹言、

寛永九年

伊勢兵部少輔

八月廿二日

貞昌

下野守

久元判

喜入撰津守様

川上左近將監様

人々御中

117

急度申候、

一 当年出物高一石ニ付米八升宛真赤米可爲半分由今度平田盛右衛門

を以江戸より被仰付候、但右之内真米ハ半分より上ニいか程成共

可有上納、米・大豆直成之儀者後日出物奉行より可被申渡事、

一 銀子を以上納候ハ、其時々之直成ニ可有算用事、

一 来年正月を限りニ可有皆済候、若於未進者 月朔日より可爲利付候

間、能々可被相付候、此旨事ニ付たはらの梅米之調様御蔵入ヲ被

承合可被念入候、鹿相候ハ、相納間敷候条其段名中在郷江堅固ニ

118

可被申渡候、聊油断有之間敷候、恐々謹言、

辰九月十一日

左衛門佐印

治部少輔印

因幡 印

右書状宛書本書ニ無之、追而可相糺也、

高麗人御感状

今度於朝鮮国泗川表大明朝鮮人催猛勢相働候処、父子被及一戦、

則時ニ切崩敵三萬八千七百餘被討取之段忠功無比類候、依之爲御

褒美、薩州之内御蔵入給人分有次才一円被宛行訖、目錄別紙有之

并息又八郎被任少將、其上御腰物長父義弘江御腰物正被爲拝領於

御当家御名譽之至也、

慶長四年正月九日

安藝中納言

輝元判

會津中納言

景勝判

備前中納言

秀家判

加賀大納言

利家判

江戸内大臣

家康判

羽柴薩摩少將殿

119 一清時 左近將監

太守元久公賞清時之忠節賜屋久惠良部兩島、是故併種子嶋領之也、清時嫡子時長播摩守早世、弟左近將監時相續、当家永享八年七島之内賜臥蛇・平二島、併領之本領也、清時八代之孫左近大夫久時入道一琢文祿四年転改種子嶋・屋久島・惠良部三島而拝領薩州知覽見院、慶長四年己亥夏再賜種子嶋、是時屋久島・惠良部島二島ハ暫爲借地、後爲公領、從是種子嶋一島全領之、

当家之字懸望事、古今之例難計、先祖意釣已米彼清時被波濤湛々防戦之勤功不淺、謂準其感到免許之狀如件、

大正八年庚申

十月五日

義久判

種子嶋三郎次郎殿

120 定

薩摩国長島

一在々所々諸百姓さう／＼けんちうすへき事、

一かうさく以下無機遣可仕事、

一軍勢甲乙人対地下人不謂やから不可申掛事、

右條々若違犯之輩有之者、忽可被処嚴科者也、

天正十五年卯月日

秀吉判

121

惟新公御逝去之砌將軍秀忠公より上使花房五郎左衛門尉元和五年未十月六日薩州出水に來着して同十日到鹿兒嶋而弔之、賜御書并御香奠、其御文之趣

惟新死去之旨無足非仕合心底之程令察候、仍爲香奠銀子千枚遣之、

(朱)通

花房五郎左衛門尉委細可述候、謹言、

八月廿九日

秀忠判

松平薩摩守殿

122

去ル朔日出水衆小倉大炊介を以中上候、定而可相違候事、昨朝十藏殿江御手御見廻として罷出候、御手茂痛不申候、左之かひなに鉄炮すり手又甲に石当り、其石鼻と口とにかすり中候、何れも浅手ニ而昨日ハ仕寄見廻ニ御行被成候事、

一十藏殿被仰候茂何比人数可参哉と承候条、海陸不口出、其上古より物毎ニ兼々仕習はさる国ニ而候条早速ニ者可難成歟、今月中ニ茂可参揃候哉、乍去被仰付儀ニ候、此節之御奉公ニ而候条折角精を入片時も早く人数可申付与申上候、

一御国より人数不参候ハ、城責は有之間敷哉と取沙汰申候事、

一本山新右衛門今口参着被申候、御返事之通以書状申入候、二之宮

奎右衛門使ニ遣申候付新右衛門ハ留置申候事、

一板倉内膳殿戦死之刻、内衆式人計爲相付と申候事、

一内膳殿朔日之晩ハ築川江船ニ而御越於彼地灰ニ可被爲成事、

一内膳殿御子息主殿介殿者此許ニ御在陣ニ而候事、

一諸国使者餘多戦死ニ而候、松平隱岐守殿使者松野三郎左衛門・河

内守殿使者茂戦死ニ而候、隱岐守殿使者老人深手ニて候、何れも

戦死之衆者帳ニ付江戸江上り申候由伝承候、野元源左衛門事も帳

ニ付たる由承及候、左茂候哉、昨朝十藏殿御尋ニ而候事、

一有馬玄蕃殿衆先手ニ而候処ニ夜内より敗軍事々數体ニ而就其内膳殿・十蔵殿御腹立ニ而先かけ被成候、

一有馬殿衆者犬猫ニ茂劣りたる様ニ陣中之沙汰ニて候事、

一鍋嶋殿衆茂余多戦死ニて候、板倉殿衆者為残士も無之候間、仕寄場之番可難成候条仕寄場者立花殿江可相渡と申候事、

一立花殿浜手ニ備老人茂不出城責見物ニ而候事、

一城涯ニ者戦死之者共于今其俣召置候処、下より穴を堀、其穴より夜々出候而刀脇差竹たはを取申候、夕部も五ッ過ニ時之聲を場多人數押出、鍋嶋殿仕寄場を追拂玉葉箱迄取たるよし申候事、

一城之中ニ者矢種子玉葉多茂無之と、雜説ニ者鉄炮之玉ニ者豆板を(射)入謝申由候事、

一肥後衆今日迄者着陣無之候、此元江罷居候船共皆々戻り候条、定而明日あたり可被參候と存候、筑前衆者六月此茂可被相付かと聞得候事、

一御国衆參候ハ、一手柄可有之由上使衆其外車勢取沙汰之出候よし是者大事之儀候条被罷立候衆彌不及申上候、被入御念尤奉存候、城責ニて候条立之板・竹たは・くわ・竹のほり・はしら・鉄炮可為題目事、

一今月二日ニ野州老、同凶書頭殿、越中守殿被成御打立候由目出度と存候事、

一松平河内守殿薩摩江御下りニ而直ニ此元江可為御出陣哉、定而船茂御国より被仰付候半共存候、御国衆打立之最中ニ而御取紛之段奉察候事、

一河州様御陣屋道具御国ニ而木作揃上道具筥流球筵其外陣具等參候ハて可為御事欠事、

一松平伊豆守殿、戸田左門殿陣屋者越中守殿被仰付上、ふきかへハ筥ニ而候、たる木は竹と見へ申候、柱ハ三寸角計り導木又者丸太ニ而候事、

一御国衆陣場浜近くニ取候而我等茂罷居申候事、
一陣屋廻りニ柵を結せ可申候条丸太可被遣候、又先日申候様ニのほり鉄炮小差半首成次才ニ大方ニ可被仰付候事、

一石打ニハせうたかふと能候而皆々仕候、城之内之者も右之甲着申候条、内々其用意可被仰付候事、

一伊集院衆中被遣候、能時分ニ參着被中候事、

一出水表ニ船有之間鋪候条、我等馬船遣申候、

此船ニ出水衆先少々成共人数御乗せ可被遣候、人数一度ニ被參候ハんよりハ追々參候へは御国之内ニても此地之近キ在所之者共先為參と致披露候得者無御油断被仰付候通上使衆御満足ニ候由伝承候、他国衆茂其分ニ有之と見得申候事、

右之條々、之宮奎右衛門江申含候条委曲口狀ニ可相達候条可被届聞召候、以上、

寅正月三日

三原左衛門佐

山民部少様

川 將監様

野州 様

參

123

一長々所勞如何無心許候、及寒風候間能々保養專一候、依之爲見廻新庄左近差遣候、并鷹之鶴相送候、猶土井大炊頭可述候、謹言、

寛永十四年

家光

十月廿九日

薩摩中納言

敬白起請文前書之事、

一被對秀頼様御疎略有間鋪之由尤候事、

一封御父子御兩三人疎略毛頭有之間鋪候、附拔手表裡有之間鋪事、

一倭人之族有之御間相妨輩雖有之直談中御互三相晴可中事、

右若於偽申者

靈社神名略ス

慶長四年己亥卯月二日 家康御血判

薩摩宰相殿

同 少將殿

御下以後不申入候間、以使者申候、仍伊集院源次郎于今城を相抱申候由承候、為御譜代家人之身、ケ様之儀為自今以後候間、早々御成敗尤候、雖然無聊示人数等無異儀様被仰付肝要候、委細者彼使者口上三申候条令省略候、恐々謹言、

慶長四年七月九日 家康判

薩摩少將殿

御下国已来就御見廻不被申以使者被申入候次ニ縮緬百端、帷子百矢根〔朱〕千力、十被進上之候、誠ニ御吉信迄候、然者伊集院未居城柵籠候由於内府無御心許被存候、于今不致下城候ハ、早々御成敗候様ニ被存候、御人数等何時成共御用次才可被中付候、雖被顯直札候、猶自分拙者可中人之由候、委細山口勘兵衛可申上候条不能具候、恐惶謹言、

慶長四年七月九日 伊奈図書頭

薩摩少將様 今成判

人々御中

六月廿四日之御状、昨日十四日參着、令得其意候、源次郎先手之者、籠置候城〔山田〕、則時責破、數百人被討捕之由、寔以潔儀共ニ候、弥無御油断御行尤候、定源次郎居城〔郡城〕、程有間敷存候、乍去人数等不相損様被仰付可然候、尚重而御吉左右待入候、恐々謹言、

慶長四年七月十六日 家康判

薩摩少將殿

御札紙披見申候、仍源次郎暖之儀表裡之由再言候、委細兵庫頭より可被仰付候間令省略候、恐々謹言、

慶長四年九月晦日 家康判

龍伯

薩摩少將殿

御状拜見仕候并御兩使口上之段委細承届候并伊兵部少輔令披露候、殊ニ今度之一儀從奉行衆雖被申入候、御父子無御承引趣被仰越候、是又具ニ中間候、此上可相濟様子御兩使口上ニ申入候、能々可聞台届候、雖不申及候、此節無御油断儀肝要存候、爰許馳走之段ハ并兵少致談合隨分不可存疎略候、兎角早々被成御上洛内府江御禮被仰候ハ、從前々入魂之筋目ニ言解可事済申候と存事候、猶其儀者御報可被仰越候、為御迎拙者可被下候、為其段是茂使者差添進之候、尚和久甚兵衛申含候条可得御意候、恐惶謹言、

慶長六年

十月十三日 山口勘兵衛

直友

龍伯様

薩摩少將殿

御報

敬白起請文前書之事

一 龍伯少將御身命之儀恙有御座間敷事、

一 御國之儀兼而如御約束相替儀有御座間敷候事、

一 兵庫頭殿御事、右之御面所御入魂之上者、無間違様御取洛可中事、

右之趣於違背者、

本田佐渡守

慶長六年八月廿四日

(朱)信
正行

山口勸兵衛

島津修理太夫殿

直友

羽柴 少將殿

131

兩度之使者祝着候、然者薩摩・大隅・諸縣之儀此間被相抱候分相違有間敷候、少將事其跡被相讓事候間不可有別儀候、兵庫頭儀者龍伯無等閑候間、異儀有間鋪候、日本國中大小之神祇別而八幡大菩薩毛頭表裡不可有者也、

慶長七年卯月十一日

内大臣

龍伯

132

筆令啓候、於天下之儀者從古歷可被仰入候条不能中候、於于今者御人数國中無残被召連、急度御上洛肝要候、玉葉御兵糧等之儀者

從公儀被仰付候条、御人数有次才御馳走此時候、猶期面上候、恐々謹言、

八月朔日

備前中納言

秀家判

安藝中納言

輝元判

島津少將殿

御宿所

133

寛永十五年寅二月廿八日辰之刻ニ有馬原之城責落之時、薩摩之軍衆之内より貴老友野七郎殿、藤井助四郎殿者被成先陣、於屏際被碎粉骨御働之處ニ敵方之石打ニ被爲逢当、三間程之石垣より下ニ打落申候、被遂御名譽候儀我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、爲向後之證文如件、

寅三月朔日

有馬久右衛門

日高拾兵衛尉殿

参

純々判
本ノママ

134

寛永十五年寅二月廿八日辰之刻有馬原之城被責落之時、薩摩軍衆之内より貴老有馬久右衛門殿、藤井助四郎殿一番ニ城乗被成候而於屏際被碎粉骨御働之處ニ敵方之石打ニ被相当、三間程之石垣より下ニ打落申候、被遂御名譽候儀我等茂同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、爲後口證文如斯候、以上、

寅三月朔日

友野七郎判

日高拾兵衛尉殿

136

寛永十五年寅二月廿八日辰之刻、有馬原之城被賣落候時、薩摩軍衆之内より貴老友野七郎殿、有馬久右衛門殿一番ニ城乗被成、於屏際被碎粉骨御働之處ニ敵方之石打ニ被相当、三間程之石垣より下ニ打落申候、誠ニ被遂御名譽、我等も同前ニ城乗仕儘ニ見届申候、爲後日誰人御尋候共此旨無相違申達候、仍證文如件、

寅三月朔日

藤井助四郎判

日高拾兵衛尉殿

137

掟

一平佐城普請ニ付普請衆兵糧渡方之儀一日ニ三度一人ニ付て七合五勺ツ、の事、

就右之儀而御藏人より可罷出御用物并普請衆之事可隨御觸事、

右之両条之事北郷作左衛門殿、相良新左衛門殿より可被仰渡候間、ゆるかせなく可被相調也、

十一月十一日

伊勢平左衛門判

鬼塚主税助殿

宮路三之允殿

138

近衛龍山様より、義久公江被進候御状写

猶々芸州之儀信長公御出馬次才調略之子細共候、少戔手間不可人之由相聞候、呉々其方之手合遅々候而者不可有其詮、結句可爲義絶之基候間、加御調談至関戸御動專一候、
得好便令啓候、抑堀地下候刻至信州出馬ニ付、不能懇事候、然者

即時ニ信甲駿三ヶ国属本意、剽閼東八州悉及懇望、無残所候、来

七月於中国信長公進発治定候、連々被申合如手筈急度其已前先被及出陣、一廉之御働御行肝要候、万一至遅延者其方之虚言与云、併拙身失面目与云、彼是可爲遺憾之条不可有御油断候、次果鷹此節可差上候旨堅承候故御待候、早々御上尤候、猶索因可申入候、恐々謹言、

五月十三日

御書判

修理太夫殿

右本書町田幸太郎殿家ニ有之候、

139

態与申候大坂御無事相落此比下着申候、仍天草炭老倭令進之候、惟新公江御茶被進之時分之用ニ相立候様ニと如此ニ候、猶期後音之時候、恐々謹言、

二月廿日

寺志摩守

道甫老

実名判

御道所

140

懇令啓候、仍從若殿様御前被仰出候貴老か事急度被成上洛、御上様江御奉公御中可被成由ニ候、さてハ近日相良新右衛門殿上京可爲候条御同心被成候而上京尤候、日限之事者相良新右老御熟談有之、御忙たるへき儀有間鋪候間、無御異儀御奉公專一候、恐惶謹言、

七月七日

山田越前入

肥後藏人殿

利安判

御中

薩州川内隈之城之内

(朱) 山内淡路守初太郎介父国分助友賢二十才之時於庄内之役戰死、其初太郎助母在胎中、出生

作 東手村

余分之内割付候畢、

高田畠合六斛者

後母山内淡路守二嫁ス、因テ太郎介ニハ山内家ヲ繼ギ号淡路守、実家国分氏ハ福本丹後二男半右衛門ヲ以養子トス、二代淡路守ハ正保ニて西十月廿日卒ス、法名繁詠林昌居士稱名寺葬ル、本文御高拝領之淡路守初代可成、

右之通高麗奥陣已束

御奉公被任候故、爲加増被遣者也、

文祿五年

桂太郎兵衛

九月十五日

忠詮判

山内淡路守殿

以前度々以書狀申候、定而可相達候哉、返事不到来無心元候、抑此卷遂一覽候、執々面白絶言語候、奇妙々々、仍奥書乍斟酌書付候、外見其憚多事候、心事猶重而可申述候也、状如件、

正月七日

近衛植家判

島津相摸入道殿

雖未能申馴儀春成下国之条難過好便令啓上候、仍若輩御教訓御詠拜見仕候処、余金言就難打置、近衛殿下様備上覽御奥書申調候、則御書被成候、委曲之趣兵庫助可被中入候、何様不図罷下御礼申述候、此等之趣可然様御披露可希候、恐々謹言、

天正十五年

半松斎

正月十六日

宗養在判

野村兵部少輔殿

右式通案スルニ時代相違ス、然其遠国故日新公御存生之筋ニ被恩召如斯歟不詳、公ハ永祿十一年之御逝去也、二十年之後也、

一陽氣所発金石亦透、精神所到何事不成、

一心ヲ能定物毎無邪事逆茂氣ヲ附可得道事、

一平日心ヲ靜言語生質より押靜、隨ニ律儀相見得候様ニと可心掛事、

一酒宴遊興之場ニ連候而一入可相慎儀專要也、

一醉より則時ニ寢入候体尤神妙也、長居不宜、

一諸事共ニ無詮利立無益事、

一言舌題目之儀候条不断可心懸、外向別而和ニ見得候而楚忽之儀無之様九志一言不忘事、

一心安衆中不絶音信可申通也、余り近きハ遠さかる基ニ而候間其心得可入事、

一忘而茂、上様之善惡尤以申問鋪事、

一公義之御仕置等之善惡御役人中之排判可爲沙汰限事、

一当世之人倫を見習候僻事也、乍不及茂古人之教大將之被成置候儀

ニ可氣ヲ附事、

一禮儀ヲ乱シテハ身之可治所無之、能々是等ヲ相嗜礼法可相勵事、

一其身之分限ヲ不忘候而芸能共ニ人ニ不及事深ク可思事、

一一身之可了簡肝要候而油断有間敷事、

一其基乱レテ末治者あらしと云古語之通先一日々々々其基之不乱儀ヲ專可相嗜事、

一一家之貧福者天之續也、強而悔可恨儀無之、雖然自滅すると天之罪とハ替有事何事茂無働て續を待事ハ是不替之至也、能々可嗜辨事、一私之手前少茂無之候而万端ニ付他人ニ差入口一期之不覺之事、

一 諸篇後悔而已ニ而其当座ニ者千非を悔候得共改ル事なし、誤而者改るニ無憚金言尤可相守事、

一人間之職分不尽事ニ候といへ共、先文武兩道之外者可信氣限、右之兩業不成ハ人倫ニあらずと可存事、

右之二十二ヶ条身命之危難ヲ爲助、日々の禁ニ愚心之及了簡之分記置畢、心ニ不能事共致到来候者、此書面ヲ考、明ニ其事を可成、予か助成事何之疑有間鋪者也、仍白訓如件、

伊勢兵部少輔貞昌

右二十二ヶ条とありて十九条アリ、三ヶ条不足、追而

正本ヲ得テ可写也、

144

口略之、種子嶋強正殿家ニ有之本ノママ

一 御茶入ニツ御進上候、兄事ニ候、其内なすびの御茶入取分見事ニ候間、先々御前ニ被召置候、奇特成御道具御持被成候と中事候、今一ツ之丸盡ハ自然所望之方茂御座候ハ、可承合よし内膳被申候間、大事成御道具之儀ニ候得共先々預置中候、何共御爲能様ニ仕候而見可中候事、

一 御屋敷之儀茂内膳口上ニ可被申達候事、

我等孫之儀又三郎様江御縁與之儀被仰出候、雖斟酌千万ニ御座候、

不聞召分候間、不及是非、御祝言共申上候、先以日出度候、尚期後音入候、恐惶謹言、

月二日

伊勢兵部少輔

種子嶋武藏守様

貞昌

145

琉国江被遣候条書之内

一 其地之女從関東御用之間先々可被差渡候、

但十二歳より十九歳迄之女可被遣候事、

以上

三月廿二日

三原諸右衛門

重種判

伊勢兵部少輔

貞昌判

比志嶋紀伊守

国貞判

町田勝兵衛

三司官

久幸判

右之通琉球江被遣候覚書之内ヶ条ニ相見得候時代者慶長十七年ニ而可有之候也、本ノママ

146

就大学寺事致粉骨候由被聞召候、忠節之至尤以神妙、

仍太力一腰遣候也、朱二通

義教判

樺山美濃守殿

147

此度勝久就山中別而小倉武藏守庄内都城迄拙忠節候間、家之字久をゆるし候也、

天文八年

勝久判

九月廿六日

小倉武藏守殿

148

連々以拜面如申入大友与島津干戈之段不可然存候、所詮令和睦尤候、大友落着之条来年出馬、毛利可令追伐候、其刻双方別而粉骨対天

下可爲忠節候、被成其御心得被仰含伊勢因幡守可被差下事、

八月十二日

信長

近衛殿

雖未相通候、今啓候、仍大友方鈍拙之事、不可然候、所詮和合尤候
歟、將又此面事、近年本願寺令緩急之条誅罰之儀申付候、就大坂
可退散由依懇望令赦免、到紀州難、質罷過候、畿内無殘所屬靜謐候、
来年於薩州可出馬候、其刻別而御入魂、对天下可爲大忠候、尚近
衛殿可被仰与閣筆候、恐々謹言、

八月十二日

信長

島津修理太夫殿

御宿所

120

迫而於今度高木嶋原表被得勝利候、尤珍重候、此等之儀爲可申達染
筆候、仍新勅撰一冊定家卿進之候、於御白愛者可爲本望候、猶抔
名寺其阿可有演說候、真筆

五月廿八日

(大友)
左兵衛督義統

謹上

島津修理太夫殿

121

薩摩守先承之而伝而與之畢、委細而使所令承知也、貴翁之譽、且於
我等播外聞耳、然則其国之置日聊不相替、至于官人侍土民等迄無
氣任可守奉公由堅可被仰付、若緩疎之子細於有之者、稠可致其沙
汰之間、能々可被相守此旨者也、恐惶不宣、

寛永廿一甲申

薩摩守

七月廿六日

光久

謹上

中山王

別儀ニ不被思召候、雖然当分御隠家之式候得者、御知行等無之假御
存分ニ不罷成候、自然御方ニ知行之御取暖共御座候ハ、少し御手
付も被成候様ニ有度思召候、乍去其許之様子を難計思召候、過分
之儀ニ而者在之間敷候条、何卒貴老のため可然様ニ調達可仕之由
可申旨巨細源左衛門可中候、恐惶謹言、

尚々加治木寄々知行於有之者幸之儀と被思召候、(朱)「本ノマ」
旁可被御精事
所仰候、已上、

十一月廿八日

本田源右衛門

伊勢兵部少輔殿

人々御中

122

御書中得其意候、仍上使御下向ニ付石原江御昼休之家作爲被仰付
之由候、いかにも軽く如御柴たるへく候間、其心得を以御振廻所は
古之家敷さ、かけ杯之類ニても可然候半由候、御供衆振廻所ハ是
も片ひら屋ニ而も五所六所ニ而輕きはたこ之類之御振廻たるへく
候、其故ハ三四百人之儀候間、一所二所ニ而者難成候、田舎之事
候間、有休之様子不吉候、振廻さへ被下候ハ、可爲肝要候由候、
然者普請ニ付従前方衆中大工ヲ被仰付間敷、加治木御使衆江御談
合候而御調尤候、猶御用之儀共候ハ、追而可中承候、
恐惶謹言、

仁禮藏人

二月十日

賴景判

鎌田源左衛門

政有

山田民部少輔

有榮判

鎌田出雲守

政弘(朱)「近力」

本田藏人殿

御報

154 態令啓上候、仍從駿河之御使「昨日」下着候、駿府之御仕合早晚ニ茂

勝一段可然御座候之由承千秋万歳奉存候、乍利口弥々御賢慮可人

事ニ存候条、此等之趣伊兵少老迄用一書候、尤御方江令祇候雖可

申上候、煩未得快氣平臥之体候之間、貴老迄可申入候、御仕合を

以宜預御披露候、恐々謹言、

新納五郎右衛門入道

卯月七日

遊浦在印

本田伊豆守殿

御宿所

155 一書申入候、仍又八郎様御抱瘡一段御心易御座候、一昨日迄ニ御抱

うミ揃申候、昨朝より次才ニやね引申候、三日中ニすハリ可申

由道ニ被仰候間目出度存候、別ニ替儀無御座候、此等之段爲可申

上、飛脚差下申候、細々申入度候得共急便候故、書中大方候、追

而御吉左右可申入候、恐々謹言、

三月六日

町田図書頭

比志嶋掃部助殿

上井次郎左衛門殿

本田源右衛門殿

人々御中

本ノマ、
善在判

156 諸所衆中近年堪忍難成ニ付、方々江被行散之由地頭無屈其所ニ不

被罷居衆ヲ知行被召上御内可被相離候、若又私ニ御内相離誰人江

茂奉公採いたすにおひてハ重罪之御變可被仰付候、此旨を以諸所

地頭并囃衆可被念入者也、仍御法度如件、

元和八年

伊兵部少

六月廿四日

貞昌判

比宮内少

国隆判

三備中守

重種判

町田図書頭

久辛

喜 櫻津守

忠政判

本田源右衛門尉

御宿所

157 一書申入候、仍於京都可被相調御用物注文、從御荷物衆被持七候、

渋谷四郎左衛門殿・上井東市正殿江被仰渡相調御上洛可被奉待候、

恐々謹言、

卯七月廿七日

比志嶋宮内少輔

国隆判

喜入撰津守

本田源右衛門殿

忠政判

御宿所

138

此度被仰付候御船之帆柱蒲生米丸之内牧神山口被取置候、御急用之儀候間、来ル四日五日之間蒲生・吉田両所之衆中追立ニ被仰付、帖佐口迄可被相下候、右木数之儀者本田源右衛門との江書状を以申越候条不及口能候、次者加治木之内御蔵入小山田村辰之丞出来之由、其元衆中念ヲ入被見懸候様ニ可被仰渡候、恐々謹言、

七月朔日

伊兵部少

貞昌判

比宮内少輔

国隆

下野守

久元

尚々帆柱之儀帖佐・蒲生町衆江被仰付候処三百人ニ而可曳木有之由候而蒲生・吉田之衆中被相渡候間談合候、而可相下事肝要候、

比志嶋掃部助殿

本田源右衛門殿

御宿所

(朱)「備」

139 惣令啓上候、仍蒲生之御城米借用方ニ付請状之儀被仰聞候、惣別伊地知对馬守殿存ニ而候条彼方可被仕候得共、三人之事者我等下

知ニ而取成中故相調彼者江持セ進上申候、上納之節者可得貴意候、尤拙者持參可申候得共、当分加治木就御普請見廻中故不隙、乍慮外飛札如此御座候、餘者貴面之折節可申述候、恐惶謹言、

三月七日

本田源右衛門尉

本田伊賀守殿

親存判

高崎民部少輔殿

新納小右衛門佐殿

人々御中

140

今度御算用ニ付蒲生御城米究帳早々可被差出之由算用奉行衆より一度々爲被申理由候処ニ今ニ延引不可然候、御算用度今月中ニ相洛事候間、急度帳被差出候様ニ可被仰渡候、聊延引有間敷候、恐々謹言、

尚々行司事も參可被申由候得共、于今不參候、早々可致參上、

算用奉行衆合点候様可被仰付候、以上、

卯月十八日

三原備中守

重種判

本田源右衛門殿

下野守

久元判

御宿所

141 急度申候、去々年たはこ出銭、于今納懸有之由請取衆被申候、何分之儀ニ而延引候哉、曲事深重ニ候、則相揃三日中此元藏元江相渡

候様ニ可被仰付候、聊緩有間敷候、恐々謹言、

西二月十六日

川上左近將監

久国判

喜撰津守

忠政判

本田藏人殿

御宿所

162 谷山衆中有馬主馬之允於吉田町人ヲ買取候処相走候然者中人仕候者自然彼賣人走候ハ、女房を有馬殿江可相渡由髓書物仕候間、去年七月より中理候得共不相落候、從公義於被仰者無余儀段可相落之由彼町之部当中由候間、一書如此候、委被聞召届早々相落候之様ニ御入魂所仰候、恐惶謹言、

四月廿九日

伊勢兵部少輔

本田源右衛門殿

貞昌判

人々御中

163 蒲生衆天辰二右衛門殿より知行高九石余瀬口主税助殿永代ニ被買取候ニ付、本ノママ乍貴老より御状被相付候条則披露候、於其許も様子細々被聞召届、自前々無別儀子細ニ而候ハ、無異儀高ニ被相加候而可然候旨其心得尤候、恐惶謹言、

八月十二日

市来八左衛門

本ノママ良判

山田民部少輔

有采判

此宛不知

164 尊書令拝見候、仍先度者偶雖御越候、乍早晚御無會尺之至無心元之

由被申事候、然者藥酒并今焼之皿被送遣候、満足之由直ニ被申入候条不能詳候、將亦至我等先度者種々被爲拜領、就中見事之御脇差被下候事誠以忝次才書中不得申候、餘者御使者江申上候条令省略候、恐惶謹言、

三月六日

本田源右衛門

寺沢志摩守様

尊報

親商判

165 玄蕃様御他界ニ付後世之御供被思召究候由昨日預御書中殊以最期之御歌迄二首拜領、扱々驚存御心底之程感入計候、殊ニ浮世如夢醒安世ながら頼ニ身命ヲ捨てた、れ候事無此類勇者ハ不恐、知者ハ不惑之御心中尤連々之御思慮顯然之至と存候、且御名譽ヲ致感慨、且生米之別離ヲ歎、落涙難留、愁傷之餘愚歌二首短冊ニ書付令進献候、生別之暇乞追薦之寸志云拾云恰御存生之内之御一覽可爲本懷と先呈一翰候、拙者事去夏已來相煩養生最中ニ候間、愚息新兵衛尉近日指越御見廻可申候、恐惶、

正保四年歟

長崎助左衛門

丁亥十月晦日

貞義

坂元九郎左入道

将安尊老

人々御中

命をは捨て其名を残すこそまといぬ世々の道しるへなれ
君と共に捨立玉のおのつから真の道を行ふならまし
命をは軽く捨てにし心こそ安く榮む後の世ならぬ

知行目録

隅州曾於郡之内

高信解

松永村之内

右知行之儀布袋繪讀御進上ニ付爲褒美御給候間、全可有御領地者也、

元和六年五月十三日

三原備中守

重種判

伊勢兵部少輔

貞昌判

町田図書頭

久幸判

喜入援津守

忠政判

下野守

久元判

源七郎殿

右島津中務殿家ニ有之永吉主也、

貴札致拜見候、仍 大御所様江龍伯御遠行ニ付而爲御遺物長光御腰物并左文字御脇指御上被成懇ニ致披露候處、御仕合共御座候間御心易可被思召候、委細御使者可爲演說候条不能詳候、恐惶謹言、

慶長十六年

本多上野介

十二月十八日

島津陸奥守様

急度申入候、仍かんこうふ相調ニ付而唐口江少々御人数可被遣旨被仰出候条、内々其御用意候而御意御待可被成候、爲御普請御人数爲御上候事御無用ニ候、尚唐口江御人数被遣候事ハいつて此方より之御一左右才ニ可被成候、恐々謹言、

尚々唐口江之儀御手前直ニ被成御越事ニ而ハ御座有ましく候、御人数計可參候間御心得可被成候、以上、

慶長十五

本多上野介

閏二月十日

羽柴陸奥守殿

夜前者御出之處何之風情茂無御座、早々御帰別而御名残惜奉存候處、爰許より小野四郎尊公之御宅江御人来、夜のしらみ候迄御し米被成候由、扱々御尤千万羨數も目出度奉存候、いよく四郎尊公と一生御し米可被成儀珍重く御し米之程かんし奉り爲御歎如此御座候、頓首、

尚く御惜中候弓一張返進いたし候、此内、御慈意忝候、

イ水無月

六月二日

内村半平

春田主左衛門様

御報不及候

不存寄之處ニ尊書到来、さてく迷惑之御筆ささみ足は夢ニ而は無御座候や、如仰貴様御宅より小野氏所江少し用事御座候而一刻之間參候、定而林氏より御注進爲被申ニ而可有御座候、彼仁者別而わる口之人ニて候、貴様御事はいな御くせニ而他人ニ物をいせぬ事か御すきニ而候間、林氏より懇と尾ヲ付羽ヲ添中候半と存候、四郎尊公と一生しめとは何之事ニ而御座候や、晚付致參上委曲可

申入候、返ス、林氏ハ佞人ニ而候、恐惶謹言、
則刻
イ六月日
春田主左衛門

尚、此内遣置候弓御返し受取中候、御用之節ハ何時ニても可
被仰付候、以上、

内村半平様
御報

174 夕部は人を咎むる犬の聲絶而御見廻申入候得共御留守ニ而不能拝面、
空鋪罷帰候、然者今朝内村半平殿より夜前ニ貴様ニ被仰入候間、拙
者江御かし置被成候琵琶可遣旨承候間、早速進遣候、定而ゆる、
御咄しミ可爲申与察存日度候、少々御用之儀も有之候間晚付ニ
は内村氏宅江御出之刻一刻御立寄可被下候、爲其如斯御座候、頓
首、

イ上八日
九月十二日

荻野弥七

權之助様

參人々御中

貞利

仇人の袖の枕に百とせの契りし夢を破る秋風
是をみて情の心あれや君二七の春ハ一度なりけり

172 一筆啓上仕候、拙者儀尊公様江御執着ニ奉存明暮申度心底、浦々山
々御座候得共、此事生之隙御座候ハ、是非共御直ニ可得御意と存
候処ニ、得幸便棹得候心地仕申上候、如何思召候而茂一筆之御返
事を得度候、尚期後縁之節候、頓首、

佐々木五郎

菊月三日

歳元直判

伊沢松之助様

174 御手紙奉得其意候、拙者江御執着之由近此無割御事ニ而御座候得共、
差支申訳有之候間、成り中間敷候、乍残念思召止り可被下候、以
上、

九月三日

本力弥五郎様
佐々弥五郎様

伊沢松之助

174 今夜者參上可仕と先程者申上候得共、御存通致怪我居候ニ雨降候間、
先々御断申上候、ケ様之物前ニ至り武士之約束をたかへ申事誠ニ
以残念之心中無申計候得共、不及是非候、恐惶謹言、

林鐘二日

春田主左衛門

内村半平様

175 両口者不得御意候、定而御息才ニ可有御座と奉存候、路も能御座候
間待入候、隨而此鴉一籠致進上候、於賞翫者可爲幸候、且亦傳聞
候得者小野四郎尊公より御賞被成候爲別御秘藏之由、其被下かし、
四郎尊公之御引出物強而者不申上候、恐々謹言、

水無月四日

内村半平

春田主左衛門様

參人々御中

武重判

176 猶々申候彼若衆只今參候、かさも無之見事さハ今も唯ならず候、
日本国中大小之神祇非偽ハ早々御出候得と於御油断者沙汰之限
たるへし、但御届は此分候、於無御出者意易両人中談盃可給候

問、向後不可有御恨候、無御返事問ハ八幡々々盃のミ不申相待
申候、早々御返事可承候、此者一度ニ早々御出可給候、かしく、
追而申候、昨日内々御物語申候かさかきの若衆只今至当所来候、
かさも無之ことくくなをり申候、弥若衆ふり一入あかり申候、
盃きこし召度候ハ、只今不移時刻、早馬ニ召候而小者一人之体ニ
而早々可有御出候、念者之ある若衆ニ而候問承候ハ、如何候之条
不被及沙汰、可被懸御意候、爲其令啓候、以使者可申候、路次遅
候而者と乍聊示以飛脚申候、恐々謹言、

巳下刻 東入道 山か在判
五月廿一日 天正十八年

意宗 經也在判
龍伯 参

東入道山かと御座候ハ当近衛様より八代之祖東求院龍山関白前久
公之御事ニ御座候、始之御実名者暗嗣と申候、前久公者近衛植家
公之御子ニ而と云々、

17 日置流弓之儀依不淺御執心、感其御志令相伝候、然者右伝授之旨就
御懇望許申候、如当流法度堅以誓紙可有御指南候、雖爲子々孫々
無器用或無執心之輩江者御相伝有間敷候、仍許申所如件、

慶長八年

拾月廿五日

玉川久左衛門

鯨島筑右衛門殿

義則判

18 幸便之条令啓候、去年番船以下打続御手柄共之由流布候間、珍重大
慶此事候、抑在國中ハ折々雖預懸筆候、上洛以後者依事多然々以
状申事茂無之背本意候、当年者可有帰朝様申間、左様ニ候得かし
と申事計ニ候、吉事連々可承候、かしく、
二月六日 (近衛信尹)
三木
羽又八郎殿 (島津家久)

19 今度至其手数十萬騎馳向候処、則時被得大利、殊ニ自身被碎手候由
壯年之御覚悟ニ御似合候ハと乍申余輕々敷事取沙汰候、併本朝之
威光ヲあけられ候間日出度候、如右者帰朝不可有程候間、積年之
事共可申伸候、依的便不取敢染禿筆候、かしく、
尚々兼々沙汰候ハ日本之素否今度之一戦ニ究候様ニ申候処神變
不思議之武運候、

十一月八日 (近衛)
信尹

島津又八郎殿

20 十一月二日之御状鑑来着、卷舒數返令対顔思候、助丞中原坊被差上
被及御理通近比珍重候、雖不応御存命之事候、御思維候而少将江
茂被加御異見、国平安之御分別肝要候、就其御国之衆依不思議之
仕合、于今我々方江堪忍候、寒天之時分不如意之体笑止千万候、
各茂下国之事大望候得共、内府江得内儀事難成候而時口押移事候、
委曲中原坊可申候、かしく、
十二月十日 本ノママ (信尹)
(花押)

龍伯

正月十五日之芳札繼來着、殊ニ白筆卷物怡悅候、此度可有一途之由
 尤珍重候、本助丞ニも如申聞候、於内府對貴方御懇之体眞実と相
 見候間、井伊侍從、山勘兵杯指図次才御上国肝要候、川上久右衛
 門尉者我々使之分として差下申由候得者道阿^茂便狀之事候、新八
 郎喜入をはしめ徒在洛、咲止候得共、内府御差図候間、任其旨候、
 委曲久右衛門可申候、かしく、

尚々於内府無御如在体、自我々^茂可中下之旨内證ニ候間、久右

衛門使として差下事候、

二月四日

(近衛信尹)
二本

龍伯老

肥 芳札并沈香^{二本}平左衛門尉隨身候而相届候、

一 かつきの事御理之様体承届候、向後於不苦者、御のほせ候而可給
 候、

一 今通之領分さへ可爲不如意之處、悉陸奥守江被渡、猶々被成深隠
 候由、漢土之占賢之内ニ^茂難有可爲進退候、弥武運長久家繁昌之
 祈禱と珍重候、

一 祐丞下国之時以一札申候、届候哉、龍伯ハ被得驗氣候由大慶比事
 候、
 本ノママ

一 鴈ニ進之候、猶期後音候、かしく、
 (近衛)
 七月十三日
 信尹

惟新

180 屏風之事承候之處、久々目相煩于今未然々遅々候、乍去染筆町田
 勝兵衛ニ相渡候、

一 御下国之時分者風波之由聞及中、無心許候之處、御下着珍重候、

一 龍伯之事、多年中承候處、乍避^茂殘多事候、

一 大御所御上洛候而讓位御即位等相濟各含咲候、

秀頼公御上洛候而是亦国民迄悦入候、かしく、
 (慶長十六年)

卯月廿二日

信尹

鹿兒嶋少將殿

184

雖無指事、題目的便之間令啓上候、其許如何様之事候哉、御息成長
 候哉、来春ハ叙爵被申尤候、禁中辺其外爰許無事候間、可御心易
 候、将亦單物式領乍輕儀相添書狀候事候、平右衛門尉可令演說候、
 かしく、

六月廿四日

信尹

鹿兒嶋少將殿

185

久四郎殿様御上洛ニ付御餞即時宰相殿ニ^茂致披露候、思召寄御懇志
 御祝着之由、勿論脇枕江^茂細々申含候、一段能御仕合ニ而候、此
 等之旨委曲御取合所希候、恐惶謹言、

六月六日

有馬藤七兵衛尉

鎌田與兵衛尉

鳥丸兵部少輔殿

御報

186

急度申入候、仍百姓殿役迄ケ月三日ツ、被召仕候、其上者召仕間敷
 被相定候、然者右之様子殿役奉行江も被仰渡候、就夫被召仕候分
 量諸所囑衆江被仰付、手形を以殿役奉行江迄ケ月ツ、之首尾可被

申理様ニ可有談合候、巨細者殿役奉行より可被申候、兼又地頭其処之百姓曾以被仕間敷候、但如例年地頭ハ老ケ年ニ二度ツ、之狩可爲其分候、かたく右之通中渡候、又遠方之諸所者一夜泊二夜泊之日数右三日ニ可被相引候、馬一疋茂一人役ニ可立候通宿送迄も右三日ニ可有算用候、若二日之内被仕候而余日分者一人ニ付鳥目百五拾文ツ、可爲出錢候、右御定儀緩ニおひてハ可有其沙汰候、恐々謹言、

尚々申候、所之衆中志人ニ付植木五本ツ、年々ニ可被植候、植所ハ所之衆被見合候而「」所ニ日当ニ可被植候、木ハうるし・はし・杉たるべく候、若枯候ハ、其人可被植替候、

朱筆
寛永六年比數
家久公御家老

二月九日
喜入撰津守

朱筆
加久藤地頭
忠政判

五代勝左衛門殿
下野守
久元判

御宿所

187
急度申越候、仍此中地頭衆年中ニ二度ツ、狩諸百姓相立候処、去年地頭狩之儀者被差留候条、公儀江右之狩人一人ニ付七分ツ、之賃錢前々地頭被召仕候狩人より可差出之由相定候間、今月中ニ七分ツ、算用を以上納仕候様可被申付候、人数究之儀者暖衆以吟味帳相調、狩代銀上納之刻同前ニ可被差出候、緩せ之儀共候ハ、各々可爲越度候、

尚々此狩代先春之一度分、今月中ニ上納可有之候、今一度分者当秋中ニ上納候様ニ可被仰付候、勿論此状見届候通諸所ニ而之暖衆之判可被仕候、左候而曾於郡より此方江可被持候、以上、
朱
寛永二十一年
相良権兵衛尉

申五月九日

長員
平田豊前守

宗直

帖佐平松ヲ始二十四外城諸所
(曾於郡迄脱)

暖衆中
参

此状五月十三日之八ツ時分ニ馬関田より参候間即刻飯野之様持せ遣候、

右加久藤暖衆文万留ニアリ、

188
急度申越候、然者此中諸地頭衆江在郷之百姓以下之者年中ニ二度之雇御給候得共、去冬より公儀江被召上候間、其御心得ニ而人衆十五歳より六十歳迄新改札帳面ニ而被書記、其所之暖衆・行司衆與書連判被成候而可被遣候、指出之案文別紙ニ遣候、被御覧届、来月十五日内ニ鹿兒島山奉行所江可有上納候、自然緩せ之儀候ハ、其所之暖衆・行司衆可爲越度候間、爲御心得候、此状次才ニ可被次渡候、恐惶謹言、

尚々病者之沙汰有ましく候、以上、

朱
寛永二十一年

申六月五日

(山奉行脱)

仁禮藤左衛門

藥丸大炊兵衛

(親カ)
兼陳

黒葛原周右衛門

忠清

新納仁右衛門

横川より日州表穆佐迄

久親

拾五外城

暖衆

行司衆中(脱)

参

180

一書申候、仍諸所六度狩不依御倉入、給人持、白今以後ハ可爲御赦免候間、其段可被申渡候、就其別ニ被仰付様子共候、御藏入奉行喜入古兵衛尉殿、相良権兵衛殿方より可被申渡候、可有其心得候、恐々謹言、

朱正保三年

民部少輔 朱有栄

戌八月十七日

因幡守 同久国

佐渡守 同久加

平松吉野より曾於郡迄

本ノマ、

三十四所

暖衆中

参

180

六度御狩之内老度今月十日より内ニ相調候て十五日より内ニ皮上納可有候、むかわき用ニ候間、皮之張様常よりも長くはり可被調候、天下御用ニ相立儀候間御延引被成ましく候、此状ハ不嫌夜白時付被成次才ニ可被相届候、以上、

朱正保三年
戌九月朔日

和田讃岐守

仁禮藤左衛門

藥丸大炊兵衛

(より脱)(倉間迄脱)
横川始十五ヶ所

暖衆中

参

191

飯野御城山之御狩御座候付衆中衆計可被罷登之由候、日限者飯野江相談可有之候間可被聞召合候、爲御心得候、以上、

山奉行

戌九月十九日

仁禮藤左衛門

和田讃岐守

吉松・吉田・馬関田・加久藤・小林

暖衆中

追而申候、狩奉行衆ハ才子丸右京亮殿、伊地知主膳止殿ニて候、是又爲御存知候、以上、

此段急用之儀候間、早々相届候様仰付候、以上、

(可被申)

(戌九月十九日)

山奉行所印

御普請方 吉野 脇本

加治木 有川 横川 栗野

192

至琉球差越人数不経日数盡討捕之、其^{イ主}上国主降参、近日其国可爲着岸之旨、尤無双之仕合候、猶本^{イ多}田佐渡可中候也、

慶長十四年

秀忠判

七月五日

羽柴兵庫頭殿江

193

至琉球指遣兵船不移時口及一戦、彼党数多討捕之、剩国主降参之并三司官以下至于其地不日可爲渡海之注進、誠ニ以無比類働共候、

猶本田佐渡守可申候、謹言、
イ多

慶長十四年

七月五日

薩摩少將殿江

秀忠御判

琉球之儀早速届平均注進候手柄之段被思召、則彼国進之条、弥仕置等可被申付候也、
イ多

(慶長十四年)
七月七日

薩摩少將殿江
(家久)
家康御判

貴札致拜見候、仍琉球爲御手遣御人数被指渡候処、大島と申島早速被仰付、其よりとくと申島江御人数越被申候処ニ、彼島江先手出向候ニ付而及一戦、則被得勝利、彼島之先手三百人被打捕候付而重而不及異儀、彼島相濟、其より琉球之国王被居候島江被取掛候処、於彼地茂国主雖被及行候、切崩、数百人討捕、国王之居城取巻被中候処、頻ニ降参ニ付而被任其儀、国主下城候て下々方々江遊散候者被召返、如前々有付候而国主三司官其^{イ外}上頭立先手召連頼而可有帰朝之由、以使者御注進被成候、御紙面之通一々懇ニ達上聞候処、大御所様被感思召候、一段之御機嫌共御座候而無残所御仕合御座候間、御安心可思召候、誠ニ遠渡と申、於異国無比類働御手柄不淺候、其許御満足之段奉察存候、則琉球之儀被遣旨御座候而御内書被遣候、御外聞実儀不可過之候、弥彼地之様子御注進可被成之由御尤御座候、猶此許相替儀無御座候、此表何^ニ而茂相応之御用等御座候ハ、不被御心可蒙仰候、不可存疎意候、追而可得御意候、恐々謹言、

(慶長十四年)
七月十三日

羽柴陸奥守
本ノママ
貴報

イ多
本田上野介

正純判

就先度琉球一果之旨注進状到来、内書を以申越候、依之太刀一腰・馬一疋・端子十欣、且今委細本田佐度可申候也、
イ多

極月十五日

琉球国可被領地之旨申遣候処、祝着之段尤候、仍爲音信佛草花もり花并硫黄千斤、唐屏風しちん五卷到来祝着思召候也、
朱

慶長十四年

十二月廿六日

薩摩少將殿江

家康御判

先刻者將軍様ニきんちく之火縄式拾五筋御進上被成候、具ニ披露仕候処、不成大形御機嫌ニ被思召候段、拙者方江相心得可申入之処、御意御座候、尚以貴面可得御意候間不能一二候、恐惶謹言、
朱元和六年
十月十一日

酒井雅樂頭

松平薩摩守様

忠世

人々御中

土井大炊頭

薩摩中納言殿

貴報

今度爰許之出合之後以使者共雖可申上候、通路無之故乍存候、然者去三月石田治部少輔殿より以使梅北平石衛門殿罷下、此中当地江滞

留候、早々罷上度之由候得共、海陸共ニ往返不被罷成候付而今ニ延引候、此節上洛之儀候条老入相添差上候、今表之様子可預御取成候、誠ニ去春之時分武庫様より御直書被下候、謹而拜見仕候、其御受文相良源五左迄申上候、定而可被達上聞と奉存候、其時之御書面ニ我等進退之儀御心之及可被加御懇之由外聞実儀忝候、乍去爰許之儀、義弘様御意ニハはたと相違仕候、其子細者最前幸侃生害被仰付候之由相聞得候者、則濱之市江伺御意、幸侃御成敗ニ付、武庫様、又八郎様江我等身上之儀得御意、如何様ニ茂分別可仕之通雖申上候、終ニ無御納得、今ニ茂諸口往米被成御停止、拙者事茂幸侃同科ニ可被御暖と相見得候而堺日々々茂放火とも何共迷惑と不可過御賢察候、就其拙者身上落着之儀義弘様より不被仰下間者雖相濟存候、然間一着之始末奉頼候、此等之趣早々可申上候といへとも右ニ如申上ニ候、當時被召籠体ニ候得者乍存疎意之様ニ申候、定而我等儀ニ付種々無筋儀をも可入御耳候、併毛頭無疎意候、兎角武庫様を奉頼候ハてハ不叶儀候間、よろしく被仰上、急度一途相濟候様御披露所仰候、恐惶謹言、

朱慶長四年

六月十八日

伊集院源次郎

肱枕老

忠真

右本田助之丞家ニ有り

口上

今度幸侃罪科無糺明成敗被仰付候儀一々迷惑之次才候、就其我等進退茂去三月以来被取籠、誠ニ重々非道之暖共ニ候、或表裏之儀或竜伯・兵庫頭神文相違之儀、中々難中尽候、其段條數別紙ニ相

添候、彼是所存之趣無腹藏御向所江申入候間、御取成所仰候、兎角我等事も島津代々之者候条、一篇ニ薩州江雖奉公仕度候、如右何事も非正義候得者、自今以後之儀毛頭頼無之候、勿論竜伯少將对我等、此中之心底可相殘儀覺悟之前候、然時者拙者を無等閑可被召仕儀在之間鋪候条、志摩守殿以御分別何方江成共被召出候様ニ奉頼候、自然此旨内府様江被仰上、曲事之段被仰出雖被加御成敗候、不及是非候、其時拙者老入罷出如何様ニ茂可仕御暖候、右之趣可然様御披露奉頼候、恐惶謹言、

慶長四年

伊集院源次郎

十一月六日

平野源右衛門殿

高島新藏殿

右之包紙ニ如此有之庄内暖之刻伊源次郎寺沢志摩守江進覽候證文也、然者爲後證於伏見志摩守殿惟新此封日ニ在判、

30

追而御息向人共ニ無事ニ候や、一たんめてたく候、以上、

書音之趣細々令御披露候、御藏入米去年分之内賣祿違之銀子五拾日進上被申候、忝段念入納被申候可然之由御意ニ候、右之銀御荷衆江相渡中せ之由候間、彼衆江渡申候、則受取令進覽候し、弥々以御奉公無油斷可被申由重々被成御意候、庄内山田ニ勤キ候由、此方江聞へ申候、御前も連々さかしく候間、左有へきよし御意ニ候、於御前之儀ニ心遣有間敷候、恐惶謹言、

十二月廿二日

有川助兵衛尉

池田六左衛門殿

御報

貞

追而御息達江御心得有へく候、以上、

一御前江上候藏入銀子上申候、別紙ニ認候而不及口能候、

拙子江銀子三匁貳分送預候、此此者すりきりニ而めいわくのおり
ふし三百目預り候と存程ニ令祝着候、

一貴所事、御前之御意一段よく候、心遣有間敷候、弥々以御奉公心
かけ候て専用人ニかたり有ましく候、いつミ表ニ御移候而前以も
すこしハかさみニ而可有給候様ニ御意候、あしかるを御つかわ
せ可有なと、被仰候、左も候へかしと存計候、涯分身体嗜候て奉
公有へく御内々ニ御物語共申事候、奉公仁之たしなミニ候間口
外有間敷候、又御思案もかハる事共有物ニ候間、いつれ共不知
本ノマ、
左ハ御無用たるへく恐惶謹言、

十二月廿二日

有川助兵衛尉

池田六左衛門殿

御報

本ノマ、
貞智

圖書頭

伊集院右衛門太夫

本田下野守

星野伯耆守殿

忠長

今歳之御吉兆多幸々々、仍連々無音、押移所存之外候、然者去年
豊州衆到坂東寺在陣之砌被屈肥前和陸上、早速開陣專一之由申遣
候、無異儀可被任其趣之段、于今致違変高良山江相支恣之行不及
分別候、定而御軍旁察存計候、雖然種実、政家一致被仰組、同懷
之由尤頼敷候、弥無疎隔被成入魂、万方被廻賢慮、案全肝心々々、
其謂右両家当邦幕下之儀候之条、別而可爲御忠貞候、猶委旨期後

音之時候、恐々謹言、

正月十九日

親貞判

忠棟判

忠長判

星野伯耆守殿

御徒所

忠棟

星野伯耆守殿

御返事

如示預候、去春者致通達候之处相届候哉、于今満足不少候、殊更
肥州表無残所屬案利候之事本懷此時候、随而其境豊陣悉敗北之段
御大慶察存候、此方以御同前々弥無別心種実以一致对当邦向後可
被励忠貞事不及申候、兼又実信深重可中談之旨不可有疎意候之間、
可御心安候、仍大切之矢尻送預祝着候、拙子も年内必々八城迄可
罷越之条互可申通候、恐々謹言、

十二月七日

忠棟判

星野伯耆守殿

御返報

尚以貴所事在伏見ニ而候つる処ニ息少左衛門殿庄内在陣共候ツ、
是又御佗之儀尤たるへく候、以上、

今度知行之佗就被申上、先祖以来对御当家無別心爲申入通、伊集
院下總入道殿書状并本田六右衛門殿書状令披見候、年内無餘口候、
殊ニ琉球渡海衆調之儀候付、其方隙入候間、来春ハ仕合を以佗可

被中上由尤可然候、恐々謹言、

十二月廿日

横山權左衛門

久高判

大井右京亮殿

尚々不及御報候、

御手紙謹而拝見仕候、如尊意昨日者被遊御光儀、寔辱之餘被下醉今朝、然と醒不申候、而次兵衛御禮差上申候、隨而二祖斷臂之儀被仰下候、二祖達摩江相付多年自性之本心尋候得共不叶候、而致述懷姿ヲ下人不人と存、劔ヲ拔持可死と思切、庭上ニ躍出申候折節、大雪ニ而何も不見得候處、左之臂動候を不覺切落し、取上、是ハ是と達摩へ被申候、其時達摩為安心畢、二祖忽然として大悟、不覺不知して動働事ヲ專一ニ承申事ニ而御座候、重而罷出委細可申上候、磯月之段能々可被思召屈儀題目と奉存候、左候ハ、敵合御心安可有御座と存申候、此旨可然被仰上可給候、恐々謹言、

四月三日

愚付(花押)

藥丸如羽山介

御小姓衆中

先夜者雨降徒然之砌御光儀甚芳志之段難忘候、其後早々此等之御礼可申入之處、打続色々隙入儀共候、而乍存延引之至失本意候、就中細工之儀雖急中候、方々餘多受取置不仕散候、遅々心外ニ候、卒度御用捨可給候、於心底者少、非疎怠候、万端参上可申入候、恐々謹言

九月十六日

案原善内

比弥老

判

右案原善内殿者東郷重位老門人なり、右手帖島津李殿家藏手鑑ニ相見得候、

206

定可為御堅固と奉存候、愚拙事、露命者雖無恙候、日々夕々隔心之衆と計出合無安全草臥申候、就其而茂朝暮御床敷奉存而巳、金山無人之由其聞得候、今一度者又多人數入来候、而瞻敷可罷成様ニ被存候、人々進申候やうニ兼々御相談共御尤ニ乍推参存候、時節ニよりてしめつゆるめつ、いか様ニも御自由たるへく候と存候人、茂不立除入来御手立共ハ無御座候哉、するニ金子過分ニ可堀出、先御隨相之様ニ存候、將又御與力衆御兩人江乍憚一伝古語曰

劔輪飛處日月沈輝 寶杖敲時乾坤失色

右之意ニ真から底から能叶候者敵打事自由三昧たるへし、皆大方ニうわむき計之心得故、いたつらニ而候、此段能々可被仰候、常々兩人共ニ能此意御存知ニ而候得共、向敵さほどなきは不審ニ候、尚重而恐々謹言、

猶々御筆者衆江茂別書ニ而と存候處、唯今川崎五左衛門殿御使者として被参候故、取紛申候、乍憚御心得可被下候、

八月朔日

藥丸刑部左衛門判

村田藤兵衛様

人々御中

わきと申上まいらせ候、御かんきをかうむり、多年させんの身になり、此比は召なをされんとおもひの外ニ切腹とおほせ出され、何事も前世の事とおほしめし候へく候、かしく、

願娃主水

母上様

道をしらする間、さこそおかしく候はんく

誰もかくふた、ひさめぬひとねふり、一期の夢の明ほの、そら

十二年の遠流、今年共ハ召直事をこそ奉待し候処、如此御事御残多

々々、南無阿弥陀佛、

元和七年三月十九日 額姓主水佐

額 長左衛門殿

本 甚兵衛殿

本 隼人殿

本 兵右衛門殿

一度者御日ニか、り申候半かと暮々存入、月日をおくり暮し申候

処ニ思ひの外の儀左こそ御歎きまし申候、乍然因果歴然道理如

此候間、御なけき有間しく候、申度儀多候得共、まつく南無阿

弥陀佛々々、

主水佐内衆

元和七年三月十九日

藤兵衛

母方様

万 太

参入々御中

中紙二束歳暮之御祝儀候也、

一昨日者御茶賜、日来本望此候、御座敷之佳景驚目候、重而罷

越候ハ、是非令推察、今一度茶話可相企申候、当冬者暖氣候得共、

雪降候ハ、頓鹿兒府江被思召立、宛茗吟詩可遂閑談候、猶期再会

候、恐々不縷、

臘月廿九日

道甫老

伊兵部少

213

(忠恒) 従又八様被成御書候、誠ニ以大慶此事ニ候、久四様弥御無為御座候、
御心遣入ましく候、隨而者

(義弘) 武庫様御兄統之儀先書を以申上候様ニ毎事無御油断可被仰付事尤

肝心候、先刻申入候又一様御事さてもく不慮之儀御心中奉察候、

我、まて迷惑仕、不弁是非候、此等之趣御披露所希候、恐々謹言、

(文禄二年) 川三人

閏九月廿五日

脇枕判

烏丸兵部少輔殿

214

未申馴候而令啓入候之事雖楚忽之至候、風便難過故候、仍薩豊之間、
自京都之御媒介、一和被成候処、去年以来筑後表江長陣、剩御船為

始義統御廻文、在々所々満々候、然時者不羣是非儀候条、畢竟可

為鉾柄候、就夫御進退之儀承及候、可被遂御本意事此時節候歟、

以御納得於御返事者、御懇望之所可示給候、以其證跡令披露、何

様一稜可致馳走候、後々以可御心安候、乍不申能々蜜々仁御才覚

肝要候、猶巨細自中途可被申達候之間、先令省略候、心事恐々謹言、

(天正十三年)

十月五日

忠元在判

入田殿

包紙

新納武藏守

入田殿

忠元

御宿所

215 昨日拙子大方申試候御鹿江米廿三可致参上候間、同道申度候得共、播磨守殿内存難計と申候処、伊刑部殿已前物語細島江播州名代ニ被申付候哉、於無其儀者供たるべく候由おもはれ候歟、乍案中上様御下向も何比共不相知候由候間、奇同本ノマ心候へかし、我等としてハ於後日も少も申ましく候、乍勿論鹿江於行候ハ、貴所之造作入間鋪候、田舎江計栖候而不可然候、恐々謹言、

(伊集院久春)

元判

文月廿日

伊肥入

黒平七との

進之

216 薩州吉田宮浦村之内領知目録

分米大豆五石者 浮免

右庄内御陣被致百日番ニ付知行拾石可被下為御約束之辻、於去年御陣依有御配当、先五石宛可被差遣候由候而知行目録去十三日請取内より当納受取人相定候之間、物成多少次才以算用之無親疎様ニ可被受取者也、

卯月十八日

伊勢平左衛門

貞林

川上四郎兵衛

忠兄

山元左近將監殿

217 尚々去月廿日ニ御立願衆中神五郎同日ニ罷上候、追而申上候、綾衆中皆同以談合申上候、

忠恒様御上落千秋万歳日出度候、拙者所迄細々被申候、然者御立願申被上候、則願書持せ申候間、御披露ニ而可被下候、能様ニ御取合頼存候、衆中何茂又八様江別而御奉公可申上通節々被申候、一段肝要之儀と申事候、巨細者私遂祇候、其節可得御意候、恐惶謹言、

十月八日

上井神五郎

里兼判

指宿老岐守殿

参

218

令言上條

去年太閤様御下向之時、日州表野尻、高原迄美濃殿被成打下候処、小林を限ニ差こたへ、夫より御無事之由御談合候而惟新様御事美濃殿江被成御対面、御帰轡之砌、我等事人質として美濃殿江被成御渡候を、桑山修理殿被受取、京勢逗留之間被召置、京衆(野盜)歸京之刻、京都迄可被召列之由被仰聞候之処、猿瀬之つりはしをやとふの者共出合、橋を切りおとさんと仕候間、弥為用心、拙者事、橋口江被召置候而夫より漸暇を被下罷歸候、其時小林之地頭川上四郎兵衛殿見候、此等之通細々為被存仁、于今御座候、為御存知以書物申上候、以上、

寛永六年八月十二日

佐谷田九左衛門判

219 極月十日之御状體相届令披見候、其御地御上下御無事之由目出度存候、此方無相替儀候、一薩州様あたミへ被成御越、御機嫌能御歸宅之由目出度奉存候、

一貴様御父子共ニ別而御仕合能御座候由珍重ニ存候、殊ニ節々御能御座候而左兵殿手前あかり為申由一段之御仕合不及申候、御宿所一入御無事之由候間可安御心候、

一東郷肥前入道殿兵法之沙汰、公方様於御前御座候由被仰下候、則其状我等江見せ被申候、肥州手柄之儀不及是非候、將又御手前能之儀も御仕合候つるよし乍案中日出度候、何様之御仕合ニ而候哉、後使ニ可承候、猶期後意之時候、恐惶謹言、

月十八日

川上因幡守

中西長門守様

御報

久国判

220

尚々兵部少殿□□をと被仰候得共、今日流球入ニ付指宿江御出船之間、難成候由候、後日御老中被成御談合候而可被仰出之段御返事ニ而候、

御状委得其意候、仍此度御佗被成申候處、當時御知行相つまり之故、御手付共候事、出水表江被成御辛勞ニ付如此候、貴所先祖以米忠節又庄内御弓箭之儀并黒之戸ニ而別而為被成御奉公段委見候、後日可被成之旨御返事被仰候、為御存候、恐惶謹言、

二月六日

通軍判

押川典内左衛門

大井右京亮殿

御報

尚々貴所之筋目之書物相そへ進之候、後代之覚ニ可被成候、為心得候、

度々平田名字可有名乗之由承事ニ候、雖斟酌候、信者從爰本名字之儀ニ候間、可被名乗事肝要候、恐々謹言、

拾一月廿八日

平田美濃入道

瀧間越後守殿

御宿所

舜慮在判

221

猶以京都御無事ニ御入ニ付可御心安候、其許御老中本ノマ、京都之仕合拙子可然候而薩州出水郡并加治木御藏入武庫様、又八郎様被成御拝領候付、為御使罷下候、様子可申渡候間、出水江福崎主水、鬼塚主税助可被遣候、此通即加治木村在々肝煎江茂被仰渡尤可然候、貴所御内儀ニも右之御仕合日出度通御心得可有之候、恐々謹言、

二月廿二日

上井甚五郎

判

富山備中入道殿

御宿所

222

奥州様御目見之様子為被仰入、法元大炊左衛門被成御下候間、言上仕候、今度之海上以之外早御上着ニ而則大御所様江昨五日御禮被仰上候處、無殘所御仕合ニ而御座候、就中今度奥州様御上洛之刻惟新様御肝煎之由大御所様被聞召及候由御直ニ奥州様江被仰候、如此何事も細々聞召付候間、万事ニ付御油斷有ましき儀候、

一本田上野介殿をはしめ連々御念比之衆少茂御心中為相替様子無御座候、就中羽柴越中守殿被對御家御心遣不大形候、種々様子共書中ニ者難申上候、

一 公方様三日依御小腦未仰上候、本多佐州老江今朝も我等致参上得其意候付、昨日 公方様少御腦平念候間、両日中可為御目見之由、被仰候、

一 大坂思召之似相済申候、御祝儀 惟新様より被仰上候而尤二候、左様御座候ハ、御進物等此方ニ相調可申候間御判紙御上候而御尤候、御文体ニ思召之儀共候ハ、御案紙を被成候而可被下候、御進物者於爰許承合調可申候間、御書者此方ニ相調候而不叶儀と御心得申上候、

一 今度御左右為被聞召、兩人御付候而御上之内法元大炊左衛門事ハ先々差下申候、大学坊事ハ重而此元之様子承合候而差下可申候、此旨可然様可預御披露候、恐々謹言、

六月六日

伊勢兵部少輔

比志島内藏亮殿

貞昌判

去五日之書狀披見候、梅北一類其方無下着以前ニ刎首差上候由尤思召候、猶以人念堅可被中付候、隨而先年其国江御動座之刻、其方兵庫頭被成御赦免候処、家道院事、对上意慮外之働曲事被思召候、其刻可被加御誅罰之処、其方兵庫頭御赦免之上者不被及是非□□雖然重慮不相屆儀候条、從京都可被仰出候処、御次無之被成御延引候、然者今度家道院事兵庫頭之高麗江罷渡候ハ、其身之儀者可被成御助候間、彼家中之者惡逆之棟梁可有之候条、十人茂廿人茂刎首可致進上候、若又高麗江不能渡、此方江於有之者彼家道院事刎首可差出候、自然何角滞付而者御人数を被差遣、家道院事者、不及申、彼在所隣郷共ニ悉く撫切可被仰付候、右之通無一途候ハ、御檢地之御奉行被遣間敷候、得其意、急度可相究候、猶幽齋方

江被仰遣候也、

文祿元年

秀吉御朱印

七月十日

(義入)

嶋津修理太夫とのへ

225
一 去月八日之御札致拜見候、今度肥前国松倉長門守知行之百姓切支丹宗門蜂起之儀ニ付重而預示候之通得其意候、

一 肥後国之内寺沢兵庫頭知行天草ニ茂右之寛類令蜂起付而彼地者御領分近候之間、境目迄人数を差越御下知次才可有加勢之段、豊後御目付衆江被相達候由承届候、然者彼表之儀兵庫頭一分ニ而難計候ハ、細川越中守人数可致加勢之由最前申越候、其上人も入候ハ、貴殿より人数被差越、越中守家来と相談之上、加勢有之候様と先月廿二王使板倉内膳正、石谷十藏方迄申遣候間、被得其意、右兩人被任差図尤候、

一 天草之儀為可被聞届、從其許使を被差遣候処、右之使其地江いた不能帰付而御注進延引之由得其意候、

一 御分国中切支丹宗旨之法度被仰付、若又落米切支丹者不遁之様被申付之由尤之儀候、被入念示給之趣達上聞候、恐々謹言、

堀田加賀守

(寛永十四年)
十二月七日

正盛

阿部豊後守

忠秋

土井大炊頭

利勝

薩摩

中納言殿

御報

御使札致拜披候、然者琉球八重山島江從先年張番之者被渡置候得共、遠島故今度被達上聞候処、番之者共引取可申之旨被仰出候、并琉球国王繼日之儀御手前以次才可被申付由上意之趣忝思召候旨御紙面之通承届候、因茲爲御札之使者被指上候由得其意存候、猶期来音之節可得御意候、恐惶謹言、

慶安元年

堀田加賀守

九月二日

正元

松平薩摩守様

貴報

227

御状致拜見候、然者琉球八重山島張番之者之儀達上聞、遠島之儀二候之間、引取可申之旨被仰出忝思召之由尤存候、隨而琉球国王繼日之儀被得御意候処、薩摩守心次才被仰出是又悉被存之由尤候、依之老中迄以使者被仰入候、御念之入候趣各申談達上聞候、委曲御使者可被中達候間不能一二候、恐惶謹言、

慶安元年

酒井讃岐守

九月七日

忠勝

松平薩摩守様

貴報

覚

今度從琉球獻使者候、因茲松平大隅守江米式下儀被下之候、彼家来以手形可被相渡候、

寛文十一亥

八月廿四日

内膳印判

但馬同

大和同

美濃同

浅草

御藏衆

229

態与啓入候、然者先月下旬比御当地一揆之企牢人共仕由風説有之候、右之儀弥必定二而大形百人餘被召捕候、今明日之間二御扱可有之由伝承候、就夫其許江雜説相聞得候ハ、無心許有之候、最早何之御心遣茂無御座事二候間可御心安候、併御心得可入儀二候間、大形承伝候、右企書物別紙有之、可被御覽届候、將又岩切六右衛門便宜二被仰越候、段々得其意候并七月十六日之飛脚二而之御状茂隨二相届得其意候、後便二其首尾可申入候、隨者松平能登守殿御事も隠岐守様御預登如伊予被成御座候、沙汰有之候、実正之儀弥知不申候、尚期後音之節候、恐々謹言、

(慶安四年)

八月九日

明田勘解由

久則

新納右衛門

久詮

島津筑前

久頼

島津図書

久通

北郷佐渡殿 久加

伊勢兵部殿 貞昭

鎌田源左衛門殿 政有

人々御中

(家光)

230 態令啓上候、然者 公方様此中長々之御不例被成御座之處、一昨十九日重々被成御発、昨晚露御被遊候、寔為絶言語儀、候、雖然無替儀別而平安御座候間可易御心候、堀田加賀守様、阿部対馬守様、内田信濃守殿、三好能登守殿、久永外記殿、露御被成候而追付從御城御下り候而御供ニ而候、扱々哀成仕合難尽筆紙存候、就夫雜說田舎く被中儀も有之候間、万事其御心得被成、御国之御仕置此時御座候、恐惶謹言、

米慶安四年

町田勘解由

卯月廿一日

久則

新納右衛門

久詮

島津筑前

島津図書

久通

北郷佐渡殿

伊勢兵部殿

鎌田源左衛門殿

231 一書申入候、仍貴僧御事老体と申御煩之由候、御暇之儀頻ニ承候、今より發候者笑止千万ニ候条、先島江帰寺被成、養生候て米二月者可有御上之由候間、必無相違 薩州様御帰国前ニ御上り心候、恐惶頓首、

六月五日

山田民部少

有栄判

下野守

本佛寺

久元判

床下

232 暑往寒風侵膚柴火煖身呈一書欲問安否、則快便難逢企跬欲扣高門、則老脚不堪見、白雲孤飛徒渴望嗟夕何夕与君相對語而笑々而語、思之之外無他事、餘面既不宣、頓首、

小春初九

養善院

如竹

拝上

白濱重昌老大人

233 季秋十三日華翰同至十七日落手、華誦宛然不異拜願者也、貴体起居平安欣然々々、書中可見問茅廬之由日々倚門待之、拙自今月初有採薪之憂、比日漸快氣老懷月加氣力日衰且弊鄉可語無友、可扣無門、獨坐茅檐負喧送居諸耳、故鄉をおもふにこそハなへてすめ蓬生の宿秋の夕くれ、古人の言葉迄被思出候、寂寥体推而察之、情緒紛々閑之、頓首再拝、

白濱重昌公

養善院

如竹

回鯉

獨仰清光三五秋 天涯萬里億同遊

呼童相對語京洛 昔日心知共上樓

重陽

遠去洛城西海涯 対人日々説桑麻
重陽佳節隨鄉俗 濁酒三盃酌菊花 一笑々々

231

一 悲一筆ニ中候、各之身持夜白念遣ニ存候付申入候、

御公儀之御奉公何事ニ不寄專一候、

親孝行之儀者衣裳を進上申シうまき物を求め進上申ヲ孝行と思ふ
なよ、親之腹ヲ立さる様ニ仕候事專一候、

一人はわるかれかし、我一人よかれかしと思ふ心あれば、其ばちに
て我身もあしく成ものニ而候、

一人はよかれかしと思ふ心あれば其ことくニ而我身もよくなるもの
ニ而候間心得專一候、

一 大酒をのみ量ねを不仕候事專一候、

一 老年のはかり事ハ春になり春に物種子をまき付不申候得者、年中
の被下ものなく候条、種子をまき付事專一候、

一 老日のはかり事といふハ宵からあんし候而何之かしよくを仕候と
思ひ候而辰の時より出立仕候事專一候、

右之条々能々心懸專一候、

本琉球より

六月十三日

如竹

屋久嶋安房村

泊興左衛門殿 同弥兵衛殿

同太左衛門殿 同善兵衛殿

同勘兵衛殿 日高茂兵衛殿

235

同八左衛門殿

(家久)

追而令啓候、先以其御地無別条、大隅守殿御堅固之由珍重存候、然
者先度金山之御訴訟相叶候、爲祝儀使者指越中候、大隅守殿被成
御帰国、左而已居城ニ者無御逗留、方々御遊興ニ而阿部目見も不
仕罷帰由候、大隅之爲守護者者左様ニ懸計リニ而日を暮中物ニて
ハなく候、御仕置之儀者家老中に被仰付候而も定而可相調候得共、
直ニ被仰付候ハて不叶儀有之物ニ候、御氣隨と存知候、

一 薩摩之儀者御代々御国持之事候得共、世間之大名とハ御作法肝要
ニ存知候、御作法乱候而者御家之破滅と存事候、御家之御長久成
と御行儀御作法體成を以續中事候間、大隅守殿御分別專要ニ存知
候、

一 今度爲使者阿部市左衛門指遣候、目見をも仕不苦者ニ而候間、御
氣色をも伺被越候得共、御遊興ニ而御対面不被成候、是以御氣佩
と存事候、我等使者御心易被思召候ハ、御遊山所江成共被爲呼ニ
ても不苦事ニ候処ニ、飛脚使ニ御あいしらい一円聞取不申候、若
世間より之使者などにもケ様之御あいしらいニ候ハ、笑止ニ存人
候間扱申入候、

一 大隅守殿御手配御分別被爲成候而諸事御仕置等残所も御座有間敷
と内々存候処ニ世間ニハ無御貪着明而茂幕而茂御遊興計リ之由承
及候、無御勿体事候、榮成儀者下々之事ニて候、大名ニ者餘榮成
事ハ無之物ニ候間、御仕置を專被懸御心、交々ニ御慰ハ可然存知
候、大隅守殿江以書状申入候得共、比旨急度可被致言上候、恐惶
謹言、

十月十六日

(平)
松 隱岐守定行
伊勢兵部少殿

新納右衛門佐殿

230 追而中人候、然者伊集院熊千世身体之儀先日野州老御上洛之刻、以書狀申入候、此等之儀此節何とぞ相濟申候様奉頼候、尚使之者可中上候間、不能詳候、恐惶謹言、
(寛永十一年)
閏七月十日

北郷佐渡守

(貞昌)
伊勢兵部様

久加判

參人々御中

231 以便、筆中越候、仍其許若キ衆犬山被致候処、手打村之市左衛門下人大助儀橋口茂右衛門怪矢に射被申候故、茂右衛門即刻鉄炮腹被仕候由、右大助相果候付、鉄炮腹仕候半与存候、さりながら口上覚極而相果候通不相見得候条、右之通細々可被申上候、恐々謹言、

横目頭兼務

十月廿日

町田源右衛門

久寿判

横目頭

島津又七郎

久英判

下飯 横目衆

232 (久子)
一 島津大膳被申分色々御吟味候間、極月廿七日ニ被仰出候者、大膳

喜入名字ニ而撰津守殿二男ニ可被罷成、知行千五百石被遣候、屋敷ハ島津三郎左衛門殿家共被下候、被申分者養父殿儀ニ候、殊ニ彈正殿死後之事候間是非御沙汰可有之儀ニても無之上意候而兎角爲御聞不被成候、

一 彈正殿事者大膳中分之外別段之儀御座候而代者御削候而下總養子ニ島津三郎左衛門殿被仰付、知行七千七百石餘被爲給、極月廿九日ニ移替ニ而候、外ニ三千石者彈正殿方江御姉様被遣候而以後之加増ニ候間、彼跡者御削ニ付候得者御藏人被召成候、余之儀者後便ニ可申入候、先風説聞召無御心元候半与存、有増申進候、
奥略久

万治四年

島津図書

正月二日

久通判

鎌田藏人様

人々御中

右鎌田氏ニ有之

233

覚

一 惣次郎江異見之儀者不及中、召列候者共置目之儀存寄之[]無用捨可被申候事、

一 銀子入候など、申候而公界闕候はん様ニ諸事可被申付候、但[]を被見合、一身之花麗ニ徒之仕方無之様分別可爲肝要候事
召仕候者共貴所不随者[]有之者、此度之儀者理非之不及沙汰則可被加成敗候事、

正保三曆十二月廿七日

北郷佐渡守判

北郷吉左衛門殿へ

候、其段々近年之儀者御存之儀候間得不及申候、程遠成行者御失念可有候条細々申上候、龍伯様御家督候御時より幸侃以外之をこられ候事龍伯様、惟新様数年ニ御覽付候得共御あひしらひ被成候而被召置候、次第ニこそり申候事諸人見及候得共、御両殿様江御内儀ニ申上人老^茂無之、結句幸侃^江皆ついせう仕体候処、比志島紀伊国貞、鎌田出雲政近はかきを不見合、御両殿様江御内談為被申上由候、其時分より之儀我々若輩之儀御座候つる故、中々不存候、左様候而太閤様御国御発向以後幸侃自太閤様御直ニ知行ヲ被遣、大身ニ被成候付、弥御国ヲ我ま、に被仕、御家危く成候付、御親類之内より^茂御用心ニ^而御内談被仰事不罷成、紹益老^江者被仰知候、右馬頭殿^{島津}征久^江杯^江者近き比社被仰候体ニ御座候つる、高麗^江御渡候前ニ相良日向長辰、新納遊前^江杯^江者被仰聞候、新納拙齋、伊集院抱節^江者それより以前被仰知候、就其拙者^江者為被仰付儀共御座候つる、我等伊勢雅樂入道任世親^江ハ自^{久保}惟新様被仰知、一唯公又一郎様御縁與之儀ニ付是^茂先之藥院を御頼候而太閤様江御内儀共被仰上候、御使仕候条々段々色々之儀御座候得共長々數候間、大形申上候、於高麗如御存五六人被仰聞、誓詞共御させ候而從高麗被成御帰朝、於伏見きとく成時分幸侃御果候而御家無異儀候事偏ニ天之御教ヘニ^而御座候、其時分者如何可有御座かと我等式ハ存候つれハやかて石田治少三、成弓箭被取起候時迄幸侃存生候而御家者可相果申候処、妙不思儀成御事申上^茂疎ニ御座候、扱又関ヶ原之合戰破レ申候而日本一統ニ罷成、御国計御取付候事難成儀ニ^而先鎌田出雲政近為御使被仰上、御佗言御中候処、無殘所被聞召分、御上洛候得、少^茂御別儀有御座間數由被仰出候間、出雲罷下、其段申上候得共、奉始龍伯様、諸人同心無之、却而出雲

ニ諸人不審を掛候得共、少^茂ひるみ不被中、是非ニ被成御上洛尤候由被申通候得共、色々ニ^而御上洛余り御延引候間、先御志知^{本ノマ}之如くニとて紹益老上洛させられ其上ニ^茂も御上洛可有之御様子ニ^茂無御座故、天下ハ御人数を可被指下御内意之由風聞ニ付、出雲政近、紀伊国貞、惟新様^江被得御内意、押返し^江龍伯様^江御意見候処、源次郎忠貞、加藤清正殿^江申合、御国をくつかへすへきからくり候儀証文共申候而龍伯様^茂其時はたと前之御分別被成御替、御二殿様御一味ニ被成御談合、即源次郎兄弟御成敗候而事故なく御家日出度相統、黃門様如此御位ニ御のほり候、不大形日出度ニ^而御座候、右之被成御氣遣候事昨日、今日之御事ニ^而御座候、御国^江人多御座候得とも近代一大事之時骨身をくたき人の惡ミを不顧、御奉公被中候者右兩人ニ^而御座候、如此忠節之跡ニて候間、紀伊之跡を御立、御祈念ニ^而茂御座候、若跡を御立候共^{國隆}宮内少子^{彦四郎國友}者御無用ニ定、心持親ニ可相似申候間、是は島を御出し無之出家ニ罷成候様ニ尤候哉、比志島監物事幸侃^江甥ニ^而候、彼親清安与申候者幸侃弟ニ^而候故、御内をはなれ幸侃^江相付、高城^江地頭ニ^而庄内^江被召向候時も殊之外御敵仕候得共、監物親左馬助者親ニ相はなれ鹿兒島へしかと相詰、御弓箭中^茂御奉公被申候、比志島之惣領ニ^而候間、定彼家^{右京義持}子ニ相渡御意ニ^而候ハ、忝存候而紀伊跡可相統候、去年御成前より久敷馴中候而見中候、御用ニ可立人ニ^而候、跡を御立候共知行杯ハ勿論多ハ入中間敷候、前分限ニ^而候つる、五百石ニ^而茂可然候はんかと存候、宮内少事野心などにて御成敗候ハ、中^江其跡御立候儀有間敷儀候へとも是は其身不分別ニ^而時々老者役仕、種々一國^江おこひ惡候付如此被仰付候間、宮内少者一扁御させ候而紀伊国貞忠節之跡を御そた

龍与二筆令啓上候、然者御内之内村半平儀十四歳之春之比より兄弟之致契約借老之契不淺申談候処、不慮ニ此一乱令出来、互ニ敵味方与成て日比之契空く一命を主君之為ニ鏑之鋒掛て後世ニ名を残さぬ事を思ひ、雖然此三ヶ年か間、互ニ申馴候言之葉亦者不致対面、空く修羅之街ニ落ぬ事歎かしく儀不過之候、哀願くハ人將之御免を受て一日之対面御免候得かし、然し対面之節ニ至て死を共ニせんとにはあらし、日本之大小之神祇別ニ八幡大菩薩毛頭表裏無御座候、恐惶謹言、

十一月五日

春田主左衛門

伊集院掃部之介殿

矢文令披見候、然者内村半平ニ御対面為御所望御状得其意候、誠ニ以御志之程感人候、昔ハ世之治乱度々成と申せともケ様成儀終ニ不承候、御志を思ひやり明日於柳川原可有御対面候、不及委細令領掌候、依而返書如斯御座候、恐惶謹言、

十一月五日

伊集院掃部之介

春田主左衛門殿

(家久)
從黃門様為御使吉田次郎兵衛殿被罷下候間一筆令啓候、

一昨十八日御参内御座候而薩州様初御禁中江被成御参、日出度奉存候明日一日於御城御能御座候、近日又大阪江御成之由候、如此候ハ、聽而御隙明可為還御との取沙汰候事、

一於其許被成御談合候御借銀返済之儀ニ付諸上上知行之儀御国江被仰遣候、其御返事渋谷四郎左エ門殿・児玉筑後守殿被罷登候而被申上候、於御国も皆々被申、重々ニ申上候内ニ夫婦ニ而在江戸之

衆御賦方ニ銀子入申候間、先此節ハ町出駿河守殿我等兩人ハ最初

より御供申候間、此分ニ而被召置、其後被召寄衆ハ女房衆御国被仰付允候由上聞候処、諸事改儀候間、ケ様ニ可有之旨被仰出候間、其許夫婦之衆江此由可被仰渡候、委細者御国江被仰遣候条書之帳面有之儀候間、以其趣可被仰達候、誠ニ此節者腰之刀を活却ニ而成共御用可被立時節ニ候間、如何様ニも候而堪忍尤候由被仰渡候鹿兒島衆ニ茂知行上候上ニ刀ニ付置候金具をはつし可致進上之由被中上候書立ニ而参候、一段被成御感事ニ候、下々少し貯共有之衆茂成次第少ツ、成共銀子借上可申之由内々中候由候間、誠ニ御譜代之御国ニ候故、如此候儀感入候、皆々御知行其上候儀、少茂迷惑かり候而無之由候、奇特千万との事ニ候、

一御借銀ハ八千貫目余ニ成候上、知行ニ而も漸利なし候而少し本銀御成候様成御算用ニ候、心安夜をも寝て中事ニ而無之候、諸人碯与氣を替候而此中朝夕汁を添候を塩ニ而たべ候ほどの心持ニ而無之候ハ、調間敷候と存候、能々其元之衆ニ茂以此心得可被仰達候、恐惶謹言、

(寛永十一年)
七月廿日

伊勢兵部少輔

(政統)
鎌田出雲守様

貞昌

人々御中

謹而致言上候、然者比志嶋紀伊守国隆無為至極之故、嚴敷被仰付、後代諸人之見せしめに御行候儀御分国之儀者不申、他国迄茂御尤之御沙汰と申候由候、誠ニ一身之無道故数代之家をたやし候事無念又ハ先祖江之不忠中々可申様無御座候、就其我等久敷存つもり候得共、色々思案仕候故未中上候、弥存寄之儀候間先申上候、如御存先之鎌田出雲、比志嶋紀伊事諸人ニすぐれ御奉公為仕人ニ而

て候ハ、君之道にかなひ可中かと存事候、人の家をたやし候儀、上、中、下よりすなけかしき事候付、忠節の跡を御そたて候而彼家御つ、け候ハ、御家之御祈祷可罷成候、此段老中衆江も可然与思召候ハ、為御意被仰出、又皆々衆之被申様ヲも上聞御尤奉存候、此旨可然候様御披露所仰候、恐々謹言、

寛永八年

閏十月廿五日

伊勢兵部少輔

貞昌

仁礼蔵人殿

24

覚

一我等儀拾貳歳之時水俣於御陣致元服、從其惟新様御側江混与被召仕、肥後八代江毎數年被召列、十七歳ニ而後入致御供、手合ニ高城与申城御攻落候時、致分捕、惟新様江頭掛御目中候、又從府内御人数御引取時、清田之人数出候而夜中ニ惟新様御先ヲ取切候而若キ衆働候而追掛敵式人討中候、一人ハ久富木津之介被討申候、一人者我等討中候、十八之歳又市郎様太閤様御供ニ而被成御上洛候ニ被召列、二年致在京帰国候處、又關東御陣ニ付又市郎様御參陣候間、我等も致御供、關東御陣相添^イ又市郎様御帰国候處、一兩年之間御座候而又高麗江日本御人数被指渡候、惟新様、又市郎様御渡海ニ付我等も罷渡、又市郎様御側ニ被召仕候處、不慮ニ御他界ニ付御死骸ニ奉附致帰国、雅楽入道も相果中、誠ニ哀成体ニ而飯野江曳入罷居候處、又市郎様御跡次之儀、惟新様、龍伯様御談合を以、又八郎様江被仰渡候様ニと、太閤様為御訴訟御上候間、我等も可致御供之由平田左近將監殿を以從龍伯様被仰

聞候間、御供仕候而罷上り太閤様御前無異儀相済申、高麗御渡候間、直ニ御供仕、六年罷居日本惣人数ニ所ニ高麗より御帰帆候而直ニ伏見江御上り候、致御供其時分幸侃被成御成敗、庄内陣中相詰申、日夜御奉公仕候事、

於高麗小西撰津守殿取巻番船後卷、立花飛驒守殿、寺沢志摩守殿、高橋主膳正殿被仰合被召掛候處、敵大船ニ而相戦候故、被召負、立花殿、高橋殿人数過分被相果候、此方之人数も船を被焼刻、樺山美濃殿、喜入撰津守殿其外曆々衆五百人余宗对馬守殿陣江被明退候跡ニ被取籠候を番船共取巻候而誠ニ籠之内之鳥之如く難遁体候出、小船を見付式三人取乗候而落果候衆唐島之瀬戸ニ而御船江參逢委申上候間、我等、又八郎様御船ニ乗罷居候而中上候ハ、曆々之衆五百人余御拾候所ニ而者無之候間、先小船ニ而罷渡、如何様之体ニ而候哉見申候而可中由有馬次右衛門、鯨島筑右衛門同道いたし船を乗出し一里程參候處、惟新様為御使五代勝左衛門被遣、我等者又八郎様御側ニ可被召置候間、勝左相替可罷戻由被仰聞候得共、中途迄參候而御意とハ乍申可罷戻儀如何ニ存、五代勝左も同道申候而一日一夜ニ彼衆被居候島江夜半程ニ參懸候處、番船取巻候而船毎ニ火を燒候而罷居候故、心易罷通儀難成候而磯涯をつたひ城江船を押付候而籠城衆江取合申候而迎船を可遣候間其心得候而可被相待出申、則船を押戻し唐島江參候而此由申上候得者、此人数如是成行候事者小西殿故之「小西殿より迎船御遣尤之由寺沢志摩守殿杯就被仰、松浦肥州、大村殿、小西殿より迎船被遣、島崎ニ而番船不被存寄様くり取候而五百人余之人数被相助候其時ハ我等江惟新様より別而御札被仰聞候、其時被致難儀衆各被罷居候而被存候、御帰国之時分五代勝左衛門、有馬次右、鯨島

筑右杯^江為御褒美御知行被下候、我等者御斷申候付不被下候事、

一子之年^ニ而候つるや我等知行餘り少高之間老万石^ニ可被召成由從黃門様雖被仰出候、御知行つまり候時分^ニ而候間、先々可被差置候、手前於難儀者重而御佗可申上候由致言上不被下置候事、

一從黃門様御前^江御知行式千石有御給由野州老御存知^ニ而被仰出誠^ニ御心付不淺、于今難忘奉存候、此御知行之儀^茂我等達^而御斷申上五百石御給^ニ而千五百石者御返上候事、

一高麗より御歸朝之時分、於伏見前之鎌田山雲殿、比志島紀伊殿^{（政近）}^{（国貞）}^江御

知行千石ツ、被給候、我等も同前千石被下候得共、右兩人之儀者久敷御奉公人^ニ而候、我等ハ若輩^ニ而過分之知行被下置候間、可被召置候由申上、其時分も返上申候事、

一諸士并之上地六百石餘上置候事、

一薩州様御一門御懷様^江御參府時分、我等夫婦^茂致御供当年十七年相詰候事、

一其時分夫婦^ニ而御供被申候衆鎌田左京殿、仁礼藏人殿、町田駿河殿、伊東肥後殿、谷山孫右衛門殿、有川平右衛門殿、此衆^江者時々在江戸合力米被下、鹿兒島罷立候時分、藏人殿、左京殿兩人^江者米五拾石ツ、在江戸中年々^ニ可被下出、我等^江者百石ツ、可被下出候つれ共、先我等者可被召置由申上、不被下候、其時分鹿兒

島^江御座候御老中野州老、喜入摂津守殿、比志島宮内少輔殿^ニ而

御座候、左様^ニ御座候^而藏人殿御歸国之時分、知行百石被給候、

鎌田殿、駿河殿、有川平右衛門儀者米三拾石ツ、被給候、駿河殿ハ御歸国之時分余之衆より永々被相詰候^而知行式百石被給候有川平右衛門者佐土原より參候衆并之知行取渡候、彼是右三拾石之米替として知行百石被下候、伊東肥後殿ハ父子面々^ニ被召仕候

とて別方より息^ニ右衛門殿^江米五拾石ツ、每年被遣候間、肥後殿^江

者被存間鋪由候つれ共、夫婦少之間とは乍有、在江戸仕候間、少々手付候様^ニと被申候付、知行式拾石被給たる歟と存候、谷山殿^江茂同前^ニ候事、

右之条々程遠儀候間、御存知之儀も常々^ニ者思召被寄間鋪候、又貴公御若年之時分之儀者尤御存知有間敷候付、細書申上候、可被聞召置候事、

寛永十六年六月六日

伊勢兵部少輔貞昌

川内泰平寺薬師堂再興^ニ付御分国中爲勸進、使僧被相廻由候間、不依貴賤心落可人勸者也、

慶長元年四月二日

民部少輔山田有栄

因幡守 川上久国

佐渡守 北郷久加

図書頭 島津久通

御分国中

諸所

石水引泰平寺御格護之文書已未正月廿四日拝見与

樺山家家譜之内抜書

善久嘗寄心於歌道、兼嗜蹴鞠、是故屢拜謁近衛殿御家門且賜玉

翰、年来古今集依之伝受為願望蒙台許矣、因^レ而^レ集宝墨記後、

古今集伝授之儀連々懇望之由不斷光院物語候、惣別此道聊尔^{イ誰}誰無之事候、年来執心之由大切候間免之候、然者此本写留聽

而於本者可被差上候、猶不可有疎意候也、状如件、

三月十三日

御判

樺山安芸入道殿

247 追而申入候、進藤左衛門太夫為御使被召下候間、万々御取成共憑存計候、

在因之御種々御懇志共不知謝所候、仍承之間道御伝受之儀申調候此比、大閤様依御不例御自筆難成候条被差上御本候之間、於其方御書写候て則此便に可有御返進候、被遂御望之事先以日出候、委細之段岩崎新介可中候、恐々謹言、

三月十五日

清

樺山玄佐居士

尊丈

248

猶々彼抄之儀卒尔ニ外見他言之事ハ無之事候間、其分別專一候よし、

彼抄物無返上、子孫之守ニ家ニ可被置之趣得其意候、息執心之時者雖為何節案内次第可調免状候、不可有疎意候也、状如件、

六月十二日

判

樺山安芸入道殿

参

249 当国寺社領事、以御下知令勸落候、雖然先年御動座之刻被居御陣候之条、不混自余寺領^{別紙録}事、如先々被仰付候所、全寺納可被抽懇祈之由候、恐惶謹言、

但大門口川涯迄御免地也、

天正廿

町田出羽守

九月三日

久倍判

泰平寺

右水引泰平寺御格護文書己未正月廿三日拝見写

250

其以後者打絶不能音問、御床敷候処、幸侃迄之返札ニ具示給恐悦不^{本ノママ}少候、仍御所持之御茶碗々有増幸侃迄申入候処ニ則被申下候哉、被成御上候、殊更何れニ候ハんと御念被入候、所持之茶碗ニ被上候、誠ニ御真実之体難尽紙面候、御秘藏と云留候儀如何候得共、御志之事候間、二之内一勝物此方ニ留候、寔ニ狼籍千万秘藏此事ニ候、其元御数寄心深覺候、則一ツ之茶碗本之家へ入返進候、隨而為馬代黄金拾兩進入候、表書状之便迄候、恐々謹言、

石治少

九月十五日

三成在判

伊集院肥前守殿

入々御中

251

猶々御氣力如何候哉、承度奉存候、

御札目出令拝見候、如仰龍造寺被討捕候之条发元御勢之事不及申候、仍高木江被罷渡候ハ、隈郡境吉松与申所ニ罷居候、為御存知候、孫四郎殿ニ以別紙申度候得共、先々日用書候、余者奉期後宜候、恐惶謹言、

卯月十二日

忠虎

新納栖雲公

参貴報

裏ニ

北郷弾正忠

一九月五日同十日同十六日之書狀具ニ令披見候、先々其元兄弟親類衆中無何事之由大慶ニ存候、此方茂同前之儀ニ候、就中長松殿兄弟ぞくさいニ候、弟ハ「かさをかゝれ候故何々散々ニ候、かミ杯者目より上一ツニ成迷惑かりニて候、母子共ニまた然々なく候貴所在所大風ニ損候家先上ふきをかりニ相調候時分次第ニ又可相調出徳介も中候、

出銀なども難成儀ニ候得共、衆次ニ可相調徳介も中候、度々如申候、向度之大風ニ取納なども引入申候、是も衆次と者乍申、家内可難成由佗言申候、

御暇之儀いか、と存候、涯分無油斷御奉公可被相勤候、恐々謹言

十月廿七日

仁礼藏人

今井一兵衛殿

御宿所

親景判

一書令啓候、從昨朝少々腹中相煩、今朝者紅葉山御供中候、仍而内々如御約束来廿日ニ者下屋敷江必々可奉待候、短日ニ罷成候間昼より御出尚以可承候、伊勢兵部可被召連候、恐惶謹言、

八月十七日

正宗判

松平陸奥守

松平薩州様

人々御中

政宗

猶々御門犬御意之ことくにほえて渡し申て候、くわしくハ根占木藤殿中あるへく候、以上、

從惟新様御書被下候、謹而奉拝受候、先度御鉄炮なをり被仰付、

大方あたりもなをし立進上申候、然々無御座候ハ、幾度も可被仰

付由御申可被成候、隨而者我等つほの渡し儀中上候処、かたぬき御持せ預り候、大事之御道具ニ而心遣ニ存候得共、先々渡し可申候、次者道甫近日京都江御上せの由御意候、内々如申候我等壺頼可申覺悟候、近日此方より道甫所をもたせ可申候、又我等そめつけのちや碗入茶入可被成御覽之由御意候、自何安き儀候、則此使ニ持せ可申候、御あけあるへく候、恐々謹言、

二月廿二日

種子左近太夫

南郷覺左衛門尉殿

久時判

(家久)

(義弘)

一少将様於御上洛者、惟新様御下向も程有間敷候、御心遣入間敷候、一京都御仕合日増珍重候、拙者事も以御影外聞能候、内府様江度々被召出候、殊ニ二月十八日ニ御服拜領仕候、難有儀ニ候、併惟新様御高恩までにて候、恐惶謹言、

三月廿日

旅庵

五代右京入老

御報

先年日向以来返地不足候、当時者筆をも被取、毎々御辛勞候之条水田式段中受進覽候、爲御存知候、恐々謹言、

九月十七日

鎌田出雲守

大脇孫四郎殿

政近判

猶々百姓太郎出銀之儀前々の如く被仰付尤ニ候、五〇者御使令

申候、以上、
御狀令拜見候、仍當年出物其地衆中上納皆済被成候、乍勿論御肝煎以早々被相調尤之儀候、此地出物藏衆より皆済受取彼御使江被相渡候、爲御存知候、恐々謹言、

霜月廿三日

本田甲斐守

親良判

新納刑部少輔

忠□判

伊地知遠江守

參藏報

238

尚々知行ちと可被人御念由候、爲御心得候、以上、
弟子丸越後入道殿江爲御加増高六十石吉田へ可被遣由前々中渡候、此外ニ爲替地高五十石同所江可被成御支配之由御老中より申遣て候、爲御存知候、恐惶謹言、

辰六月十七日

久國判

川上式部太輔

伊勢大内記殿

久國

蒲地備中入道殿

人々御中

239

遙久不申通候、抑今度京都依不慮之錯乱諸事無外方故、匠作江以使札申候条、於其元馳走段偏頼入候、將又扇子五本雖相送候、進之候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

天正十年

近衛殿下

240

十月廿六日
島津中務少輔殿
御判

今度古今集伝授之事雖不淺儀候、以御懇志令成就之段過分至極候、誠々末代之面目不可尽筆舌候、仍乍些少金拾兩銀二上兩并水田納之堅約令進覽候、聊鋪御祝儀計候、恐惶謹言、

天正十二年

家久

七月十日

(梅山)
玄佐公

參人々御中

241

如貴意今度古今集之儀被仰下候之条、從宗祇公近衛樺閣様御伝授同太閤様御宗門様代々之御抄物書寫進覽、以其次而乍斟酌令口舌事、獸之似吼雲上、然者爲御祝儀御太刀御馬此上金銀卅兩秋之榮露命之仙藥等、愚老存生間拜領、過分至極、雖尽短紙候、諸書恐惶謹言、

七月十日

玄佐

(家久)
中書様

參御報人々御中

242

今度秀吉其国鉾楯之段無心元候、然者和睦之儀是非其暖度候、就夫差下一色駿河守際入眼候様对義久異兄簡要、於昭光可申候也、

天正十四年

公方義昭公

十二月四日

御判

(家久)
島津中務太輔殿へ

今度身上之儀言上候処、佐土原城并本知可返付之由候之条可被得其意候、謹言、
(天正十五年)

五月廿七日

秀長御判

島津中務少輔殿

右五通桃山家ニ有リ

(家久)
誠中務不慮仕合不及是非候、然其生死有習候之条分別專用候、就其藤堂遣候、諸事談合可然候、其方覺悟次才向後引立可申候間可成其意候、於子細者委曲藤堂可申候、謹言、

天正十五年

六月十日

秀長御判

島津又七郎殿

進之候

右相良頼安家ニ有リ俗名源五左衛門歟

今度渡海之儀、炎天之時分辛勞思食候、赤国働事、最前如被仰付候先々見計入精、弥以無油斷可申付候、尚松井藤介・竹中貞右衛門耐可申候也、
(慶長二年)

文祿元年

七月十日

御朱印

島津又七郎とのへ

急度被仰遣候、於京都被思食候ハ名護屋ニ三十日も御座候而、先々ハ御人数をも被遣、其上ニ而可被成御渡海之思食候得共、名護屋江被成御着座候得者、片時も急御渡海有度候之条、各手前船有

次才儘ニ奉行相副、到名護屋可指越候、御自身可被成御請取候、

渡海之衆人数之儀者、船数ニ而可相見候間、荷物悉上置、商人船迄手前持内相改可指越候、此時ニ而候条、少茂於油斷者、其曲有

間敷候、委細安国寺西堂、寺沢忠次郎兩人ニ仰含被遣候、尚以各油斷候而船越候ハすハ、直手船計ニ而、一万二万にても、高麗江

無御座、すくに大明国江可有御座候条、八幡大菩薩各こされ候ましく候也、

文祿二年

卯月廿八日

御朱印

島津又七郎とのへ

美濃部四郎三郎・山城小才次令帰朝、其地之様子具ニ被聞召届候、番普請無由斷旨辛勞候、然ハ人数之儀、家中番替ニ申付、如御掟可在番候、知行所務以下入念、兵糧無斷絶様ニ可相嗜候、被越置御藏米、無手付、御藏可入置候、少茂召仕候ハ、可爲曲事候、但古米ニ不成様ニ人替、於員数者無相違様ニ堅可申付候、猶淺野彈正少弼・山中山城守可申候也、
(長政)

文祿二年

五月十九日

御朱印

島津又七郎とのへ

爲音信、生絹帷子ニ、秀頼へ同帷子ニ、高麗雉子六、政所御上へ同帷子ニ宛名々到来、喜思召候、長々在番辛勞之上、如此氣遣、誠被成御祝着候、猶長束大藏太輔可申候也、
(正家)

文祿二年

七月十日 御朱印

島津又七郎とのへ

其国爲在番相殘、打続令苦勞儀被察候、此比弥其元靜謐之由尤候、

雖無差事、使者被遣候、猶追而可被仰遣候也、

文祿二年

十一月四日

御朱印

島津又七郎とのへ

270

長々在陣辛勞、不及是非候、仍帷子二被下候、(視脱カ)令着、弥可入精候、
就其御仕置等之儀、以御一書被仰遣候、猶熊谷半次郎・水野久右

衛門可中候也、

文祿三年

五月初日

御朱印

島津又七郎とのへ

271

猶以、御使者可被遣處、岡田相越候条、具二被仰含候間、能々
可承屈候也、

其方手前居城普請等之儀、度々如被仰遣候、弥入念、丈夫二可中付
候、大明無事之儀、惣別正儀二不被思食候付而、城々被仰付各在
番候、九州同前二令覚悟、有付可有之候、東国北国之者共令在洛、
普請等仕儀校候得者、其地者心安儀候、重而諸勢渡海之儀者被仰
付、赤国を始、可被成敗候、於其上者大明御偉言申上候、隨其可
被仰出候之条、不可有油斷候、猶増田右衛門尉、石田治部少輔可
申候也、

文祿四年

九月廿三日

御朱印

島津又七郎とのへ

272

其地長々在陣、殊寒天時分、辛勞察思食候、仍小袖二被下候、然
者来春被成御渡海、一揆撫切被仰付、可属平均候、其以前幸尔之
動無之、城々堅固二相拘、兵粮貯可仕候、猶熊谷半次・垣見弥五郎
可申候也、

十一月十日

御朱印

島津又七郎とのへ

273

長々在番辛勞之至候、番普請等無油斷旨、被聞食屈候、寒天時分加
養生、勇健之儀干用候、多人数手前三部一、小勢者半分令在陣、
下々替々本国之用所可爲相叶候、明後年関白殿先名護屋迄動座二
而、筑前中納言・備前中納言令渡海行之儀可被仰付候、其刻人数
奔走、別而可抽粉骨候、来春早々御兵粮可被差渡候、猶淺野彈正
少弼・山中山城守可申候也、

十二月廿日

御朱印

島津又七郎とのへ

274

就被差遣淺野彈正、被仰出候、
船相揃次才、可被成御渡海候条、高麗有之舟共儀ハ不及中、面々
在所江茂申遣、此時候間、船數有之様入精、可有馳走候、於名護
屋可被爲請取候、一般も多程可爲手柄候、然者一手之組々を仕、
健成奉行相副、彈正相加奉行、名護屋江可差越事、

一各兵糧事、多貯候程可爲手柄候、左候とて兵糧無之候を所持候様申成、下々迷惑させ候者、相届間敷候、然者何迄之兵糧有之通、指日限、人数も各如在二面有間敷候条、当分軍役程無之候、而茂不苦候間、有次才相改、一札を出、兵糧手寄々ニ而可受取事、
一猶以船到米次才、被成御渡海、御仕置可被仰付候間、弥以不可有油断候、委細淺野彈正少弼可申候也、
(文祿二年)
慶長元年

二月九日

御朱印

島津又七郎とのへ

今度於唐島表番船百六十余艘伐捕刻、其方自身碎取切乗三番目船唐人、不殘切棄由手柄之段無比類候、殊更不焼其船、日本江差渡儀御感不斜候、何茂婦朝之刻可被加御褒美候、猶増山右衛門尉・石田治部少輔・長束大藏太輔・徳善院可申候也、

慶長二年

八月九日

御朱印

島津又七郎とのへ

尚以、寒天之刻、辛勞不及是非候、就其小袖一、道服一、被遣候、可令着用候、委細寺沢志摩守可申候也、
(正成、公高)

今度大明人蔚山江取懸之由、注進付而、爲後卷雖押出候、敵引退之由候、既自此方も安芸中納言・増田右衛門尉、因幡・但馬・大和・紀伊国衆、九鬼父子等可罷立之旨、雖被仰付候、右之分ニ候間、不及是非候、然者仕置之城々普請、弥文夫ニ申付、兵糧玉薬沢山ニ籠置、少茂無機遣之様ニ可令覚悟候、婦朝之者共者、弥敵

様子聞届、其上普請申付候而より、可致婦朝之由、被仰付候条、可成其意候、猶徳善院・増田右衛門尉・長束大藏太輔可申候也、
(玄以)
(長盛)
(正家)

慶長三年

正月十七日

御朱印

右十三通御記録所ニ有之

島津又七郎とのへ
(豊久)

277
桃山家ニ有

其表大明人并番船罷出由候間、藤堂佐渡守被差渡候、敵於在陣仕者、在番衆之船手各被遂相談可成程可被及行候、其方一左右次才九州表江被遣置候船手之衆其外何茂御人数急度可被差渡候、敵於退散者最前徳永法印・宮木長次江如被仰合候、諸城早々釜山へ被引取、夫より可有婦朝候、方端藤堂ニ被相合候間、藤佐次才ニ可有覚悟事肝要候、恐々謹言、

慶長三年

十一月廿五日

輝元判

景勝判

秀家判

利家判

家康判

高橋九郎殿

秋月三郎殿

島又七郎殿

伊藤民部太輔殿

相良宮内太輔殿

先書申入候、伊集院源次郎、于今不致下城之由、不届成儀共候、依
(正成)
 之寺沢志摩守方差下申候、爲自今以後候間、志摩守被相談、自身
 有御出陣、被誅果心候、委細彼口上申渡候、恐々謹言、
 慶長四年

八月廿日

家康御判

島津中務太輔殿

今度庄内衆人数等被人精、加勢之由尤候、弥油断有間敷候、委細寺
 沢志摩守可被申候条、不能具候、恐々謹言、
(慶長四年)
 右同

十二月廿四日

家康御判

島津中務太輔殿

樺山家三右

急度申入候、各山田表被追加勢儀、内府様江中上候、寒天之刻、
 兵粮以下被届儀も不可成時分候条、過分ニ被遣候儀者御無用存候、
 最前中候通、上下一同之都合可然候、自身御出陣之儀者、猶以重

而白是可申入候、則以御直書被仰候、恐々謹言、
(慶長四年)
 右同

寺志摩

十二月廿二日

正成判

島津中務太輔殿

人々御中

以上

一書令啓候、然者爰元御成御用意ニ付御廣間御成書院、御成御門

被成御企、指図出来ニ而甲良豊後守ニ申大工請取申候、就其先御
 門ニ取付候間、銀子百貫目程先々小判ニ而早々可有御持セ候、御
 廣間御書院之儀者七八月之時分より可取付候間、其入目之銀子者
 次第ニ可申上セ候、先御門ニ百六十貫目可入候、可有其心得候、
 御門ハはや取付候間、右ニ如申候、先々百貫目程早々御持せ可被
 成候、先口遣銀之儀申上セ候つる、それは此外ニ而候、爲御存知
 候、恐々謹言、

五月九日

伊勢兵部少輔

貞昌判

下野守

久元判

喜入太炊助殿

市来掃部助殿

御宿所

右御成ハ寛永七年子四月十八日同廿一日將軍家并大相国御成也、
 桜田御屋敷也、

急度申入候、今度高麗之雜説ニ付舟差渡可中候条、鹿兒島より有川
 仲右衛門殿乗船、其津之様ニ相まはり候はん間、貴所事茂有仲同
 船ニ御談合相定候之条、其校量專ニ候、扱貴所荷物之事おろし
 おかれ候て彼舟參次第つミうつされ候之様ニ才覚此時候、少茂御
 油断有間敷候、右ニ申候様ニ貴所事上洛ハ相留候間、如高麗渡海
 たるへく候、恐々謹言、

十月十四日

本田六右衛門

正親判

此所切レテ宛名不知
浜出民部左衛門殿可成

283 猶々相新殿茂同前ニ可被成判を遮而隙入事候間、拙者一人にて
申越候、以上

高麗表ニ江南仁指出候而御一大事相聞候、就夫御談合申度出候間、
早々此方江御越可有候、鎌雲州も此元江御座候間、夜白無隙談合
最中候、早々可被越事肝要候、いさ、か油断有間敷候、恐々謹言、

正月廿八日

桂太郎兵衛

濱出民左衛門殿

忠詮判

参

284 其許江長々被成滞留、辛勞之儀察入存候、然者縄瀬江御番之儀難
大儀候、此節今少被相閉目候而可然候、其外諸下知堅固ニ可被仰
付事肝心候、為御存知候、恐々謹言、

慶長四年

圖書頭

十二月廿二日

忠長判

増二斎

入田左馬介親増也

御陣所

285 先日御息孫左衛門殿被相越承候、縄瀬御番手之儀尤之御事候、則
入来院殿江老中使を被付候、其後いか、相済候様をも不承候、猶
以不審候哉、咲止候、入来院殿先日何程にか御申候つらん、無御
心元候、仍玉葉先三百放進之候、鉄炮之儀者鹿兒鳴より追而可参
候間、御尋候へく候、恐々謹言、

慶長四年

十二月十七日

伊勢貞昌判

入^{〔未〕}〔左方〕
相馬入様

御報

286

御寄合中佗之儀先日如承拙斎老相良新右衛門殿を以被仰候、各談
合至可然様ニ分別可申候、委曲御使江申候之間不能一二候、恐々
謹言、

慶長五年

圖書頭

二月六日

忠長判

入田左馬入道殿

御返報

287

如仰先年於豊州御忠貞無其紛子細候、殊更御息市正殿到高麗御戰
死之御奉公寔不淺儀ニ候条之次才老中迄可遂披露候、就中平地縄
瀬御勤番我々始終為存儀候之間、随分取合可申候、可易御心候、
猶巨細円教坊可有御演説候、恐惶謹言、

霜月十七日

新納武藏入道

爲判

相良新右衛門

長泰判

入田左馬入道殿

御報

288

芳墨披閱本望候、仍以孫右衛門尉殿被仰越委曲得其意、即遂披露
候処、御惑不斜候、如此不及謀略、近日易雖可相済儀候、各以御
調儀、從彼方角、忠節之仁於有之者、一かと可被付御手候、勿論不

可有他言非儀候間、御前へ披露之外者、從拙者爲存仁無之事候間、被得其意、御隱密尤候、又兩人江も爲後日之墨付遣置候、猶孫右可被仰達候間、不能細筆候、恐々惶謹言、

慶長四年己亥

伊勢兵部少輔

六月三日

貞昌判

入田左馬入道殿 御返報

未中馴候而令啓入候之事、雖楚忽之手候、風便難過故候、仍薩豐之間、自京都之以御媒介、一和被成候処、去年以來筑後表江長陣、刺御丹爲始義統御廻文、在々所々滿々候、然時者不單是非候条、畢竟可爲鉾楯候、就夫御進退之儀承及候、御本意事此時節候歟、以御納得於御返事者、御懇望之所可示給候、以其證跡令披露、何様一稜可致馳走候、後々以可御心安候、乍不申能々密々之御才覺肝要候、猶巨細自中途可被申達候之間、先令省略候、心事恐々謹言、

天正十三年乙酉

十月五日

忠元判

入田殿

參御宿所

上包

入田殿

參御宿所

裏二

新納武藏守

忠元

290

起請文

本ノママ

一度々申談儀倍於向後無暇可致入魂事、

一 至被拙忠貞者知行等之儀年寄衆江申達御安堵不可有疑事并於貴所許容人茂同可申調事、

一 近隣之人衆可被相催才覚、是又一稜之可爲御眞実事、

右条々若令違犯者

上者梵天帝尺四大天王惣而日本國中六十余州之大小神祇、殊者当国鎮守阿蘇大明神、薩州新田八幡大菩薩、開闢正一位霧島大権現、豊州惣廟田原八幡大菩薩、天満大自在天神部類眷屬神罰冥罰可罷蒙身上者也、仍起請文如件、

新納武藏守

天正拾三年霜月朔日

忠元判

丹後入道宗和

王林老

291

雖未申馴候令啓候、仍於高知尾入魂之由、度々承及候、肝要之儀候、如御存知寄之住宅候之間、弥於無二心者、至薩州可致取次事、不可有疎略候、扱者隣所之人數へ被廻計策、同心之方多々出来候之様分別專一候、殊至高以神文被仰合候段、是又頼母數存候、尚期後喜候、恐々謹言、

天正十三年十二月九日

家久判

入田殿

御宿所

292

天友

秀吉

猶々宗麟下向之由其間候、定羽柴殿可有入魂之間、此以前よりハ可事隱候之処、志賀方如此之心底不淺御頼母數候、自前も於京都夫者被差登候之処、羽柴殿被仰遣之儀共候き、就夫談合最中、委細者得使者へ令口入候之間、不能細筆候、乍重言加勢之儀度々延引候、依爲不憚儀如此候、さ候てハ当国之鎮守鶴戸、霧島

大権現御照覽、聊如在之儀無之候、爲御存知候、

遠方之儀候之処ニ使者被差越候、得其意、則於鹿兒島中遣候之間、延引之様ニ候、雖然一着之事爲可承合如此候、誠堺目以御辛旁之故、爰元迄被相支儀無比類存候、殊到志賀方別而入魂之儀候哉、肝心之至候、然者其表可被顯手遣之段相聞專ニ候、雖不中及候、被廻計策、(心)道驛ハ勿論、志賀一黨之事、此節可被一味之様、可被相調候、扱者向後得人数之儀不疎略、万一於及遅々候者、每事徒事候、爲御存知候、付而者、其表加勢近日三城表迄可指寄歟之由存候、毎度如此之儀不首尾之様候、于今雖失面目候、不憚子細候之間、不及是非候、定日之儀者、必高知尾迄可致注進候、可被得其意候、此上替篇目候者、是又可申進之候、恐々謹言、

天正十四年

六月十六日

家久判

入田殿

御返報

右式通島津中務太輔家久御狀也、

233

一態一筆申入候、のしつけ御作候て可給候、刀ハ二王三郎

一のしつけ之様子二尺六寸か五寸かつかハ太刀作さやハしさや小

刀ふせかうかいふせなし、

一さいくハ小十郎殿へ憑申候てさやハちとひらく被召候て何篇かた

きハ小十郎殿存知可有候、巨細者理七殿へ申候、

一力かわ弓かけ御遣し可有たのミ存候、恐々謹言、

七月十二日

秀明判

猶々申入候、のしつけ市若へ御持せ候ていそき被成候て遣し可

234

被下候、二王三郎ハ刀ちとみしかく候之間、は、きかけなかも有へく候、又此方より遣候小かちそへめし候て勝介殿あつらへ候てとき候て遣し有へく候、二王三郎もときし有へくたのミそんな候、此儀者右同人も中候之間せいニ入候而可給候、奉憑候、

態申入候、其元ミなく、無何事由承候て目出度存候、爰元もくそ城こたへ申候得共落城仕候てちやわんと申所迄御引取被成候、拙者も手などもおひ不申候、内衆ミなく、無何事候、城せめの様体こまかに書申へく候へ共、理七殿御帰朝にて候つる、細筆に不及候、ここ元人すくなにて候之間、市若又一人兩人被遣候て給へく候、藏右与三五郎あまりしんろう仕候之間一人つ、かハし申度、又もんめんぬのこわたあつく入候て兩人江遣し有へく候、小一ハやミとをし候之間あまりやくにもた、す候つる、御無用にて候、奚元初にちかひ中候て銀子入事迄候、物之いる御祈念りうくわん御無用にて候ふりすく仕て候てハ軍役も不成候、いきかいもなき事にて候之間御分別肝要に候、恐々謹言、

七月十二日

秀明判

猶々申入候、ふしつけの事一日もいそき御作候て可被遣候、又

々此方より小かちのわき刀遣候うへをちいさくめし候てつかな

りなどはそく候て刀は勝介殿へあつらへ候てときあけ候て可給

候、つかハもとの金つはめぬき水銀子は、き銀子しとめハなく

候、たしかにうけ取可有候、此分召入候て有へく候、とり皮御

まき有ましく候、又くわしく御帰朝候ハ、軍役きむく可有候之

間、作等迄も御念を入候て調可有候、御由断有ましく候、(又々)様申

上候、蘭源三郎替など各より被参候ハ、人など可被遣候、とか

く何篇ミなものの案なミに可被召候、ちかひ候てハ御無用にて候、
又々内衆おとこ女里人のこらす入筆申候、ミな／＼其元へ奉公肝
要たるへく將又申上候、比方へ渡茂右殿七月十日御着にて候之間、
其元へ兩度申越候、荷物之儀せんたく可仕候之間、可御心安候以上、

同弥次郎

田原孫右衛門殿

人々御中

秀明

猶々様成乱之時分者下之氣任之儀有之事候而至他領少も猥儀
無之様ニ可被仰付候、若氣任之候ハ、各可爲御越度候、堅可被
仰進候

急度令啓候、

一彼早打井伊兵少老江指遣申候、定而草臥可申候間、從其地かろき
衆兩人程被仰付、不嫌夜白船元へ參着候様ニ可被仰付候、

一先年諸縣郡 惟新様御配領大岡様御奉行衆以御覽諸縣之内秋月殿、
高橋殿江十四ヶ名程爲相付由候、其様子眞連坊被存候間被相尋被
成高付、早々御進上尤ニ候、吉利奎右衛門殿を以駿府江可被仰登
申候間、片時も無御油斷御才覚候而可承候、眞連坊之外ニ茂爲存
人可有之候ハ、御才覚此時候、

一今度之御左右早々被成御申と御惑ニて候、于今藏岡、穆佐、綾、
野尻より兎角無御申候、境目被召置無其驗との出合候、右四ヶ所
へ以別紙申渡候間、御届尤候、恐惶謹言、

霜月十日

三原諸右衛門

比志島宮内少輔殿

御宿所

重種判

先年於高麗番船懸合候而なむはい江多人数被罷居候つるを迎船被
差渡被繰取候時、被仰付衆之内、鯨島筑右衛門殿、五代勝左衛門
殿、有馬丹波守殿江爲御褒美知行三拾石宛御加増候、其砌同前ニ
御奉公被申候、高岡之衆中指宿十郎右衛門殿、又人佐助八殿比兩
人者右之知行被取渡候故、今度右之衆并之知行可被給由候間可被
成御支配候由中せとて候、勿論高三拾石之内四部一之上地算用被
引除、残り之高御賦可有由候、爲御心得候、恐惶謹言、

寛永四

卯九月十五日

山田民部少輔

伊勢内記殿

有米判

蒲地備中入道殿

人々御中

覚

一高六石六斗 本知行廿石被召上候

大迫郷兵衛尉

右者元和三年七月高岡衆中海江田才助与申人彼郷兵衛尉喧嘩仕候
処、当所衆中中山筑後さかへ刀ニぬかり果被申候間、海江田才助
腹被仕候、郷兵衛尉相手之故遠島被仰付右之年八月屋久島江被参
寛永元年十月被召直候、年数八年、

右返地未被下候、御佗之由被申上候、以上

宮原才兵衛尉判

寛永六年己五月十七日

四本佐渡守判

中神石見殿

原書以亡岩切清太實和本写之

明治二十一年二月十七日筆者

竹内勘助

児玉五兵衛

全年八月十日糺合済

平岡之隆

五代徳夫

既刊史料名

三十四年	第一集	薩藩政要録
三十五年	第二集	丁丑日誌(下)
三十六年	〃	(上)
三十七年	第三集	薩摩国新田神社文書
三十八年	第四集	一向宗禁制関係史料
三十九年	第五集	薩摩山田文書
四十年	第六集	諸家大概・職掌記原
四十一年	第七集	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記
四十二年	第八集	御登道中日帳御下向・列朝制度
四十三年	第九集	明治元年戊辰戦役関係史料
四十四年	第一〇集	伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並解説
四十五年	第一一集	管窺愚考・雲遊雜記伝
四十六年	第一二集	川上忠塞一流家譜
四十七年	第一三集	本藩人物誌
四十八年	第一四集	薩陽過去帳
四十九年	第一五集	備忘抄・実久公御養子御願一件
五十年	第一六集	鹿兒島県地誌上
五十一年	第一七集	鹿兒島県地誌下
五十二年	第一八集	薩藩舊上文章

鹿兒島県史料刊行委員会

五十音順

川越政則	南日本新聞社
芳即正	鹿兒島県立短期大学
北川鉄三	鹿兒島大学名誉教授
桐野利彦	鹿兒島女子短期大学
桑波田興	鹿兒島大学教育学部
五味克夫	鹿兒島大学法文学部
郡山良光	鹿兒島短期大学
小西四郎	前東京大学史料編纂所
犀川碇吉	甲南高等学校
竹内理三	早稲田大学
原口虎雄	鹿兒島大学法文学部
福岡武雄	南日本放送K・K
宮下満郎	鹿兒島県維新史料編さん所
村野守次	鹿兒島女子短期大学
桃園恵真	鹿兒島大学法文学部

薩 藩 舊 士 文 章

昭和五十三年三月十八日

発行 鹿児島市城山町一の一
鹿児島県立図書館

印刷 鹿児島市山下町四一八
鹿児島県教員互助会印刷部